

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ

昭和61年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

1987年3月

序 文

鹿児島大学の埋蔵文化財調査室が発足して第2年度を終るに当り、昭和61年度年報を発刊する運びとなった。

この年報に含まれる調査は、昭和61年2月から62年1月の間に実施されたもので、鹿児島大学の郡元キャンパス及び宇宿キャンパスの両団地にわたっている。調査件数は、発掘調査2件、試掘調査4件、小規模な工事に対する立会調査12件であるが、当年度以前に調査が行われ未整理のままになっていたものも3件加えている。

これらの調査結果は、従来の調査結果を再確認すると共に、これまで考えられていた以上に鹿児島大学の敷地内には広く遺構が存在することを予想させる結果も得られ、さらには宇宿キャンパスで初めて埋蔵文化財調査が実施されるという、新たな実績も生み出している。

昭和60年度に鹿児島大学の埋蔵文化財調査室が発足してからの2年間に、すでにかなりの数の発掘・試掘調査等を実施してきた。限られた面積の中で大学の施設整備を進めるために、調査された遺跡を保存する余裕がなく、文化財保護という面では誠に遺憾なことであり、調査に当られる考古学の専門家の方々にも申し訳けない次第であるが、施設整備に当っては埋蔵文化財の調査が前提という考えが学内に定着し、かつ事前調査が円滑に行われるようになったことは、調査室設置の効果であったと思われる。

それと共に、限られた運営費と数少ない人数でこれだけの仕事をこなして居られる調査室並びに関係部局の方々のご努力に、深く敬意を表するものである。

昭和62年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会

委員長 難波直彦

例 言

1. 本年報は鹿児島大学構内において鹿児島大学埋蔵文化財調査室が昭和61年2月1日から昭和62年1月31日までに行った調査研究活動の成果をまとめたものである。調査報告は昭和60年度分(昭和61年2～3月)を第Ⅰ部、昭和61年度分(昭和61年4月～昭和62年1月)を第Ⅱ部とする。
2. 昭和60年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査に便できるように鹿児島大学構内座標を郡元団地と宇宿団地とに設定した。その設置基準は以下のようである。
 - (1) 郡元団地では、国土座標第2座標系($X = -158.200$, $Y = -42.400$)を基点として一辺50mの方形地区割を行った(図版2参照)。
 - (2) 宇宿団地では、国土座標第2座標系($X = -161.600$, $Y = -44.400$)を基点として一辺50mの方形地区割を行った(図版3参照)。
3. 本年報で報告を行った調査地点については、図版2・3にその位置を示している。
4. 図版1に掲載した郡元団地の航空写真は鹿児島大学事務局の提供を受けた。
5. 付編Ⅰについて
 - (1) 本報告は鹿児島大学教育学部のカリキュラムの一環として実施された附属中学校敷地内遺跡の発掘調査報告である。教育学部社会科教室に保管されていたものを、調査者の河口貞徳氏と教育学部の桑波田興教授の了解を得て収録した。
 - (2) 掲載にあたっては原文を尊重した。
6. 付編Ⅱについて
 - (1) 本報告は昭和59年5月30日に鹿児島大学法文学部考古学研究室によって実施された鹿児島大学附属農場入来牧場の分布調査結果を報告するものである。
 - (2) 報告を行うにあたっては農学部附属農場の協力を得ることができた。
 - (3) 本報告は調査に至る経過を上村俊雄が、採集遺物の説明を中園聡が行っている。また、遺物の実測・写真撮影は中園が行った。
7. 付編Ⅲについて
 - (1) 本調査報告は昭和55年7月21日から同年8月9日にかけて鹿児島県教育委員会文化課によって実施された工学部機械工学科校舎建設予定地における埋蔵文化財発掘調査結果を報告するものである。あわせて、この調査と並行して実施された教育学部における試掘調査の結果も掲載している。
 - (2) 本調査地点は、昭和60年6月における鹿児島大学埋蔵文化財調査室設置に伴って設定された鹿児島大学構内座標によれば、郡元団地H-11・12区にあたる。

- (3) 遺構の実測並びに写真撮影は池畑耕一（鹿児島県教育委員会文化課・現鹿児島県歴史資料センター黎明館）・中島哲郎（鹿児島県教育委員会文化課・現川内市歴史民俗資料館）が行った。また、遺物の実測・写真撮影、及び遺構・遺物のトレースは坪根伸也・金子千穂枝（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）の協力を得て、松永幸男（同）が行った。
- (4) 出土土器の報告にあたっては、縄文土器・弥生土器・成川式土器・須恵器・土師器について土器観察表を付した。
- (5) 本文の執筆は1・3・5・付を池畑が、2・4を松永が行った。
- (6) 本報告の掲載にあたっては、鹿児島県教育委員会文化課の了解を得た。
8. 付編を除く本年報の執筆は、第Ⅰ部第1・2・4章、第Ⅱ部第2・6章を松永が、第Ⅰ部第3章、第Ⅱ部第1・3・4・5章を坪根が行った。遺構の実測は、松永・坪根・金子が行った。また、遺物の実測、遺構・遺物の整図は金子の協力を得て坪根が行った。遺物の写真撮影は松永が行った。
9. 石器石材の鑑定は中村淳子氏（鹿児島大学工学部）にお願いした。
10. 本書の編集は、上村の指導を受けて鹿児島大学埋蔵文化財調査室が行った。

目 次

第Ⅰ部 昭和60年度（昭和61年2～3月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	
第1章 昭和60年度（昭和61年2～3月）調査の概要	2
第2章 鹿児島大学郡元団地I・J-4区における試掘調査報告	4
1. 調査に至る経過	4
2. 調査体制	4
3. 調査の経過	5
4. 基本層位	5
5. 調査結果の概要	5
6. まとめ	5
第3章 鹿児島大学郡元団地Q-6・7区における試掘調査報告	7
1. 調査に至る経過	7
2. 調査地の位置と環境	7
3. 調査の規模及び調査体制	8
4. 調査の経過及び方法	8
5. 層序	9
6. 遺構	9
7. 遺物	11
8. まとめ	11
第4章 昭和60年度（昭和61年2～3月）鹿児島大学構内における立会調査報告	13
第Ⅱ部 昭和61年度（昭和61年4月～昭和62年1月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	
第1章 昭和61年度（昭和61年4月～昭和62年1月）調査の概要	20
第2章 鹿児島大学郡元団地J-9区における発掘調査報告	21
1. 調査に至る経過	21
2. 調査体制	21
3. 調査経過	21
4. 基本層序	22
5. 遺構	23
6. 遺物	24
7. まとめ	24
第3章 鹿児島大学宇宿団地I-8区における発掘調査報告	25

1. 調査に至る経過	25
2. 調査組織	25
3. 調査の経過	25
4. 層位	26
5. 遺構と遺物	26
6. まとめ	30
第4章 鹿児島大学郡元団地B-8区における試掘調査報告	32
1. 調査に至る経過	32
2. 調査体制	32
3. 調査の経過	32
4. 調査結果の概要	33
5. まとめ	34
第5章 鹿児島大学宇宿団地I-7・8区における試掘調査報告	37
1. 調査に至る経過	37
2. 調査組織	38
3. 調査の経過	38
4. 層序	38
5. 調査の概要	41
6. まとめ	43
第6章 昭和61年度(昭和61年4月～昭和62年1月)鹿児島大学構内における立会調査報告	45
・鹿児島大学構内遺跡調査要項	46
・受贈図書目録	49
付 編	
I. 教育学部附属中学校敷地内遺跡発掘調査報告	61
II. 入来牧場(鹿児島大学農学部附属農場)分布調査報告	67
1. 調査に至る経過	69
2. 採集遺物について	69
III. 鹿児島大学工学部機械工学科校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (付. 教育学部における試掘調査)	75
1. 調査の経過と調査組織	77
2. 基本層序	78
3. 遺構	85
4. 出土遺物	85
5. まとめにかえて	97
付. 教育学部の調査	103

挿 図 目 次

・郡元団地 I ・ J - 4 区における試掘調査	
第 1 図 調査地点位置図	4
第 2 図 No. 2 ・ No. 3 トレンチ土層断面図	6
・郡元団地 Q - 6 ・ 7 区における試掘調査	
第 3 図 試掘トレンチ位置図	7
第 4 図 No. 1 ・ No. 2 トレンチ土層断面図	10
第 5 図 出土遺物	11
・昭和60年度立合調査	
第 6 図 工学部電気電子工学科前及び化学工学科前立合調査位置図	13
第 7 図 工学部電気電子工学科前立合調査時出土遺物	14
第 8 図 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査位置図	14
第 9 図 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査マンホール A 土層図	15
第10図 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査マンホール C 土層図	16
第11図 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査時出土遺物	17
・郡元団地 J - 9 区における発掘調査	
第12図 調査区位置図	21
第13図 土層図	22
第14図 撓乱坵平面図	23
第15図 VI層上面検出遺構	23
第16図 出土遺物	24
・宇宿団地 I - 8 区における発掘調査	
第17図 調査区位置図	25
第18図 基本土層模式図	26
第19図 北壁・南壁土層断面図	27
第20図 遺構配置図・遺物分布図	28
第21図 出土遺物	29
・郡元団地 B - 8 区における試掘調査	
第22図 試掘トレンチ位置図	32
第23図 出土遺物	33
第24図 No. 4 トレンチ土層断面図	34
第25図 No. 3 トレンチ土層断面図	35～36
・宇宿団地 I - 7 ・ 8 区における試掘調査	
第26図 試掘トレンチ位置図	37

第27図	基本土層模式図	38
第28図	土層断面図	39~40
第29図	出土遺物	41
第30図	溝状遺構実測図	42
• 附属中学校敷地内遺跡		
第31図	附属中学校敷地内遺跡検出住居址	65
• 入来牧場分布調査		
第32図	入来牧場位置図	70
第33図	入来牧場内遺物採集地点	71
第34図	採集遺物実測図(1)	72
第35図	採集遺物実測図(2)	73
• 工学部機械工学科校舎建設に伴う調査		
第36図	試掘調査トレンチ配置図及び検出遺構	77
第37図	B区西壁土層図	79~80
第38図	2区北壁土層図	81~82
第39図	5区北壁土層図	83~84
第40図	検出遺構平面図	86
第41図	溝4平面図	87
第42図	溝3出土土器(1)	88
第43図	溝3出土土器(2)	89
第44図	溝3出土土器(3)	90
第45図	溝3出土土器(4)	91
第46図	溝3出土土器(5)	92
第47図	溝4出土土器	93
第48図	包含層出土土器(1)	95
第49図	包含層出土土器(2)	96
第50図	包含層出土土器(3)	97
第51図	溝3・包含層出土石器	97
第52図	教育学部試掘調査グリッド位置図	103
第53図	教育学部試掘調査グリッド土層図	104
第54図	教育学部試掘調査グリッド1出土土器	105

写 真 目 次

• 郡元団地Q-6・7区における試掘調査	
写真1	調査風景(西側から) 8

• 昭和60年度立合調査	
写真2 立合調査時出土遺物	18
• 宇宿団地I-8区における発掘調査	
写真3 土層断面(北壁西側)	27
写真4 出土遺物(弥生土器・石器)	28
• 郡元団地B-8区における試掘調査	
写真5 土層断面(No. 3トレンチ西壁)	35~36
• 宇宿団地I-7・8区における試掘調査	
写真6 土層断面(No. 1トレンチ北壁)	39~40
• 昭和61年度立合調査	
写真7 医学部中央診療棟新営工事に伴う立合調査風景	45
写真8 医学部中央診療棟新営工事に伴う立合調査(アースドリル掘削坑)	45
• 附属中学校敷地内遺跡	
写真9 調査状況	66

表 目 次

表1 土器観察表(宇宿団地I-8区)	30
表2 土器観察表(宇宿団地I-7・8区)	43
表3 工学部機械工学科校舎建設地出土土器観察表	100

図 版 目 次

図版1 鹿児島大学郡元団地全景	109
図版2 鹿児島大学郡元団地構内図	110
図版3 鹿児島大学宇宿団地構内図	111
図版4 郡元団地I・J-4区における試掘調査	112
図版5 郡元団地Q-6・7区における試掘調査	113
図版6 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査(マンホールA)	114
図版7 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査(マンホールC)	115
図版8 郡元団地J-9区における発掘調査	116
図版9 宇宿団地I-8区における発掘調査	117
図版10 郡元団地B-8区における試掘調査	118
図版11 宇宿団地I-7・8区における試掘調査	119
図版12 附属中学校敷地内遺跡検出住居址	120
図版13 入来牧場採集遺物	121

図版14	工学部機械工学科校舎建設に伴う試掘調査(1).....	122
図版15	工学部機械工学科校舎建設に伴う試掘調査(2).....	123
図版16	工学部機械工学科校舎建設に伴う発掘調査.....	124
図版17	教育学部試掘調査.....	125
図版18	工学部機械工学科校舎建設に伴う発掘調査出土遺物(1).....	126
図版19	工学部機械工学科校舎建設に伴う発掘調査出土遺物(2).....	127
図版20	工学部機械工学科校舎建設に伴う発掘調査出土遺物(3).....	128
図版21	工学部機械工学科校舎建設に伴う発掘調査出土遺物(4).....	129
図版22	工学部機械工学科校舎建設に伴う発掘調査出土遺物(5)・教育学部試掘 調査出土遺物.....	130

第 I 部 昭和60年度(昭和61年 2 ～ 3 月) 鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

- 第 1 章 昭和60年度(昭和61年 2 ～ 3 月) 調査の概要
- 第 2 章 鹿児島大学郡元団地 I・J-4 区における試掘調査報告
- 第 3 章 鹿児島大学郡元団地 Q-6・7 区における試掘調査報告
- 第 4 章 昭和60年度(昭和61年 2 ～ 3 月) 鹿児島大学構内における
立合調査報告

第1章 昭和60年度（昭和61年2～3月）調査の概要

昭和61年2～3月においては下記の試掘調査（2件）及び立合調査（10件）を実施した。

・試掘調査

教養部校舎増築予定地（I・J—4区）における埋蔵文化財試掘確認調査（3月17～20日）

教育学部校舎増築予定地（Q—6・7区）における埋蔵文化財試掘確認調査（3月24～31日）

・立合調査

工学部電気電子工学科前電気配線用マンホール埋設及び化学工学科電気配線改修工事（2月12～14日，郡元団地I—9区及びJ—10・11区）

理学部校舎新営に伴う設備（ガス管理設）工事（2月16日，郡元団地I—9・10区）

理学部1号館校舎新営空気調和その他（ガス管引き込み）工事（2月19～22日，郡元団地I—9・10区）

理学部校舎新営電気（高圧引込線用管理設）工事（2月20～28日，郡元団地I・J—9・10区）

教育学部校舎新営給排水その他（屋外給水配管）工事（2月23～25日，郡元団地P—6区）

理学部校舎新営その他（側溝敷設及びアスファルト舗装）工事（2月24日～3月11日，郡元団地I—9・10区）

理学部校舎新営空気調和その他（排水管理設）工事（3月4～7日，郡元団地I—9・10区）

理学部校舎新営空気調和その他（ガス引込）工事（3月6～7日，郡元団地I—9・10区）

農学部駐車場その他工事（3月21～23日，郡元団地C—4区）

中央図書館自転車置場敷設工事（3月28日，郡元団地L—5・6区）

教養部校舎増築予定地は昭和50年の鹿児島県教育委員会文化課による調査で古墳時代成川式土器期の住居址30軒を検出した地点の東側にあたる部分で，該期の遺物・遺構が検出されることが予想された。調査の結果，地表下1m程のレベルで成川式土器を多量に包含する層が検出され，当初の予想が裏付けられることとなった。今回の試掘調査は，本地域においては昭和50年の鹿児島県教育委員会による教養部校舎増築地における調査，及び昭和61年1月の鹿児島大学埋蔵文化財調査室による福利厚生施設前における立合調査につづくものである。今回の調査でもやはりこれらの調査と同様に成川式土器を多量に含む包含層が検出され，本地域が鹿児島大学郡元団地内遺跡の中心の一つをなすことを再確認させることとなった。教養部から学生会館・福利厚生施設及び玉利池にかけての地域は，理学部とともに成川式土器期の遺物・遺構が密に検出されることが予想される。

教育学部美術棟校舎新築予定地は，昭和60年度に建設された教育学部文系研究棟の南側約20mの地点に位置する。この文系研究棟の位置する地点は本校舎の建築前に埋蔵文化財発掘調査が行われ

水町遺跡として周知されることとなったが、その調査の際に古墳時代から中・近世に至る時期の各種の遺物・遺構が検出されている。特に、奈良時代から平安時代に比定される水田址から検出された牛の足痕は全国的にみても発見例が少なく注目される。このような既往の調査成果から考えて、美術棟校舎建設予定地においても水田址等の遺構が存在することが予想された。試掘調査の結果、本地点においても文系研究棟建設地の調査で確認された土層との対比から数枚の水田層が存在することが推測された。また、出土した遺物をみても成川式土器・須恵器・染付・土錘等水町遺跡出土遺物と様相を同じくする。遺物の包含状況は希薄であったが、水田遺構が教育学部構内において広範に広がることを予想させる調査成果をあげることができた。

昭和61年2月から3月にかけては理学部3号館新営に伴う工事が数多く行われたが、これに伴って数次にわたる立合調査を実施した結果、I・J-9・10区遺跡の調査成果を補足する知見を数多く得ることができた。まず、理学部3号館周辺において数基のマンホールの設置工事とこれらの間をつなぐ配管工事が行われたが、マンホール設置箇所においては地表下2mほどまでの掘削がなされることとなり、掘削部周壁土層の観察によって数軒の住居址を確認することができた。特に、理学部3号館南側のマンホール設置部においては3軒の住居址が切り合って存在しており、住居址群の密な存在がさらに南側にも展開することを予想させることとなった。この他、理学部3号館北側においては配管工事・側溝敷設工事・道路舗装工事等が行われ、これに伴う立合調査において東西方向の土層の広がりを観察した。この結果、古墳時代成川式土器包含層が理学部から工学部へと漸移的に薄くなりながらも広がっていることが確認された。

工学部電気電子工学科校舎前においては配線工事に伴いマンホール設置部分及び電線埋設部の掘削が行われた。マンホール設置部においては地表下2.3mほどまで掘削が行われたが、この際、地表下1.7m以下に白色砂層が現れ、この砂層中から成川式土器壺底部が出土している。本工事地点は理学部2号館の西に隣接する地点であるが、現在理学部2号館が存在する地点は校舎増築に伴う事前調査によって多量の成川式土器を含む軽石まじりの砂層が堆積した河川跡が検出されている。今回の立ち合い調査で検出された白色砂層にも成川式土器が含まれており、両地点で検出された砂層間の関係が注目されるところである。

(参考文献)

- 鹿児島大学埋蔵文化財調査室【鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅰ】 1986年
鹿児島大学教育学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室【水町遺跡】 1987年

第2章 鹿児島大学郡元団地 I・J-4区における試掘調査

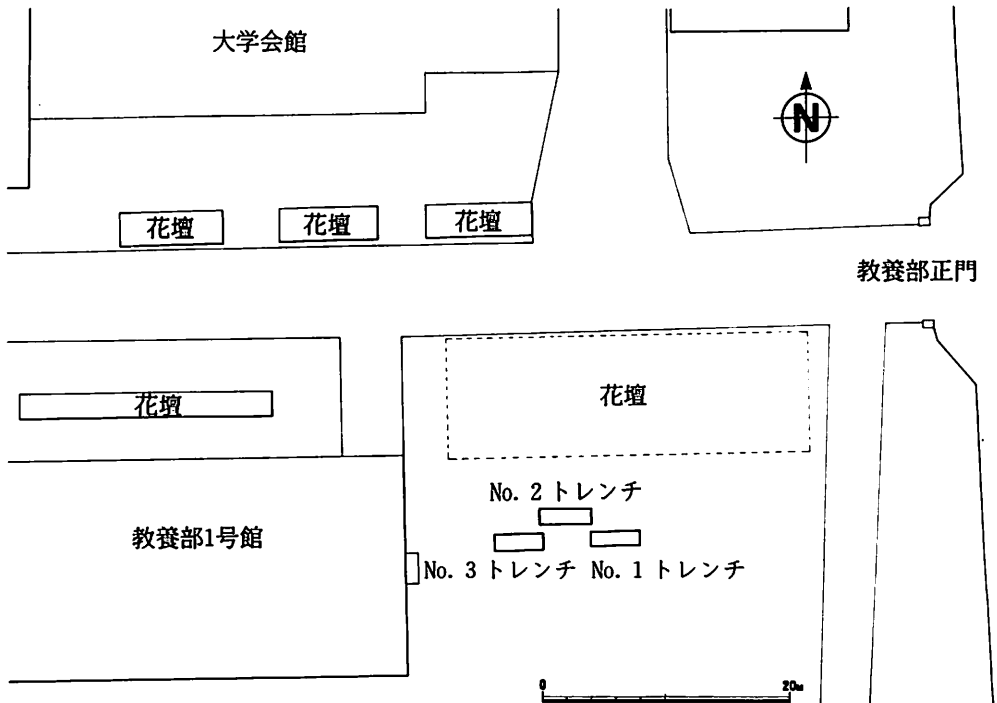
1. 調査に至る経過

鹿児島大学構内は古墳時代を中心とする遺跡として知られ、建物の建設に伴って埋蔵文化財発掘調査が実施されてきている。

現在理学部・教養部が占拠する地域は鹿児島大学郡元団地内でも若干高い地域をなしておりこれまでの調査によって成川式期の集落跡の存在が知られている部分であるが、今回、当地域において鹿児島大学教養部が校舎増築予定地候補の一つとして教養部1号館東側隣接地をあげたため埋蔵文化財調査室では当該地において事前の確認調査を行うことになった。調査は1986年3月17日から20日まで4日間にわたって実施された。

2. 調査体制

調査主体 鹿児島大学学長 石神兼文
調査担当者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
 室長 上村俊雄
 室員 松永幸男・坪根伸也・金子千穂枝



第1図 調査地点位置図

3. 調査の経過

今回調査を行った地点は昭和50年の鹿児島県教育委員会文化課による調査で古墳時代成川式期の住居跡30軒を検出した地点の東側に連続する部分であり、以前から該期の遺構・遺物の存在が推定されていた地点である。今回の調査においては校舎増築予定地北半部に約1m×4mのトレンチを第1図のように3ヶ所設定し、調査を行った。その結果、従来の想定通り成川式土器を多量に含む包含層の存在が確認された。

4. 基本層位

今回の調査は確認調査であり、調査前に存在が予想されていた成川式土器包含層を検出した時点で掘下げを止めている。

以下の9層が確認された(第2図)

I a 層：攪乱層(簡易舗装のために敷かれたバラスや石炭殻の互層から成る。)

I b 層：攪乱層(明褐色・暗褐色等を呈する小ブロックや軽石をまだらに含む。)

II a 層：灰褐色砂質土層(軽石小粒や炭粒を含む。)

II b 層：淡灰褐色砂質土層(II a 層に比べやや白味を帯びるが、他の特徴はII a 層に同じ。)

III 層：淡茶灰褐色砂質土層(明黄色のパミス及び軽石小粒を含む。)

IV 層：黄褐色砂質土層(軽石粒を含む。)

V a 層：灰茶褐色砂質土層(やや粗い砂からなるブロックを含む。軽石粒も含む。)

V b 層：灰茶褐色砂質土層(上層のV a 層よりも茶味が強い。他の特徴はV a 層に同じ。)

VI 層：灰褐色砂質シルト層(成川式土器包含層。鉄分の浸透のため赤味を帯びた部分が認められる。)

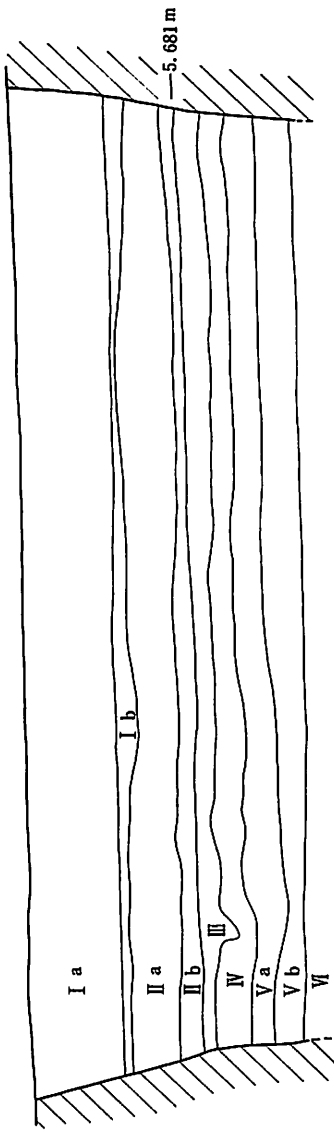
5. 調査結果の概要

No. 1 トレンチ・No. 3 トレンチにおいては、成川式土器包含層であるVI層を検出した時点で調査を終了した。両トレンチとも、VI層中に成川式土器を中心とした遺物が密に包含されている状況が確認されている。また、No. 3 トレンチにおいてはIII層上面で幅15cm程の東西方向の溝が、IV層上面で幅65cm程の南北方向の溝が検出されている。これらの遺構の所属時期については不明である。

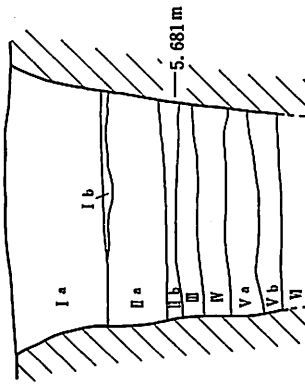
No. 2 トレンチにおいてはIV層上面において遺構の一部を検出した時点で調査を終了しているが、この遺構の性格や所属時期等については不明である。

6. まとめ

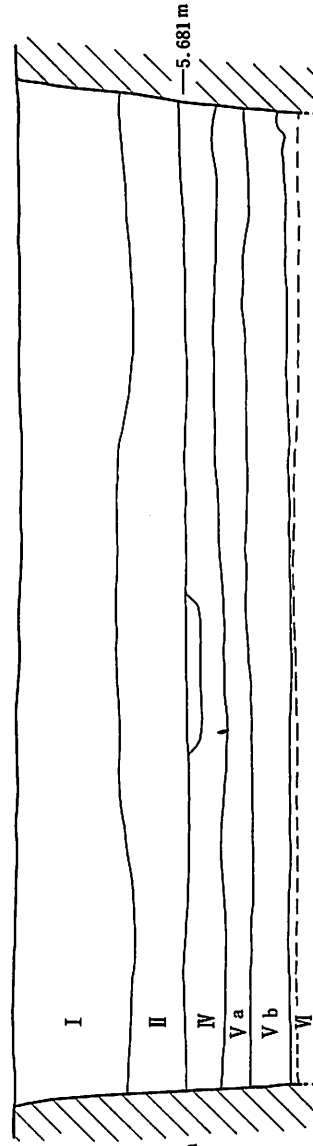
今回調査を行った地点は、冒頭において述べたように、昭和50年に成川式土器期の住居跡30軒が検出された地点の東側に接する部分であり、該期の遺構・遺物が検出されることが確認視されていた。今回の調査結果はこれを確認するとともに、成川式土器包含層の上層においても溝をはじめとする遺構が存在することを明らかにした。



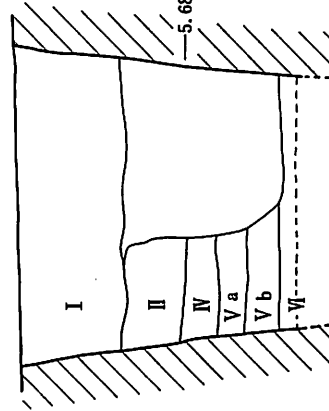
No. 2 トレンチ北壁



No. 2 トレンチ西壁



No. 3 トレンチ東壁



No. 3 トレンチ東壁

第2図 No. 2 No. 3 トレンチ土層断面図 (1/30)

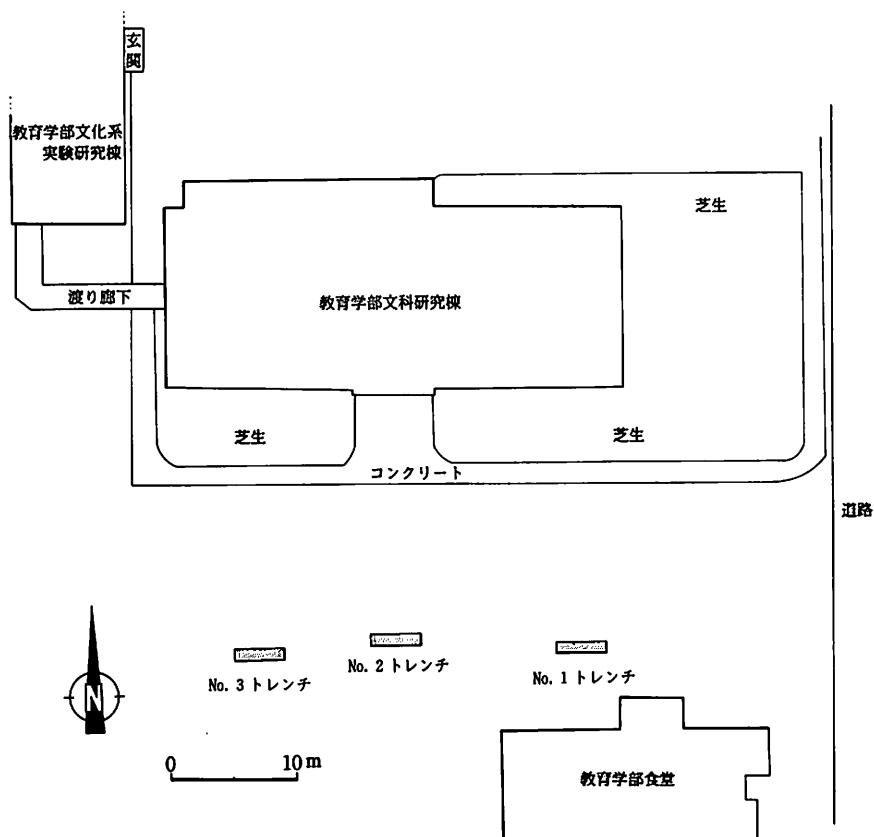
第3章 鹿児島大学郡元団地Q-6・7区における試掘調査

1. 調査に至る経過

教育学部敷地内に、教育学部美術科棟の老朽化に伴う新校舎棟の建設が計画されたため、本工事に先立ち、埋蔵文化財調査室では埋蔵文化財確認調査を行うことになった。本試掘確認調査は以下の要領で実施した。

2. 調査地の位置と環境

本地点は教育学部の占有する地域のほぼ中央部分にあたり、昭和59年11月19日～昭和60年3月30日に調査された水町遺跡（鹿児島大学郡元団地遺跡P-6・7区）の南側に隣接する地域に位置する。現在は駐車場に利用されており、標高6.4mを測る。



第3図 試掘トレンチ位置図 (1/600)

鹿児島大学構内教育学部敷地内には前出の水町遺跡の他に、県立医大遺跡・附属中学校敷地内遺跡・教育学部第2体育館予定地内遺跡など、すでにいくつかの調査事例があり、当該地域の様相が次第に明らかにされつつある。

3. 調査の規模及び調査体制

発掘面積 12m² (1×4 m—3ヶ所)

調査期間 自 昭和61年3月24日

至 昭和61年3月31日

調査体制

調査主体者 鹿児島大学学長 石神兼文

調査体制 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 上村俊雄

室員 松永幸男・坪根伸也・金子千穂枝

4. 調査の経過及び方法

本調査地においては隣接する水町遺跡にみられた西側部分と東側部分の層堆積の差異という状況を考慮し、調査対象範囲のほぼ中央に東西方向へ延びる形で1 m×4 mを1単位とするトレンチを3ヶ所設け、東側から順にNo. 1～No. 3 トレンチと呼称し調査を進めた(第3図参照)。



写真1 調査風景(西側から)

5. 層序 (第4図)

No. 1～No. 3 トレンチとも間層の混入、あるいは該当層の欠如などが部分的に認められるものの、ほぼ同様な堆積状況を示す。基本層序はおおよそ以下のとおりである。

- I 層：ピンクシラスを含む盛り土 (客土)
- II a 層：淡灰色砂質土層 (軽石含む。)
- II b 層：淡灰褐色砂質土層 (白味が比較的強く鉄分を糸状に少量含む。)
- III 層：淡灰白色砂質土層 (きめが細かく、鉄分を糸状に比較的多く含む、黄色パミスを少量含む。)
- IV 層：黝灰褐色シルト質土層 (安定した堆積状況を示す。軽石の小粒、および鉄分を若干含む、また上部には黄色パミスを少量含む。粘性を若干帯び、No. 1 トレンチ・No. 3 トレンチでは若干色調に変化があり、No. 3 トレンチでは色調により上・下二層に分層することができた。)
- V a 層：淡灰茶褐色シルト質土層 (軽石粒を若干含む。)
- V b 層：灰褐色砂混じり粘質土層 (軽石粒をごくわずか含む。)
- VI 層：黒褐色砂質土層 (軽石の小粒を比較的多く含む。堅くしまっており、土器の小片をごくわずかであるが含む。VII 層上面のくぼみ部分の埋土として存在する。)
- VII 層：黄褐色粗砂層 (きわめて粗い砂層であり、軽石の小粒を多量に含む。)
- VIII 層：明黄褐色砂混じり粘質土層 (混在する砂粒の大きさはVI 層より大きめ。)
- IX 層：淡灰褐色砂質土層 (砂粒やや粗い。)

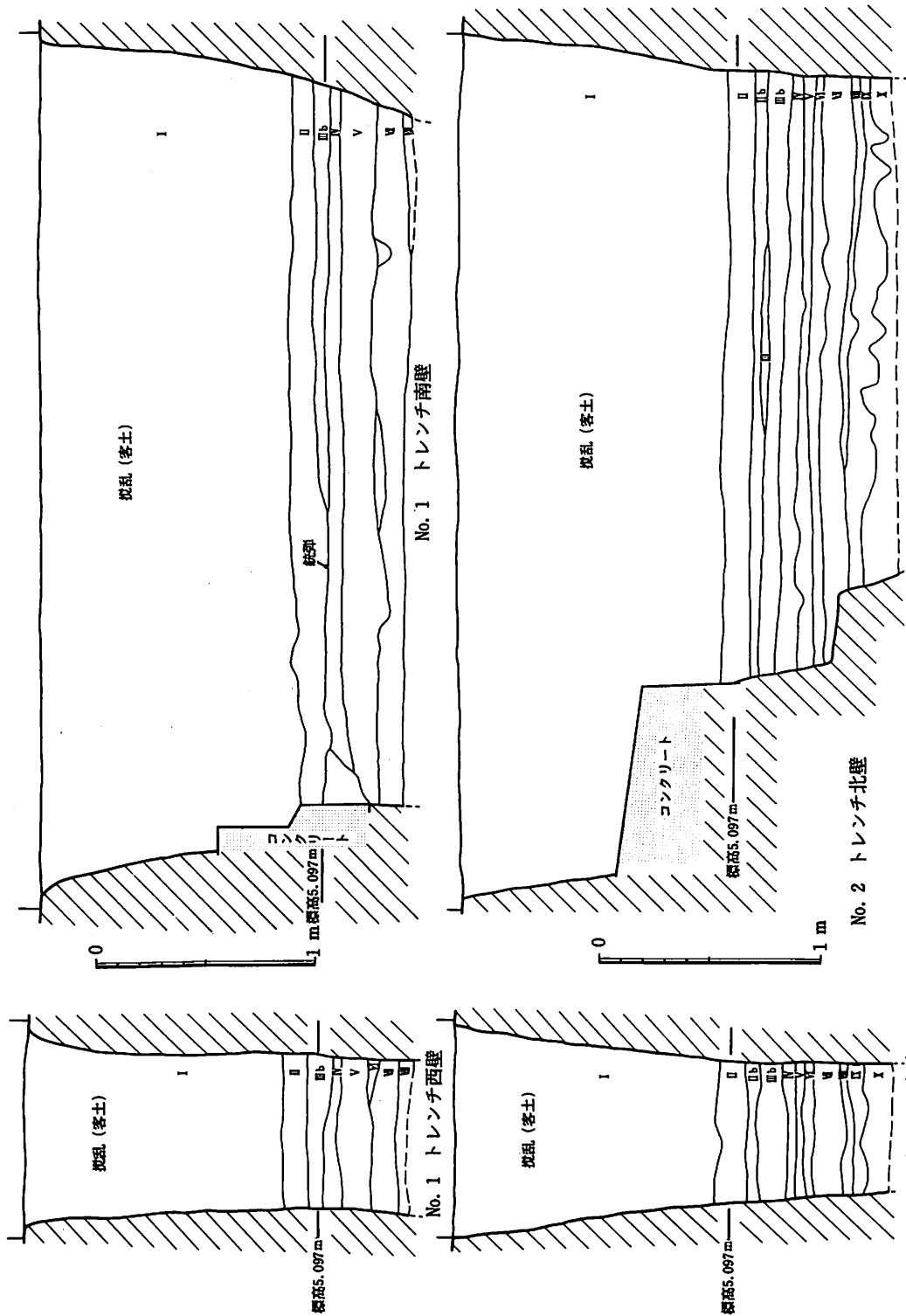
試掘トレンチ内の層序は大要において上記の通りである。色調・土質から、本調査区の土層と水町遺跡の土層の対比を行うと、ほぼ確実に対比できるものとして、II 層 (水町遺跡第2層に相当)・VI 層 (水町遺跡第8層に相当)・VII 層 (水町遺跡第9層に相当) がある。水町遺跡でのプラント・オパール定量分析 (宮崎大学農学部 藤原宏志助教授) の結果を考慮すれば、本調査区内でのVI 層以上は水田層である可能性が高い。

また、水町遺跡において成川期 (古墳時代相当) の包含層として確認されたものは、今回VI 層として認識されたものにあたると思われるが、上述のようにこの層は遺存状況が良好でなく、No. 1 トレンチ及びNo. 3 トレンチには認められるものの、No. 2 トレンチにおいては確認されていない。

6. 遺 構

a. コンクリート側溝

No. 1 トレンチ東壁部分において検出されている。II 層堆積時にはすでに存在しており、当地に農業試験場が存在していた時に利用されていたものであろう。同様の施設はNo. 2 トレンチ西側部分においても検出されている。



第4図 No. 1・No. 2 トレンチ土層断面図 (1/30)

b. 溝状遺構

No. 3 トレンチⅢ層上面に検出された。Ⅱ b層土を埋土とし、東西方向に走る。残りが悪く、深さ2～3cmと浅い。性格・用途など詳細は不明である。

c. ピット (柱穴)

No. 3 トレンチ西側部分のⅡ b層上面にピット1個を検出した。Ⅱ層土を埋土とし、検出面からの深さ25cm・径約20cmを測る。

上記の他にNo. 3 トレンチⅢ層上面に深さ1～2cm程度の不規則かつ複雑な溝様の掘り込みを確認したが、これは自然営力による水成作用の所産になるものと考えられ、人工のものではない。同様のものは水町遺跡においても認められた。

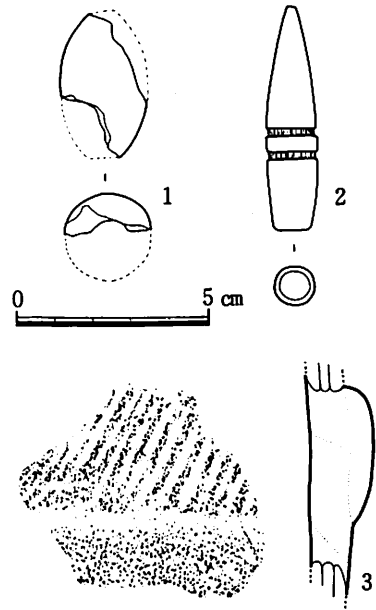
7. 遺物 (第5図)

遺物の量は全体的に少ないもののⅠ層(攪乱層)～Ⅵ層までの間で認められ、遺物内容では土錘片・須恵器片・染付片・銃弾・成川式土器片等がある。以下主なものについて記述する。

1は土錘である。約半個体分の破片であり、No. 1 トレンチ、Ⅱ b層中から出土した。胎土には精製土を使用し、全面淡橙色を呈する。重量6.5gを測り、全体に磨滅が進んでいる。

2は銃弾であり、Ⅱ層下部、No. 1 トレンチ南壁に検出された。長さ6cmを測り、全体に緑青の付着がみられる。重量40.5gを測る。

3はいわゆる成川式土器片であり、通称幅広突帯と呼ばれている壺形土器の突帯破片である。内・外面とも淡橙色を呈し、胎土中には径1ミリ程度の石英・長石・雲母粒を比較的多く含む。突帯上の刻み目はヘラ状工具によるものである。



第5図 出土遺物

8. まとめ

本調査区は水町遺跡南方20mの地点に位置し、調査当初から水町遺跡と同様な遺構・遺物が検出されることが予想されていた。調査結果はこれを裏づけるもので、層位をはじめとする諸点において水町遺跡と類似の状況を確認することができた。

以下、今回の試掘調査の結果を列挙する。

1. 攪乱層(客土)は予想以上に厚く、各トレンチとも1m以上を測る。
2. 攪乱層(客土)下には水町遺跡において水田層と認識された層と酷似した層が数枚にわたって認められる。水町遺跡との層対比から、Ⅱ層～Ⅴ層までが水田層と考えられる。今

回、畦・足跡など水田に伴う遺構を確認することは出来なかったが、これは調査範囲が狭かったことにも起因しているとおもわれ、これらの存在は十分に予想されるものである。

3. 遺物についても水田遺構という遺跡の性格上その出土数は非常に少ないものの、各層とも確実に遺物を包含している。水町遺跡での出土遺物と比較したとき、中・近世遺物の出土が少ないことも目を引いたが、このことも調査範囲が狭いことに起因しているものと考えられる。
4. 成川期（古墳時代相当）の遺物包含層も遺存状態は良好と言えないまでも、その存在は認められる。
5. 最深部においてG L—200cmまで掘りさげた。遺物の存在が確認されるのはⅥ層までであり、それ以下には認められない。このことは水町遺跡における深掘り部分の土層観察によって裏づけられるとともに、付近のボーリング調査においても同様の結果をみることができる。

今回の調査結果から調査対象範囲には、古墳時代以後の水田遺構が広く存在していることが予想される。また、水町遺跡において検出された多くの溝状遺構もその検出方向からかなりの数のものが調査対象範囲の中に延びてきているものと思われる。

（参考文献）

鹿児島大学教育学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室【水町遺跡】 1987年

第4章 昭和60年度（昭和61年2～3月） 鹿児島大学構内における立合調査

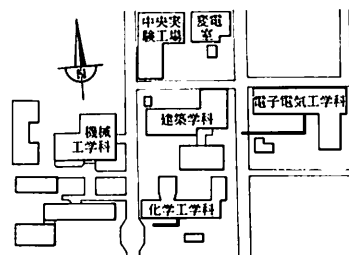
昭和60年度（昭和61年2月1日～3月31日）においては、以下の工事に伴って立合調査を実施した。

- ①工学部電気電子工学科前電気配線用マンホール埋設及び化学工学科電気配線改修工事（2月12～14日，郡元団地I—9区及びJ—10・11区）
- ②理学部校舎新営に伴う設備（ガス管理設）工事（2月16日，郡元団地I—9・10区）
- ③理学部1号館校舎新営空気調和その他（ガス引き込み）工事（2月19～22日，郡元団地I—9・10区）
- ④理学部校舎新営電気（高圧引込線用管理設）工事（2月20～28日，郡元団地I・J—9・10区）
- ⑤教育学部校舎新営給排水その他（屋外給水配管）工事（2月23～25日，郡元団地P—6区）
- ⑥理学部校舎新営その他（側溝敷設及びアスファルト舗装）工事（2月24日～3月11日，郡元団地I—9・10区）
- ⑦理学部校舎新営空気調和その他（排水管理設）工事（3月4～7日，郡元団地I—9・10区）
- ⑧理学部校舎新営空気調和その他（ガス引込）工事（3月6～7日，郡元団地I—9・10区）
- ⑨農学部駐車場その他工事（3月21～23日，郡元団地C—4区）
- ⑩中央図書館自転車置場敷設工事（3月28日，郡元団地L—5・6区）

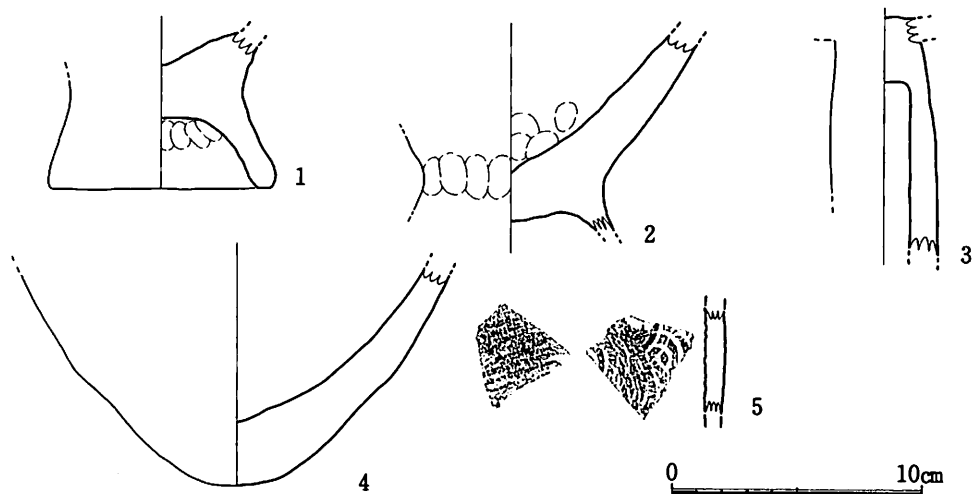
このうち①・④・⑥については掘削が遺物包含層に達し、遺物・遺構の検出をみることとなった。このため工事を一時中断し土層図の作成・遺物の取り上げ等を行っている。以下、その概要を記す。なお、このほかの工事については、掘削深度が浅いことや既掘部分に重複していることなどから埋蔵文化財への影響はほとんど認められなかった。

・電気電子工学科前電気配線用マンホール埋設 及び化学工学科電気配線改修工事に伴う立合調査

工事は電気電子工学科校舎及び化学工学科校舎のそれぞれ南側で行われた（第6図）。化学工学科校舎南側の工事においてはマンホール設置部分で地表下1.7mまで掘削が行われたが、遺物の出土はみられなかった。また、古墳時代成川式土器包含層も確認されていない。このことは教養部から理学部へと広がる同包含層の分布範囲を知る上での参考となる。



第6図 工学部電気電子工学科前及び化学工学科前立合調査位置図（1/3000）



第7図 工学部電気電子工学科前立合調査時出土遺物

電気電子工学科南側の調査においてはマンホール設置部分で地表下2.3mほどの部分まで掘削が行われた。本地点では層厚110cmほどの攪乱層及び層厚60cmほどの二次堆積シラス層の下に白色砂層の堆積がみられた。この砂層はマンホール設置地点から漸移的に薄くなりながら西へ15mほどの所まで続き、さらに西の部分では成川式土器包含層が同一レベルで現れる。この白色砂層からは第7図1～5に示すような成川式土器壺底部片・須恵器小片等が出土している。

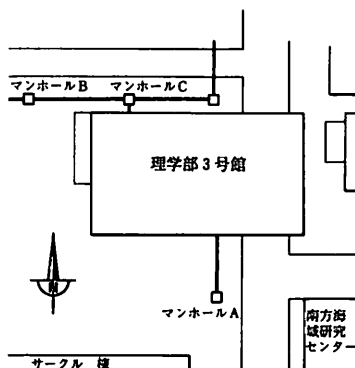
1は甕形土器の脚台部であり、脚はほぼ直線的に外開きする。脚部外面はユビオサエの後横位のナデ調整が施される。また、脚部内面はユビオサエの後全面に丁寧なナデ調整を施す。胎土中には角閃石、及び透明な粒子が含まれている。色調は淡褐色を呈する。2は甕形土器の底部付近の破片で、全体に鉄分の浸透がみられ黒茶褐色を呈する。内外面ともにユビオサエの後ナデ調整を施す。

3は高坏の脚柱部にあたる。内外面ともに褐色を呈し、中位で若干膨れる。ナデ調整を施す。4は壺の底部片で、内面はヘラナデ調整によって平滑に仕上げている。外面は磨耗が進んでおり器面調整の痕を認めることができる。外面は淡褐色を内面は黄茶褐色を呈しているが、外面に丹が塗られていることは注意される。5は須恵器小片であり、外面に格子目タタキを、内面に同心円タタキを施す。外面には白色の自然釉の付着がみられる。

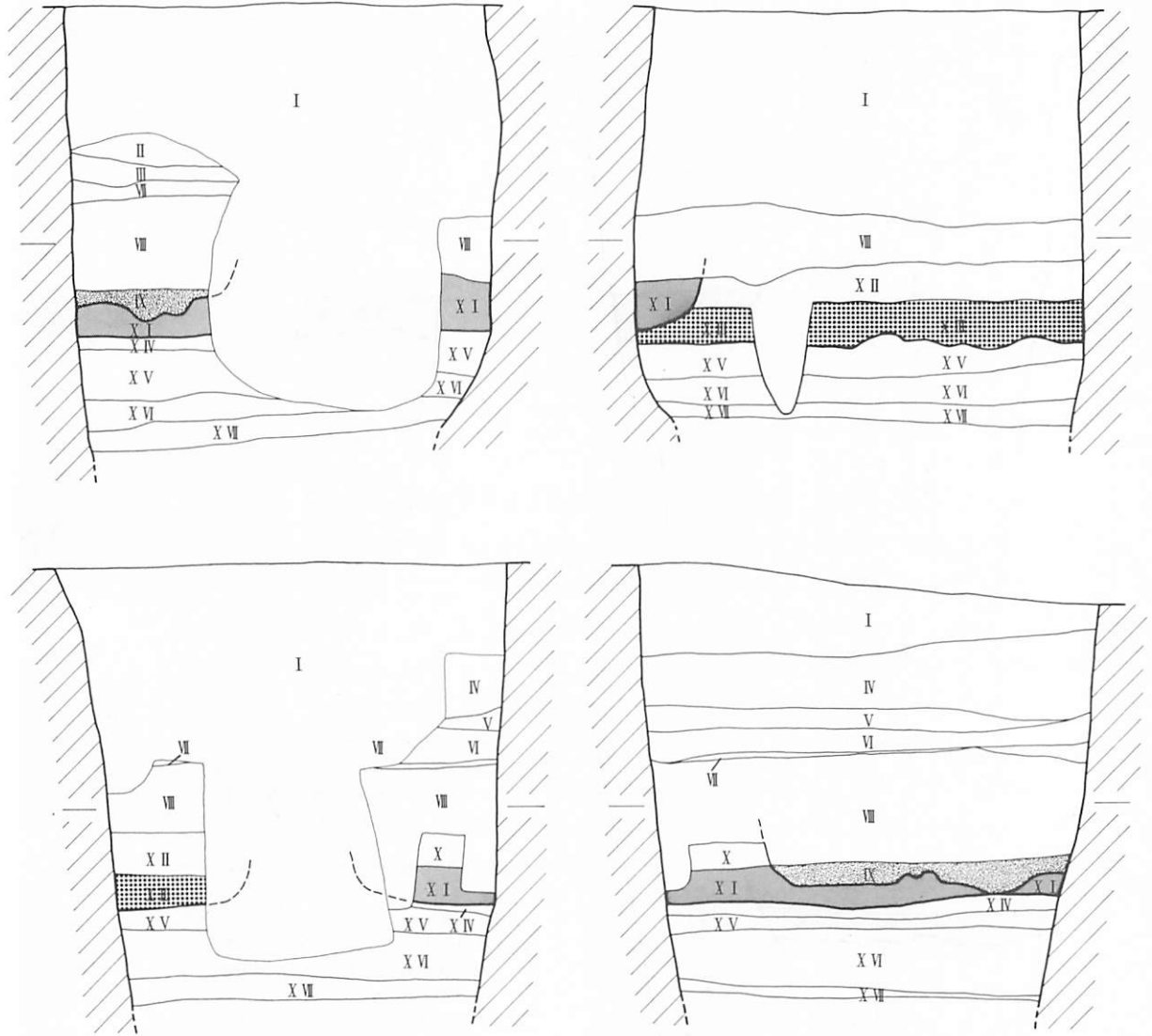
・理学部校舎新営電気（高圧引込線用管埋設）

工事

本工事においては、マンホール及び高圧電線管の埋設のために第8図に図示した地点において掘



第8図 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査位置図 (1/600)

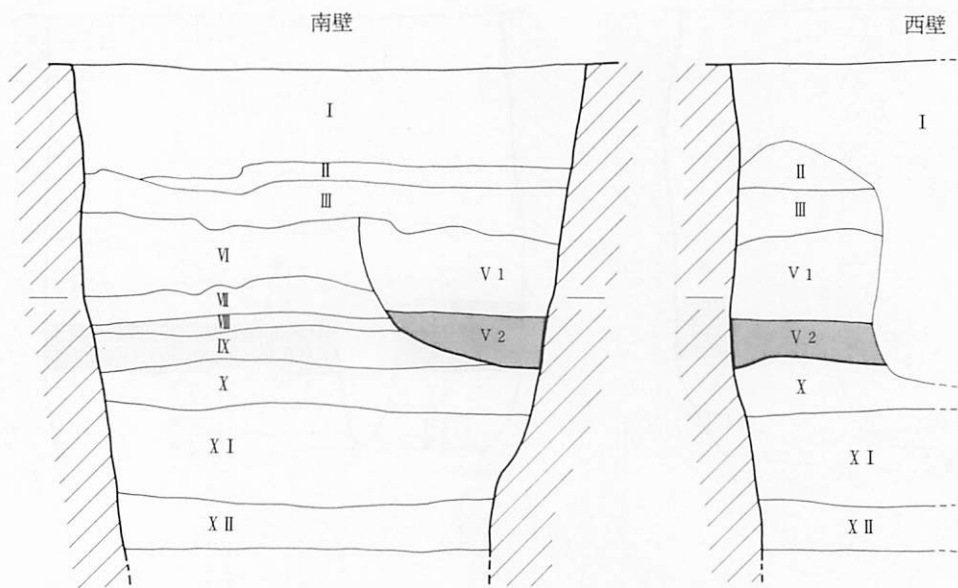


- I層：攪乱
- II層：灰色シルト質土層（鉄分・黄色バミスを若干含む）
- III層：灰色シルト質土層（径2～5mm大の軽石粒を比較的多量に含む。鉄分・黄色バミスを若干含む）
- IV層：淡灰茶褐色砂質土層
- V層：明黄褐色砂質土層
- VI層：明黄褐色粗砂層
- VII層：淡茶褐色砂質土層
- VIII層：淡灰白色シルト質土を基調とする混土層（白灰色粘質土・カーボン・鉄分などを含む）
- IX層：VIII層とはほぼ同質であるが、白灰色粘質土の含有率が高い点及び淡灰白色粘質土をブロック状に含む点でVIII層と異なる。
- X層：灰白色砂混じりシルト質土層
- XI層：淡灰褐色シルト質土層
- XII層：VIII層とはほぼ同じであるが、白灰色粘質土の含有率が若干低い。
- XIII層：VIII層とはほぼ同じであるが、白灰色粘質土の含有率が非常に高い。
- XIV層：白色粘質土層
- XV層：淡黒色粘質土層
- XVI層：黒色砂質土層
- XVII層：白色砂質土層

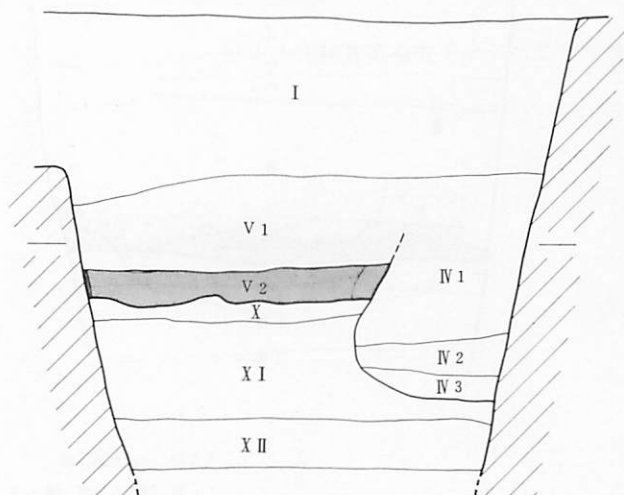


※ L. H. = 5.74 m

第9図 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査 マンホールA土層図（1/30）



北壁

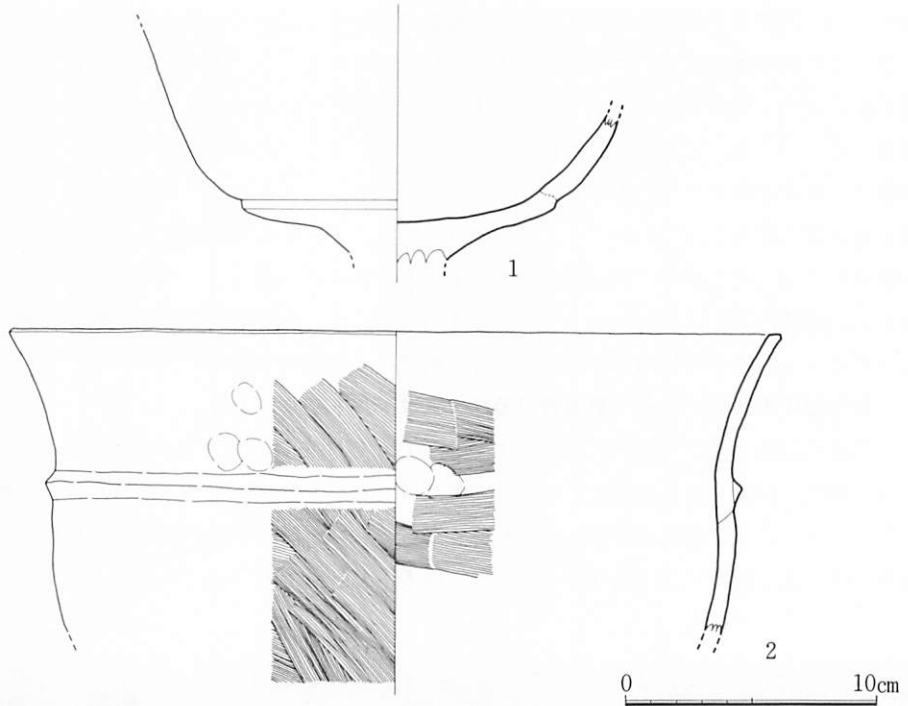


L. H. = 5.718 m

- I層：攪乱
- II層：明黄褐色砂質土層
- III層：淡茶褐色砂質土層
- IV 1層：淡灰シルト質土・白色粘質土・灰色粘質土を含む混土層（V 1層と同質であるが、灰白色シルト質土を比較的多く含む点で異なる）
- IV 2層：白色砂層（粒子が荒く、下部に軽石の小粒を含む）
- IV 3層：白色砂層（きめが細かい）
- V 1層：住居址埋土に該当（淡灰色シルト質土・白色粘質土・灰色粘質土を含む混土層で若干粘性がある）
- V 2層：住居址貼床土に該当（V 1層とほぼ同質であるが、粘質土の含有率が高い点及びX層土をブロック状に含有する点でV 1層と異なる）
- VI層：V 2層と同質であり、住居址貼床土である可能性も考えられる。
- VII層：淡灰褐色シルト質土層
- VIII層：淡黄褐色粘質土層
- IX層：暗褐色砂混じりシルト質土
- X層：暗褐色砂混じりシルト質土（IX層よりも黒味が強い）
- X I層：粗砂層
- X II層：暗褐色粘質土

0 1 m

第10図 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査マンホールC土層図（1/30）



第11図 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査時出土遺物

削が行われたが、これらの工事地点は古墳時代成川式期の集落址が検出された理学部3号館建設地を取り囲むように位置しており埋蔵文化財への影響が懸念された。

マンホールA設置地点はその中央部が高圧電線管理設のために既に掘削されており、プライマリーな状態を留める部分は東西両壁際の幅20~30cmほどの部分のみであった。地表下70~80cmほどは攪乱層及びシルスの二次堆積土層であり、その下に厚さ40cmほどの成川式土器包含層が認められた。地表下1mほどの部分まで掘削が進んだところで平面的な観察を行ったところ、貼床を施した住居の床面及びこれに伴う柱穴1を検出した。この後、地表下1.5mほどのところまで掘削が及んだ時点で土層の観察並びに土層図(第9図)の作成を行ったところ、少なくとも2軒の住居址の存在が確認された。出土遺物としては、成川式土器の小片が採集されたのみであった。

マンホールB・C及びこの両者をつなぎさらに西へと延びる掘削部においては、教養部から理学部にかけて広がる成川式土器包含層が西へ行くにつれ漸移的に薄くなっていく状況が確認された。また、マンホールB・C設置地点においては2m×2m×2mほどの掘削が行われたが、両地点とも中央部に攪乱部分が存在し遺構の平面的な検出は困難であったが、掘削坑壁面の観察によって住居址の存在を確認している。マンホールCにおける土層観察結果を第10図に示す。また、マンホールB・C間の掘削部において、工事作業員により高坏形土器及び甕形土器が採集されている(第11図)。第11図1は高坏坏部片で、坏底部と立ち上がり部との間に明瞭な段が形成される。外面は磨

耗しており調整等不明であるが、丹塗りの痕跡を認めることができる。また、内面にはユビオサエの痕が比較的明瞭である。ナデ調整によって仕上げられており、黒斑も認められる。本資料は工事作業員によって発見されたものであり出土状況の詳細については明らかにできないが、内面に煤が付着していたこと、及び出土時に正位で出土したということ等の諸点は理学部 I・J-9・10区遺跡検出の住居址中央から出土した高坏と共通している。これらの諸点から考えて、本高坏が本来住居址中央部に据えられていたこと、引いては本地点における住居址の存在が推測される。2は1と同地点から出土した甕形土器の口縁部から胴上部にかけての破片で、内外面ともハケメが明瞭に認められ口縁部付近にはさらにヨコナデが加えられている。淡黄褐色を呈し、胴部外面には黒斑が認められる。いわゆる外反口縁の甕形土器で、肩部に三角突帯を施す。

・理学部校舎新営その他（側溝敷設及びアスファルト舗装）工事

工事地点は理学部 3号館の西側北寄りの部分に位置する（図版 2 参照）。工事によってほぼ東西方向に幅 20~30cm・長さ約 16m にわたって掘削されることとなったが、この付近では教養部から理学部にかけて広がる成川式土器包含層も薄くなっており土器小片若干が採集されたのみであった。なお、成川式土器包含層は層厚 30cm ほどで、地表下 0.9~1.2m 付近に存在する。

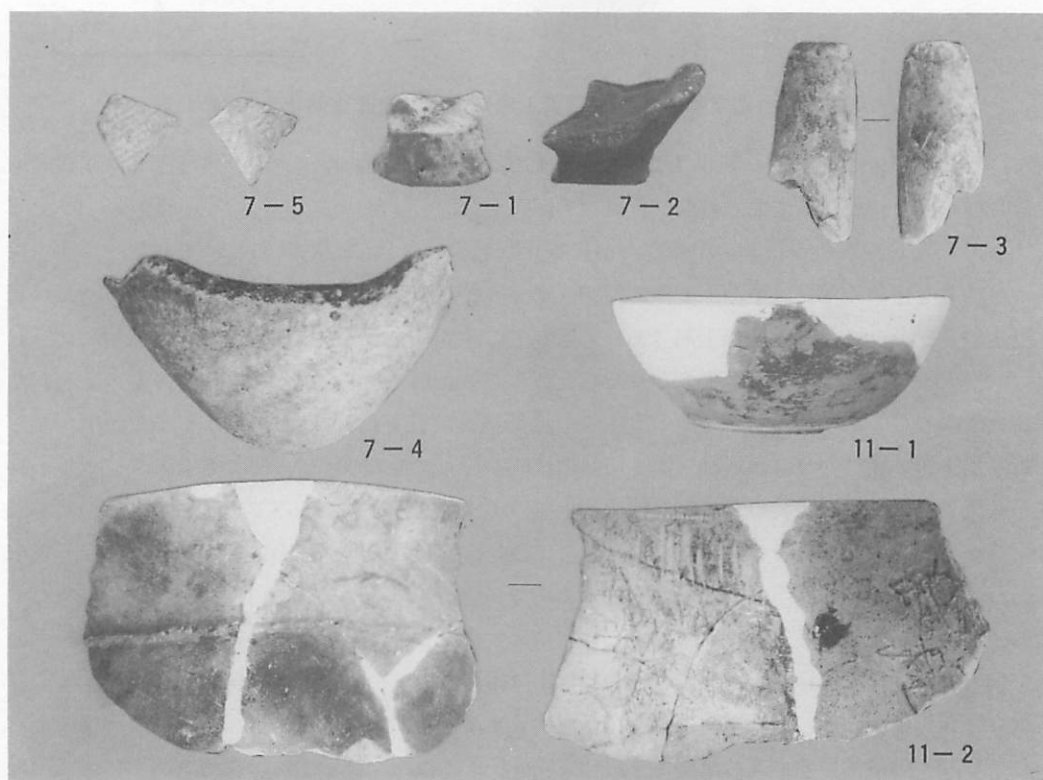


写真 2 立合調査時出土遺物

第Ⅱ部 昭和61年度(昭和61年4月～昭和62年1月) 鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

- 第1章 昭和61年度(昭和61年4月～昭和62年1月)調査の概要
- 第2章 鹿児島大学郡元団地J-9区における発掘調査報告
- 第3章 鹿児島大学宇宿団地I-8区における発掘調査報告
- 第4章 鹿児島大学郡元団地B-8区における試掘調査報告
- 第5章 鹿児島大学宇宿団地I-7・8区における試掘調査報告
- 第6章 昭和61年度(昭和61年4月～昭和62年1月)鹿児島大学構内における立合調査報告

第1章 昭和61年度(昭和61年4月～昭和62年1月)調査の概要

昭和61年度は郡元団地地区・宇宿団地地区において、以下に列挙した本調査2件・試掘調査2件・立合調査2件の発掘調査を実施した。特に宇宿団地地区での発掘調査は初例であり、これらの調査結果は注目に値するものである。

- ① 理学部塵捨場設置に伴う事前調査(郡元団地J-9区→第2章)
- ② 医学部へい猷焼却炉設置に伴う事前調査(宇宿団地I-8区→第3章)
- ③ 農学部R I増築に伴う試掘確認調査(郡元団地B-8区→第4章)
- ④ 医学部臨床研究棟増築に伴う試掘確認調査(宇宿団地I-7・8区→第5章)
- ⑤ 付属病院中央診療棟新営(よう壁撤去)工事に伴う立合調査(宇宿団地F・G-7・8区→第6章)
- ⑥ 単車置場仮設工事に伴う立合調査(郡元団地L-3～11区→第6章)

以上のうち、①・②は本調査であり調査対象範囲の完掘を行い調査を終了している。また、③・④は工事計画に先立つ試掘確認調査として実施され、両地点とも遺跡の存在が確認された。今年度の2件の立合調査については、両件とも埋蔵文化財への影響はまったく認められなかった。

次に上記の調査で得られた成果、知見を地区別に略述する。

—郡元団地地区—

①の調査では、成川式期(古墳時代)の住居址を部分的にはあるが検出することができ、該期の生活遺構の西方向への広がりを考察する上で、貴重な資料を提供した。②の調査はこれまで調査事例の僅少であったキャンパス北端部地域において実施されたものであり、その結果は当地域の様相の把握に大いに貢献した。土師器片・陶磁器片が出土した他、水田層・旧河川跡を検出している。

—宇宿団地地区—

宇宿キャンパスは昭和46年、当階段々畑として利用されていた台地縁辺部の緩傾斜地を削平し地均した平坦地に立地する。造成の際に多量の遺物が採集され遺跡の存在が明らかにされているが、発掘調査事例は皆無であり今回の調査が初例である。

②・③の調査では、縄文時代早期・弥生時代中期～古墳時代初頭に比定される2つの文化層を確認し、縄文時代早期土器(前平式)・弥生時代中期土器・成川式土器等が出土している。特に弥生時代中期～古墳時代初頭の時期については、溝状遺構・住居址様遺構等の遺構を検出することができた。これらの調査結果は造成当時に包含層の大部分が削平され遺跡自体消滅してしまったと考えられていたこれまでの所見をくつがえすものであり、今後の同地区における埋蔵文化財発掘調査の指針となる基礎資料を呈示した。

⑤の立合調査も宇宿キャンパスでは初めての試みであり、その調査結果に大きな期待が持たれていた。しかし、当地点は造成の際の削平がかなりの深さにまで及んでおり、遺物・遺構は確認できずシラス上面下の層観察を行ったのみである。

第2章 鹿児島大学郡元団地J-9区における発掘調査

1. 調査に至る経過

理学部ではこれまで南方海域研究センターの西側23mの位置に塵捨場を設け学部内から出される廃棄物の処理にあっていたが、本地点が昨年度新築された理学部3号館の南側に近接するため当該施設の移転が計画された。移転地としては現地点から西へ18mの地点が選ばれたが、本地点は周知の埋蔵文化財包蔵地にあたるため事前に埋蔵文化財の発掘調査を行うことになった。

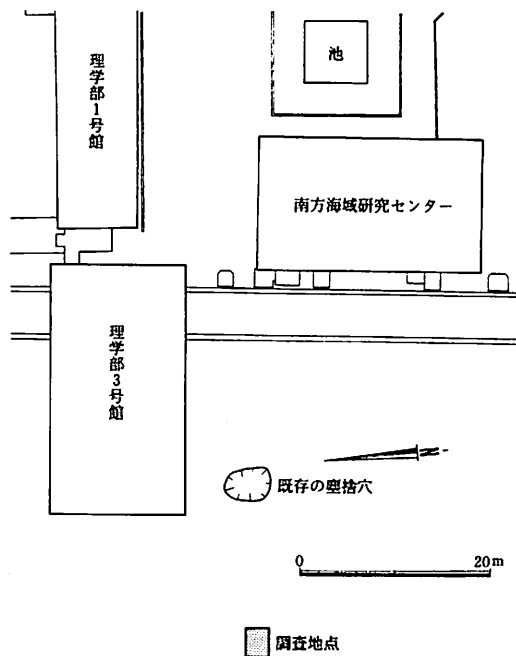
2. 調査体制

調査主体者 鹿児島大学学長 石神兼文
調査担当者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
 室長 上村俊雄
 室員 松永幸男・坪根伸也・金子千穂枝
現場作業員 野下萬利子・野下ヨブ子・脇ツルエ

3. 調査経過

今回の調査地点は昭和60年6月17日から同年10月5日にかけて埋蔵文化財発掘調査が実施され、古墳時代成川式期の集落址が検出された地点(現理学部3号館建設地)の西南方に隣接する部分である。調査にあたっては対象面積が狭いため塵捨場として掘削される予定である2.5m×3mの範囲をそのまま調査グリッドとして利用することとした(第12図)。

本調査区は表土・攪乱層を除去した結果、その中央部に植木の抜き痕と思われる攪乱坑が存在することが判明した。この攪乱坑は径約2mの円筒形を呈し成川式土器包含層直下の黒色泥炭層の上部にまで達している。このため、プライマリーな層は調査グリッド周縁部に残存するのみであった。



第12図 調査区位置図 (1/800)

このような状況から、今回の調査によって検出された遺物の量ははなはだ少なく、また遺構についても成川式期に所属すると考えられる住居址南辺の一部を検出したのみであった。

4. 基本層序 (第13図)

I層：攪乱層(径2～3cm程度のガラスや貝殻からなる層、及び攪乱土の埋土を便宜上一括する。)

II層：淡灰褐色砂質土層(粒子は粗く、径1cmほどの軽石粒を含む。また、黄色バミスを少量含む。)

III層：灰色砂質土層(径1cmほどの軽石粒を含み、鉄分を比較的多く含む。)

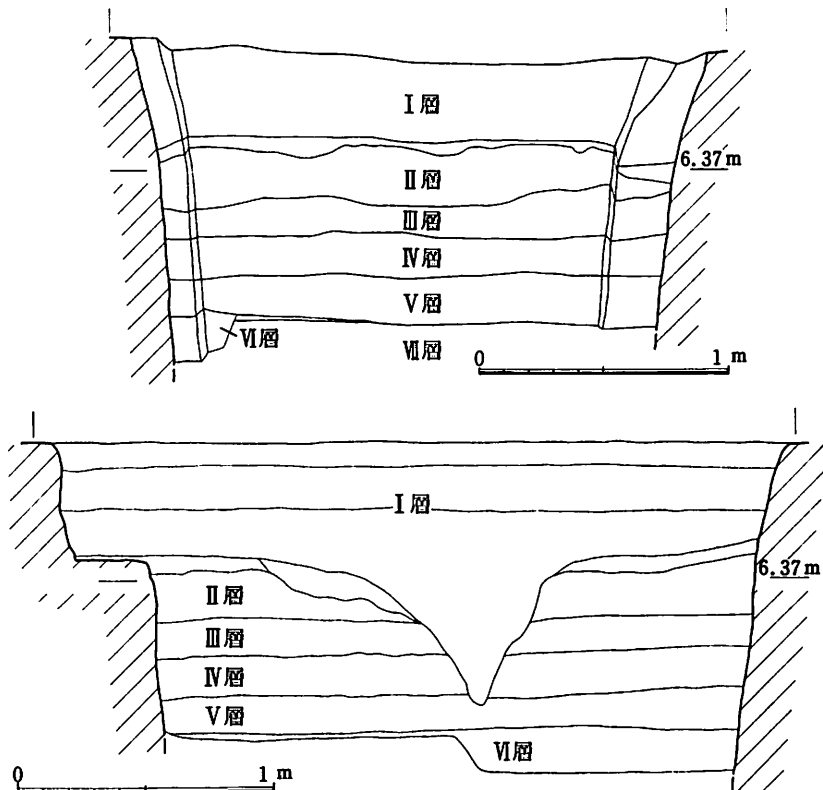
IV層：灰白色砂質土層(キメの細かい砂質土層で部分的に鉄分の浸透が見られる。層上部には水性作用によって形成されたと考えられる白砂のたまりが散見される。)

V層：灰色粘質土層(古墳時代の遺物包含層。鉄分を部分的に含む。)

VI層：住居址の貼り床土に相当する。V層土を基調としながら、VII層及びVII層下の白色砂をブロック状に含有する。また、床面と推定されるラインに沿って鉄分の浸透が見られる。)

VII層：黒色泥炭質土層(非常に強い粘性を帯び、土層中に植物繊維様のものを含む。)

※II～IV層はシラスの二次堆積土である。

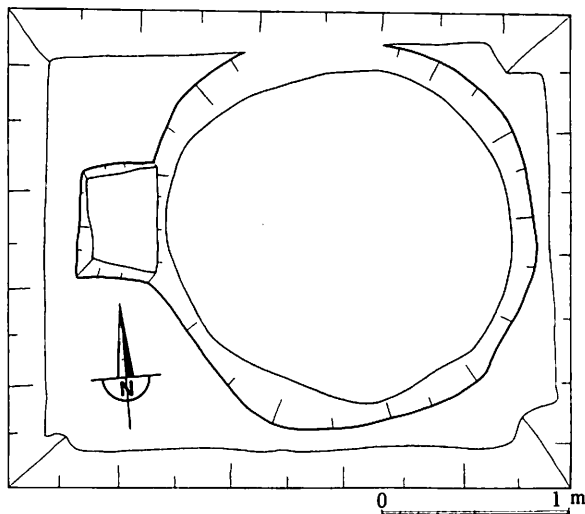


第13図 土層図 (1/30)

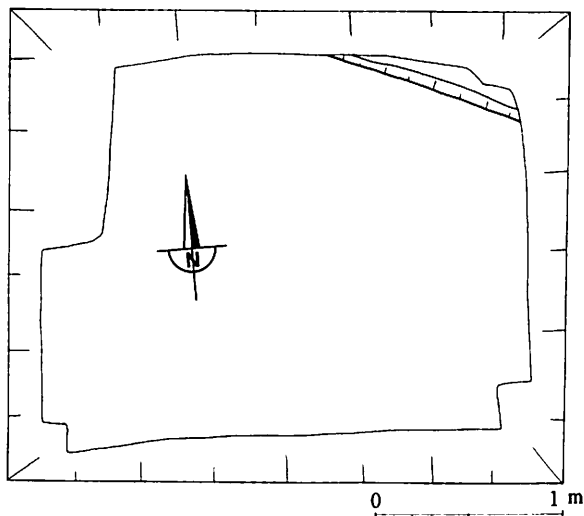
5. 遺構 (第14・15図)

成川式土器包含層直下のⅥ層黒色泥炭質土層上面において住居址の一部と考えられる凹部を北壁際で検出した。本凹部の埋土は北壁土層の観察から考えて住居址の貼床土と考えられ、これがより上位の層から掘り込まれたことが考えられた。

掘り込みラインは直線状をなし、本住居址が方形プランを呈することが推測される。この想定は隣接する理学部3号館新築地における事前調査で方形プラン住居のみが検出された状況からも支持されよう。



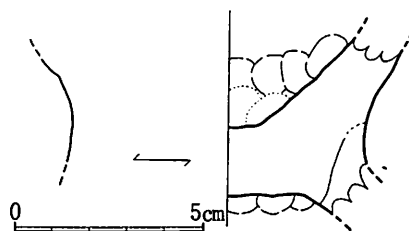
第14図 攪乱坑平面図 (1/30)



第15図 Ⅵ層上面検出遺構 (1/30)

6. 遺物 (第16図)

成川式土器小片がV層を中心として少量出土している。図示できるものは第16図の一点のみである。調査区中央に径2mの攪乱坑が存在することを考慮にいれても遺物の包含状況はかなり希薄である。



第16図 出土遺物

7. まとめ

鹿児島大学郡元団地遺跡は古墳時代成川式期を中心とした周知の埋蔵文化財包蔵地であり、これまでに構内の各地点で行われた調査によって古墳時代の集落址や古墳時代・中世の水田址をはじめとする各種遺構が検出され、これらに伴って各時代の遺物も出土している。

今回調査を行った地点は教養部から理学部へかけての古墳時代成川式期集落址の存在が予想されている部分の一部にあたり、該期の住居址27軒が検出された理学部3号館建設地の西南方約15mに位置する。

今回の調査区は2.5m×3mという小範囲であることに加え、その中央部には径約2mの攪乱坑が掘り込まれており、プライマリーな部分が調査区の四隅にほぼ限られるという状況であった。このような状況もあって、出土遺物は成川式土器の小片がほとんどであり、しかも量的にも少ない。遺構も成川式土器包含層であるV層を掘り下げる過程においては検出することができず、VI層黒褐色泥炭層の上面に認められた北壁際の落ち込みによって住居址が存在していたことを知ることができた。

このように今回の調査はかなりの悪条件が重なったが、それにもかかわらず、住居址の存在を確認することができ、教養部から理学部へかけて東西に連なる成川式期集落址群の西限がさらに西側にあることを示したのである。

第3章 鹿児島大学宇宿団地 I - 8 区における発掘調査

1. 調査に至る経過

鹿児島市宇宿町1208-1に所在する鹿児島大学宇宿キャンパスは、薩摩半島中央高地の方向より東へ延びる舌状台地末端部に位置し、最頂上部標高77mを測る。桜島・鹿児島湾（錦江湾）を一望のもとに臨むことのできる眺望絶佳の地である。

昭和46年、当時段々畑として利用されていた本地域の造成工事が実施され、その際に多量の遺物の散布が認められたことによって遺跡の存在が明らかとなった。以来、関係者間で遺跡内容の確認、遺存状況の把握等の必要性が考えられながらもその機会に恵まれず今日に至っている。

そのような折、鹿児島大学医学部ではへい獣焼却炉の新設を計画し、計画地内の埋蔵文化財発掘調査を埋蔵文化財調査室に依頼した。これを受け埋蔵文化財調査室では、当地の発掘調査を昭和62年1月19日より同年1月30日にわたって実施することになった。

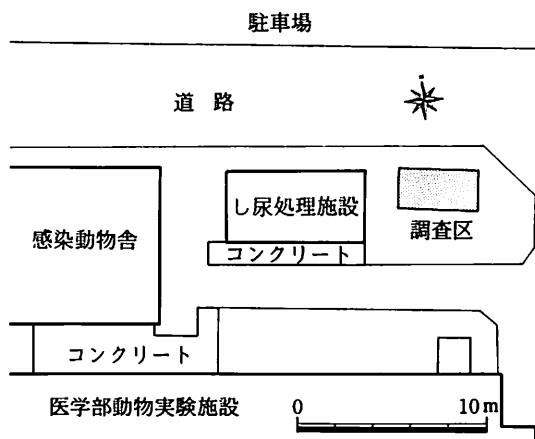
2. 調査組織

調査主体者	鹿児島大学学長	井形昭弘
調査体制	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	
	室長	上村俊雄
	室員	松永幸男・坪根伸也・金子千穂枝

3. 調査の経過

調査は昭和62年1月19日から同年1月30日にかけての10日間にわたって実施された。調査の対象面積が狭小であったため、焼却炉の設置対象範囲（4.3m×2.2m）をそのまま調査グリッドとして利用し調査を行った。

当地には調査前に樹木が植えられていたため、それらに伴う攪乱坑が対象面積のかかなりの部分を占めており、そのためこれらの攪乱坑の除去後、表土層から順次掘り下げていった。その結果Ⅲ層上面において住居址様遺構を検出した他、Ⅴ層中に縄



第17図 調査区位置図 (1/400)

文時代早期土器等の出土を確認し、最終的に現地表下150cmまで掘り下げを行い調査を終了した。

また、前述の住居址様遺構の性格究明のため、今回の調査区北側に位置する道路側溝との間に拡張区を設けⅢ層上面まで掘り下げている。

4. 層位 (第18・19図)

調査地は、標高76mの台地上に位置する。宇宿団地造成時の削平はⅡ層中位にまで及んでおり、その上部の客土層も含め大きく6層に区分することが可能である。

Ⅰ層：パラス・ピンクシラス等を多量に含む混土（客土）である。Ⅱ層～Ⅴ層土をブロック状に包含し、これらの中に遺物を散見することができる。他地点の削平土を盛ったものであろう。非常に硬質である。

Ⅱ層：黒褐色を呈する腐植土層でありフカフカしている。弥生時代中期中葉土器片・成川式土器片を包含するが、その量は概して少ない。

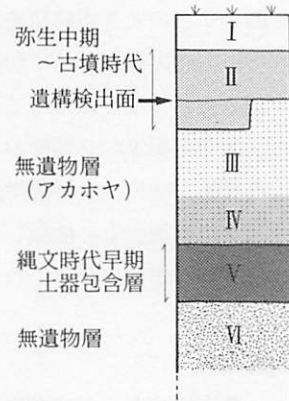
Ⅲ層：黄褐色を呈する火山灰土層である。非常に軟質で安定した堆積状況を示す。20～40cmの厚さで堆積し、上部にはⅡ層土の浸透がみられる。遺物は含まない。鬼界カルデラ起源といわれるアカホヤ層に対比される。

Ⅳ層：色調は淡黒茶褐色を呈する。非常に硬質であり黄色パミス・軽石粒を含む。

Ⅴ層：黄色パミスを比較的多く含む黒褐色土層であり、下部になると黒味を増す。縄文時代早期土器（前平式）を包含する。

Ⅵ層：桜島起源と考えられる黄色を呈した降下軽石と砂粒から構成される。上部ではサージ状の堆積状況も観察でき、また、下部に行くにしたがい黄色軽石密度が増加する。通称“赤ダマ土”と呼称される土壌である。

付近の崖面の観察から、Ⅵ層は2～3mの厚さを測るものと考えられ、その下部には暗茶褐色腐植土層、入戸火砕流（シラス）が存在し、特に入戸火砕流については数10mの厚さをもって堆積していることが判明している。



第18図 基本土層模式図

対比される。

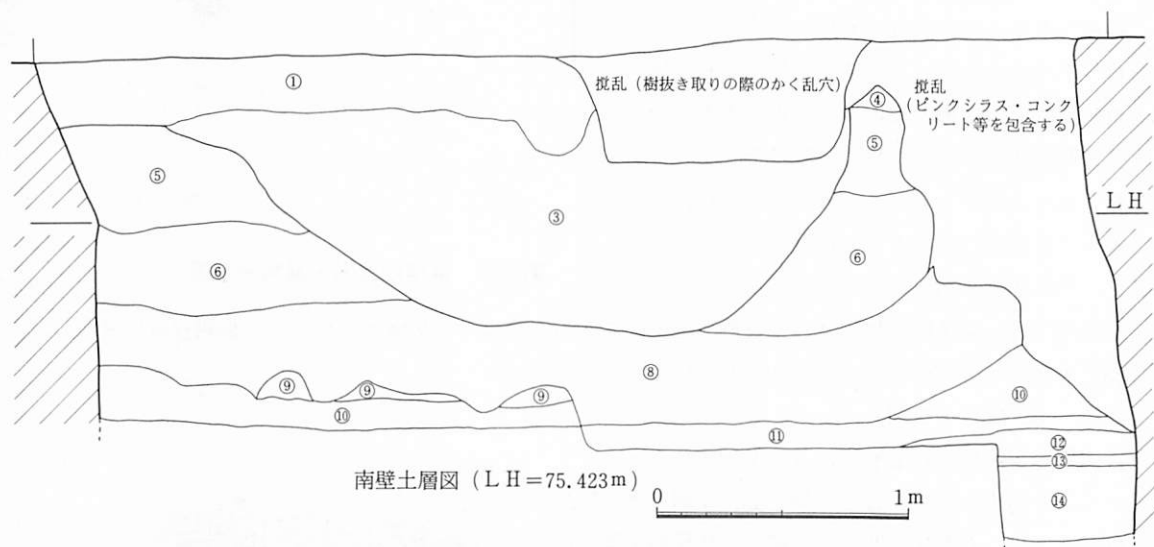
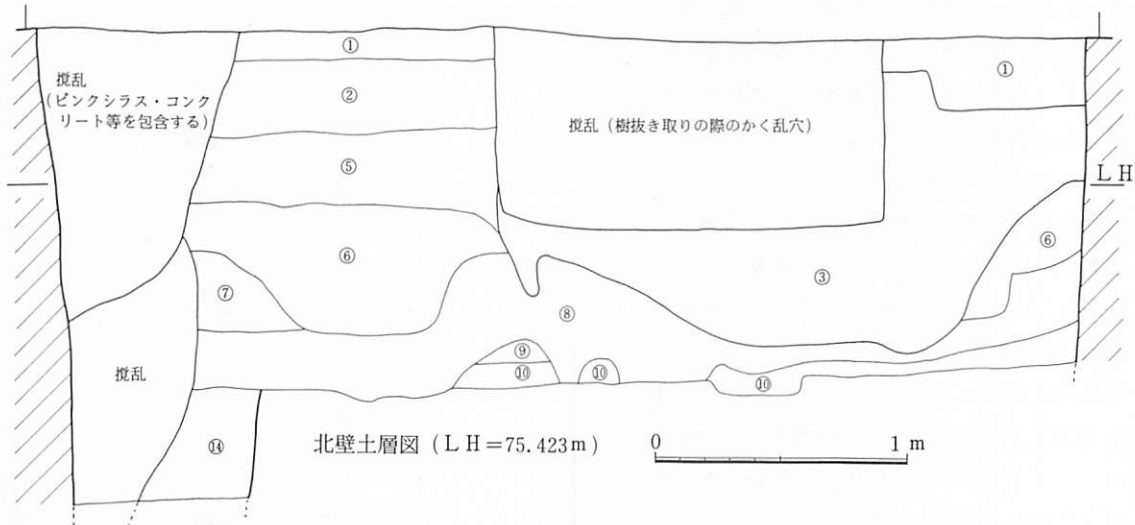
5. 遺構と遺物

① 遺構 (第20図)

狭小な調査区域内に近年の攪乱が広範に及んでいるため明確に検出できなかったものの、住居址様落ち込み、及び円形の落ち込みを確認した。なお、Ⅵ層上面においても無数の不定形の落ち込みがみられるが、これらは層状況より判断して自然営力によるものと考えられる。

・住居址様遺構

調査区の長軸方向にほぼ平行する形で、北壁際に長さ85cmにわたって検出された。検出面（Ⅲ層



- ①基本層序Ⅰ層該当 (客土中に掘り込みのみられる部分もある)
- ②住居址様構埋土 (基本層序Ⅱ層該当土・下部の方ではⅢ層土を若干含む)
- ③樹植え込みの際の攪乱 (底面付近にⅥ層土・Ⅲ層土が層状に堆積する)
- ④基本層序Ⅱ層該当
- ⑤基本層序Ⅲ層該当
- ⑥基本層序Ⅳ層該当
- ⑦基本層序Ⅴ層に類似するが茶味が強く⑥と⑧の中間要素を有する
- ⑧基本層序Ⅴ層該当
- ⑨比較的粒子の大きい粗砂
- ⑩粗砂+比較的大きめの黄色軽石により構成される



写真3 土層断面 (北壁西側)

第19図 北壁・南壁土層断面図 (1/30)

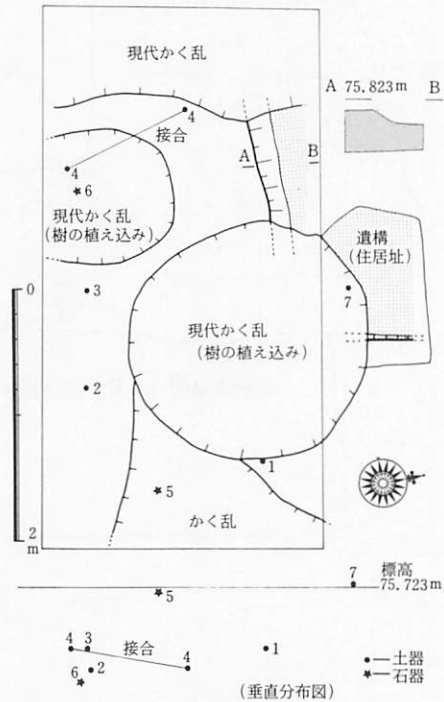
上面)からの深さ約18cmを測る。検出当初、西側部分、東側部分は攪乱坑によって切られており、当落ち込みの性格解明に困惑した。そこで、調査区北側に拡張部を設け掘り下げたところ、当初の検出ラインに直交する状況で落ち込みラインを確認することができた。これらの結果から一応住居址と判断したが、住居址コーナー部分は樹を抜き取るための攪乱坑の部分に存在していたと考えられる。出土遺物としては、埋土中から土器の小片が僅かに出土するだけであり、特徴をとらえることのできるものは、第21図7に掲載した1点のみである。埋土中からの出土であるので7の破片をもって住居址の時期比定を行うことは早計ではあるが、仮に7の土器破片が住居址に伴うものであると仮定すれば、おおよそ弥生時代中期前葉～中葉の時期を与えることができる。しかしながら先述したように、あくまで可能性の範囲を脱し得ない。

・円形の落ち込み

VI層上面、北壁際に検出された径約80cm・深さ30cmを測る。2基検出されたが、東側のものは西側部分を近年の攪乱坑によって切られている。性格等については未詳である。

② 遺物(第21図)

遺物は攪乱坑中、II層中、及びV層中から出土している。II層中からは、弥生中期土器、V層中及び攪乱部分からは、石斧片・叩き石・縄文時代早期土器(前平式)が出土した。また、攪乱坑中のV層土ブロックの中から出土した土器片とV層中から出土した土器片が接合したことは、攪乱坑の埋土が掘り返しの際の土をそのまま使用したものであるか、あるいは仮に持ち込み土であったとしても本地点からそれほど離れていない場所のものであることを示しており、同時にこれらの事象は、攪乱部から出土する遺物であっても当地における遺物包含密度の推測に有効であることを物語っているものと言えよう。



第20図 遺構配置図・遺物分布図

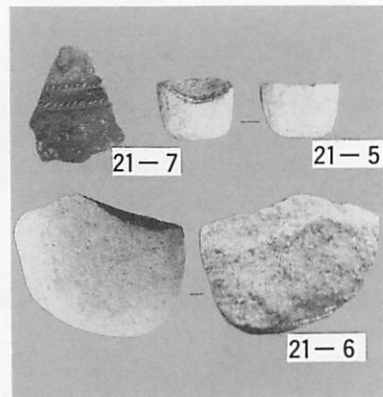
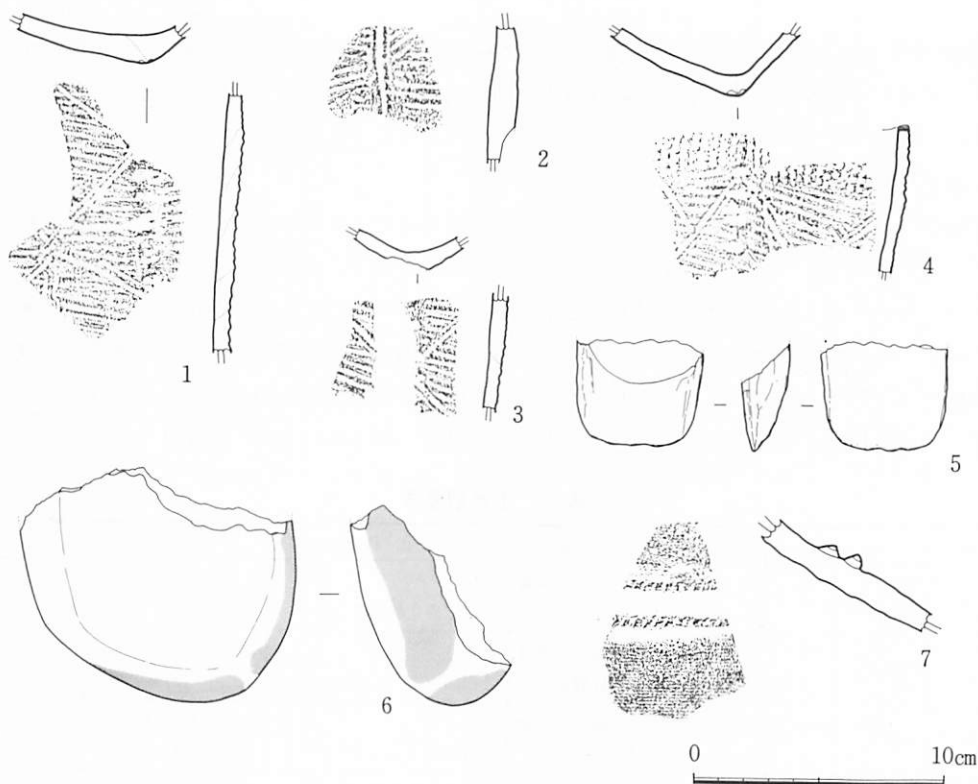


写真4 出土遺物(弥生土器・石器)



第21図 出土遺物 (1/3)

・前平式土器 (第21図1～4)

1～4は縄文時代早期に編年されている前平式に比定されるものである。円筒状を呈するものはなく、すべて角筒土器である。1は比較的大きめの胴部片で外面には明瞭な横位の貝殻条痕を施し、その後各面の中央部分にX字をモチーフとする短線あるいは複線による沈線を施文する。また角にあたる部分には2条の貝殻腹縁による刺突文を施している。内面は平滑にしあげられ縦位の擦過痕が認められる。2も1と同様の破片と考えられるが中央部の縦沈線が非常に深くまた他の破片に比して側辺の摩滅の度合いが大きい。3は1と色調・施文法・胎土状況等が非常に酷似している。角にあたる部分が欠損している。4は口縁部片であり若干波状を呈する。口唇部には刻み目を施し口縁直下には貝殻腹縁による縦位の刺突を左から右方向に1条廻らす。胴部施文は1と同一であり、横位の貝殻条痕を施した後、X字状をなす複線による沈線を施文する。ただ、1にみられるような縦位の波状沈線はみられない。

・石器 (第21図5～6)

5は両刃の磨製石斧の刃部片であり、刃部幅4.5cmを計る。表面は風化が著しくそのため使用痕等を観察することはできない。色調は淡緑灰色を呈し、重量50gを計る。頁岩製である。6は叩石であり、石材には閃緑岩が使用される。図中のトーン部分に明瞭ではないが敲打痕が認められ、現

存重量520gを計る。これら2点の石器はともに攪乱部分からの出土であるが、その形態、攪乱部中での在り方を考慮すれば、V層（縄文時代早期該当層）に包含されていたものである可能性が高い。

・弥生土器（第21図7）

II層中、および住居址様遺構の埋土中から出土が認められる。しかしながら小片が多く、図化しえたのは7のみであった。7は小片のため詳細は不明であるが、壺の肩部片であることが考えられる。内・外面とも入念な研磨が施され、2条の刻み目突帯を貼付する。突帯上位には非常に細い串状工具による鋸歯状の文様が配されており、さらにその内部を細沈線によって充填する。所属時期は調整方法、胎土、焼成などから判断すれば、弥生時代中期の前半に納まるものではないかと考えたが、比較資料の乏しい現時点においてはあくまで推測の域を脱しえず、特定することはできない。

表1 土器観察表

番号	出土層	色調	器面調整	出土状態	備考
1	攪乱 (V層土ブロック)	㊦ 赤褐色 ㊧ 赤褐色	㊤ 縦位の擦過 ㊦ 貝殻条痕	立位 (ほぼ直立状態で出土)	胎土中に石英・黒ウンモを含む
2	V層中	㊥ 淡茶褐色 ㊧ 赤褐色	㊤ 縦位の擦過 ㊦ 貝殻条痕	水平位 (内面を上方に向け出土)	側縁が摩滅する。 胎土中に石英・黒ウンモを含む
3	V層中	㊥ 淡赤褐色 ㊧ 淡赤褐色	㊤ 縦位の擦過 ㊦ 貝殻条痕	斜位 (外面を上方に向け出土)	角部分が欠損する。 胎土中に石英・黒ウンモを含む
4	・V層中 ・攪乱	㊥ 淡茶褐色 ㊧ 淡茶褐色	㊤ 縦位の擦過 ㊦ 貝殻条痕	2片とも水平位 (外面を上方に向け出土)	口縁部（接合資料） 胎土中に石英・黒ウンモを含む

番号	出土層	色調	器面調整	出土状態	備考
7	II層 (遺構埋土)	㊦ 赤褐色 ㊧ 黒茶褐色	㊥ ミガキ ㊦ ミガキ	斜位 (外面を上方に向け出土)	胎土中に長石・石英粒を含む 鋸歯状の沈線文様を施す。

6. まとめ

調査地は医療技術短期大学の位置する台地最上部より一段下がった平坦地にあたり、調査前は樹木の植え込みが行われていた。そのため、攪乱坑が調査面積のかなりの部分を占め、調査中、いろいろな意味で障害となったが、住居址様遺構・円形掘り込み等の遺構の他、縄文時代早期土器（前平式）・磨製石斧・叩き石・弥生土器等を確認することができた。

住居址様遺構は調査対象範囲の北壁際に検出されたため全容を明らかにすることはできない。所属時期についても、明確さを欠くものの、本文中でも触れたように弥生中期のものであるとすれば造成時の採集遺物内容に符合し、又、該期の生活址は県内でも発見例が少なく、貴重な資料と言える。VI層上面に検出された円形の落ち込みについては今回の調査でIII層及びVI層中から遺物の出土がみられなかったことから、時期、性格等を具体的に論じることはできない。

遺物では、まず、住居址様遺構の埋土中から弥生土器片が出土し、II層中に弥生時代中期土器を包含していることが明らかとなった。また、縄文時代早期土器（前平式）をV層中に検出し、今回

V層と命名した土層が縄文時代早期の包含層である事実が判明した。出土した前平式土器は、すべて角筒土器であり、円筒形を呈するものはない。器面の調整、文様等にみられる諸特徴は鹿児島市南洲神社遺跡出土のものと全く同様なものばかりであり、前平式の中でも一般に南洲神社タイプと呼称される土器群である。出土した石器もおそらくこれらの土器群に付随するものであろう。

このように、鹿児島大学宇宿キャンパス内には弥生時代中期、縄文時代早期の貴重な遺跡が存在する。これまで同キャンパス内は造成時に遺跡の大部分が削平され、そのほとんどが消失し、すでに遺跡は存在しないといった考えに終始しがちであったが、今回の調査により、場所によっては非常に良好な状態で包含層が遺存していることを指摘することができた。したがって、同キャンパス内においても郡元キャンパスと同様、埋蔵文化財に対して慎重かつ十分な配慮が行われる必要がある。

(参考文献)

1. 本田道輝「脇田亀ヶ原遺跡について—鹿児島大学宇宿キャンパス及びその周辺地区に於ける採集遺物の紹介—」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 I』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1986年
2. 河口貞徳「原始・古代編」『鹿児島市史 I』鹿児島市史編纂委員会 1969年
3. 鹿児島大学埋蔵文化財調査室『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 I』1986年

第4章 鹿児島大学郡元団地B-8区における試掘調査

1. 調査に至る経過

鹿児島大学共同利用R I 実験室教育実験訓練棟の増築計画を受け、鹿児島大学埋蔵文化財調査室では埋蔵文化財の存在確認を目的とし、昭和61年11月18日から11月28日までの8日間、埋蔵文化財試掘確認調査を実施することになった。

2. 調査体制

調査主体 鹿児島大学学長 石神兼文
調査担当者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
室長 上村俊雄
室員 松永幸男・坪根伸也・金子千穂枝

3. 調査の経過

今回増築を予定されている部分は既設建物の東側と西側にあたり、その対象面積は560㎡を測る。西側部分は現在の玄関前に位置しその面積も狭小であることから、東側部分に任意に4本のトレンチを設け調査を実施した。それぞれのトレンチは設定順にNo. 1～No. 4 トレンチと仮称している。調査の結果、成川式期（古墳時代該当）の包含層は確認できなかったものの、中近世の遺物を包含する水田層、及び河川跡を検出することができた。

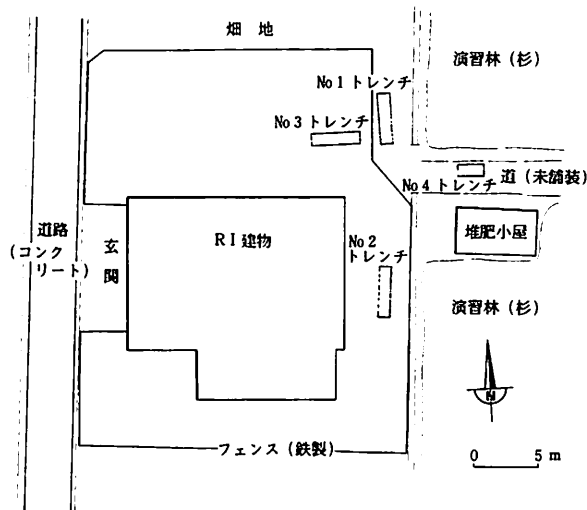
以下、各トレンチの概要を記す。

No. 1 トレンチ

約30cm掘り下げた時点において、トレンチ長軸方向に水道管が密に配走していることが判明し掘り下げを中止した。

No. 2 トレンチ

現地表下2m35cmまで掘り下げた。本トレンチの客土層は比較的厚く約130cmを測るが、この層中には厚さ30cmにも及ぶ石炭殻の層をブロック状に含む。Ⅱ層以下には、No. 4 トレンチと



第22図 試掘トレンチ位置図 (1/600)

ほぼ同様な層堆積状況が認められる。このため作業進行の都合からこの時点で掘り下げを中止した。

No. 3 トレンチ

現地表下 2 m 90cm まで掘り下げたが、この間を 19 層に分層することができた。

現代の攪乱、及び客土は 5 層にわたり、I b 層と仮称した客土層上面には深さ約 40cm 前後の溝状遺構を検出している。VI 層までは No. 2 トレンチ及び No. 4 トレンチにみられるものと同様な水田層と思われる層が続くが、VII 層以下には水性作用の所産になるとと思われる砂層が続き他のトレンチの層状況とは様相を異にする。

No. 4 トレンチ

基盤層と思われる砂層を検出するまで掘り下げた。現地表下 3 m 60cm を測る。基本的には 16 層に分層が可能であり、客土及び攪乱層を除く VI 層以下は水田層と思われる土層が続く。各層とも遺物を少量ながら包含している。

なお、No. 3 トレンチと他のトレンチとは著しく様相を異にするので、No. 3 トレンチと No. 4 トレンチの層序について第 24・25 図中に示しそれぞれ説明を加えた。

4. 調査結果の概要

各トレンチにおいて水田層と思われる土層を確認した他、No. 3 トレンチでは旧河川跡と思われる状況を確認することができた。以上のことは昭和 60 年に調査された本調査区西側に位置する畑地（農学部園芸学科温室建設予定地）の調査結果、および R I 施設建設時のボーリング調査の結果から裏づけられ、旧河川が No. 3 トレンチから既設の R I 実験棟の方向へ延びていたものと推定することができる。また、時期比定については遺物が僅少なため特定することはできないまでも No. 4 トレンチにおいて基盤層上面より糸切り底の土師器片の出土等がみられることから当地に人間生活の痕跡が認められるのは中世以降であり、当該期以降連綿と水田が営まれたことを看取することができる。旧河川の埋没時期については不明である。

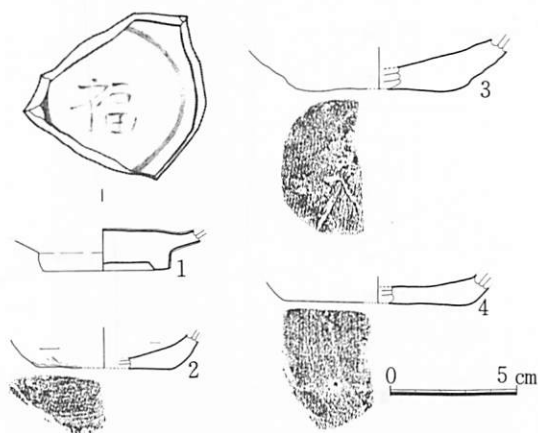
・遺物

客土・攪乱層下の水田該当層と考えられる層中から小片ながら素焼土器小片、陶磁器片などの出土がみられる。

青磁（第 23 図 1）

No. 4 トレンチ VIII 層下部より出土した青磁高台部破片である。磁胎は淡灰白色を呈し見込み部分に『福』の字のスタンプ文を配す。高台内面、及び畳付部分には回転ヘラケズリ（右回り）が施され施釉されない。

土師器（第 23 図 2～4）



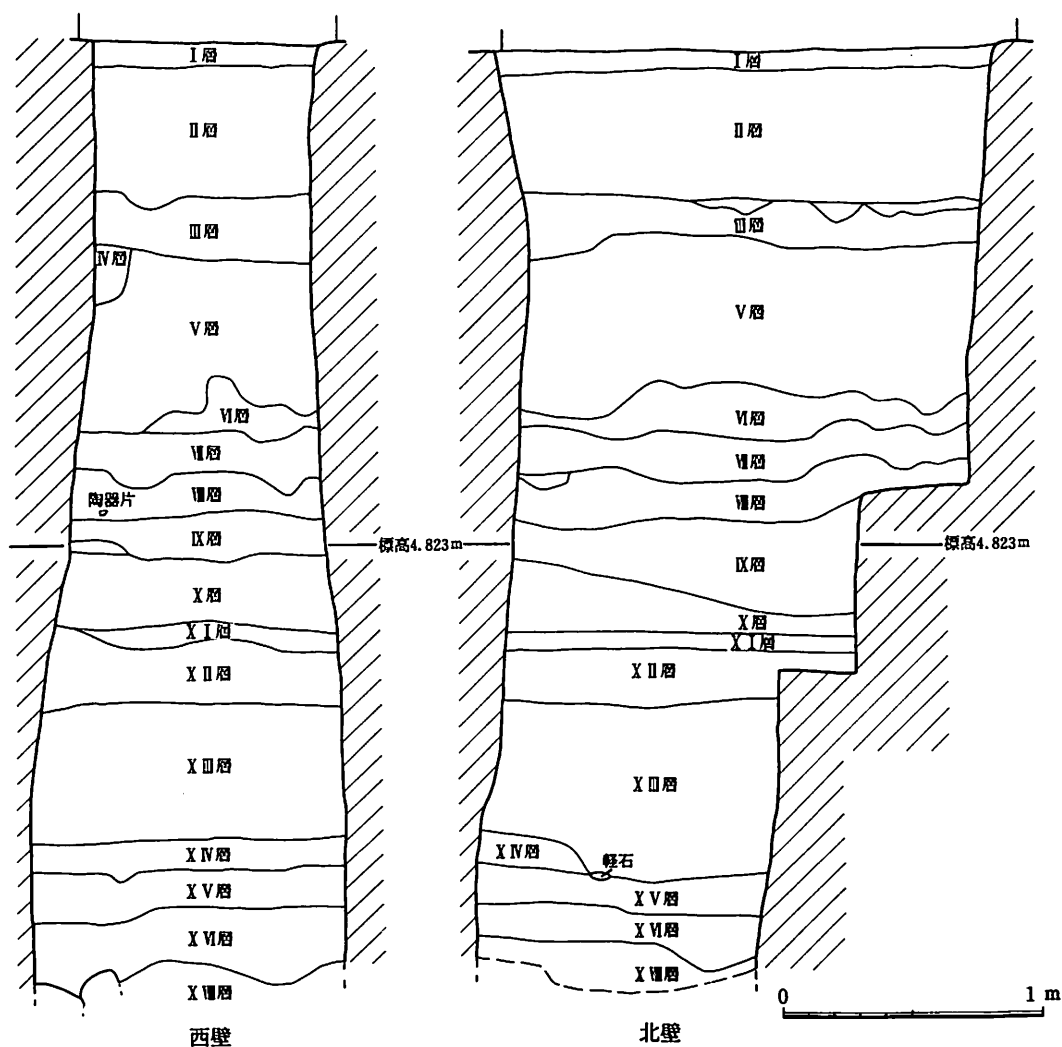
第 23 図 出土遺物（1 / 3）

2はV層下部(No. 4トレンチ), 3・4はIX層(No. 4トレンチ)中からの出土である。いずれも摩滅が著しく詳細は不明であるが2・4には底面に糸切底風の痕跡が認められる。

5. まとめ

今回の調査地点は鹿児島大学郡元キャンパスの北端部にあたる。これまでキャンパス北部は中央部および南部に比して調査事例が少なくその様相の把握作業が著しく立ち遅れていた地域でもある。事業の推進と文化財保護の調整を計るにあたり、事前にある程度状況を把握しておくことは必要不可欠な事象であり、そのような意味で今回の調査結果は貴重なものと言えよう。

調査成果としては中世以降の水田層ならびに旧河川跡を確認することができた他、少量ながら遺物の出土もみられたことがあげられる。



第24図 No. 4トレンチ土層断面図(1/30)

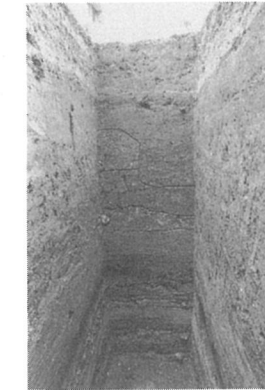
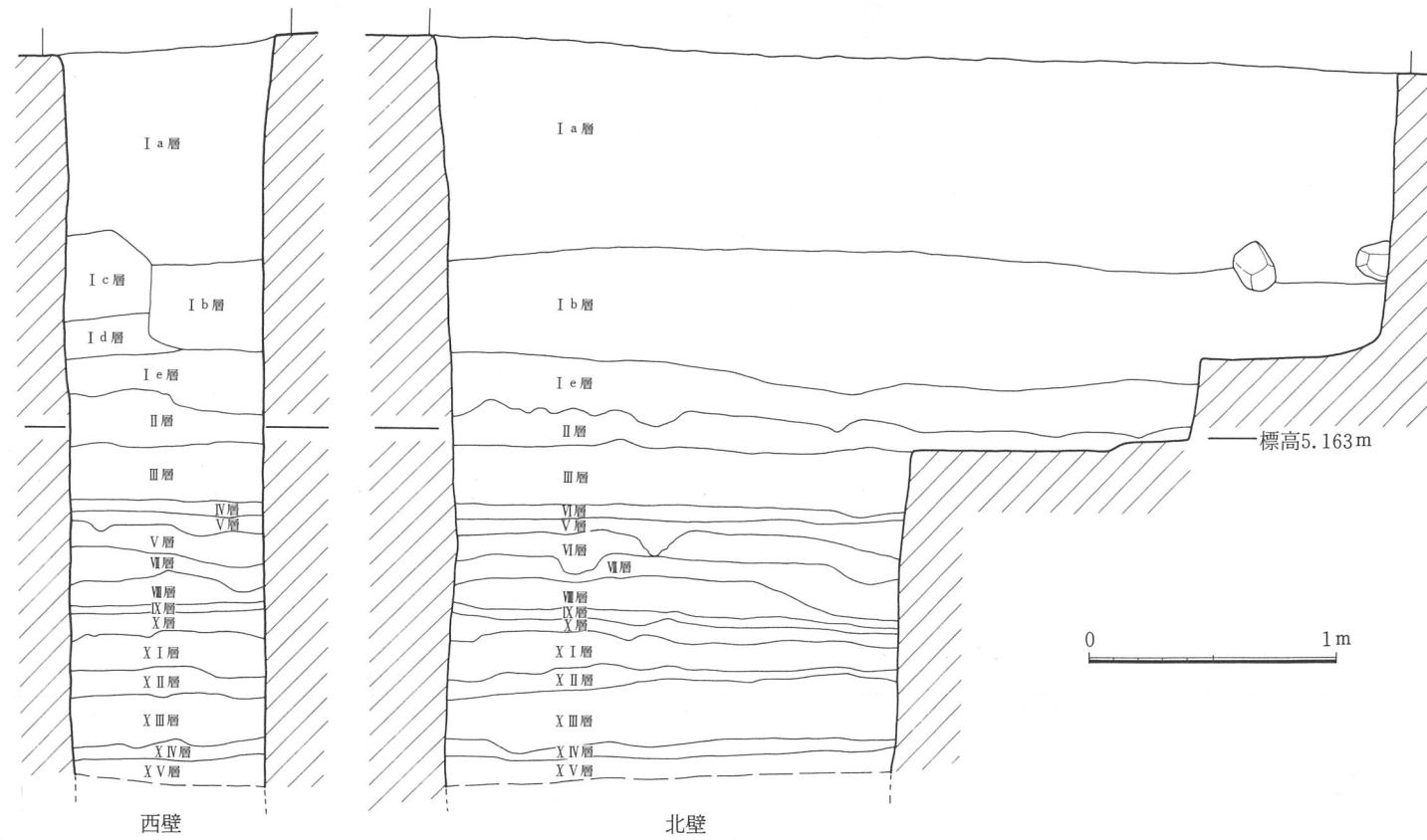


写真5 土層断面 (No. 3 トレンチ西壁)

No. 3 トレンチ

- I a 層：現代の桜島の降灰(約10cm)・粗砂層(25~30cm)・細砂層(10~15cm)・茶褐色のシラス二次堆積土を基調とし、黒色や茶色のシルト質土ブロックをまだらに含む層(約5cm)・暗灰色のシラス二次堆積土(約5cm)・緑灰褐色のシラス二次堆積土(20~30cm, 軽石粒を含む)から成る。
- I b 層：溝の埋土(明褐色の二次堆積土を基調として灰色のブロックをまだらに含む)
- I c 層：淡褐色~灰褐色のシラス二次堆積土, まだら状を呈する。
- I d 層：灰褐色砂質シルト層, 明褐色を呈する同質のブロックを含む。
- I e 層：青灰色砂質シルト層 II 層：淡褐色砂質シルト層(シラス二次堆積土) 下部は粘質を帯び、鉄分の浸透がみられる。
- III 層：灰色砂混じりシルト質土, 鉄分の浸透がみられる。
- IV 層：黄灰褐色砂混じりシルト質土, 鉄分の浸透が著しい。
- V 層：明黄色粘土 部分的に砂質土を含む。
- VI 層：明褐色砂質シルト層, 鉄分をかなり含んでおり、固くしまっている。
- VII 層：細砂層 鉄分が筋をなして垂下している。VIII 層：粗砂層 軽石礫及び軽石粒を含む, 鉄分が筋をなして垂下している。
- IX 層：灰色~褐色を呈する粘質土
- X 層：粗砂層 軽石礫, 軽石粒を含む。 XI 層：細砂層 XII 層：暗青灰色細砂層 XIII 層：粗砂層 XIV 層：暗青灰色細砂層
- XV 層：粗砂層 軽石礫, 軽石粒を含む。

No. 4 トレンチ

- I 層：桜島の灰 II 層：径2mm程度の軽石の小粒を含む。淡茶褐色を基調とする混土(客土)
- III 層：淡茶褐色土層(混土) II 層に類似するがII層に比してキメも細かく混土の割合も少ない。 IV 層：II層とIII層土との混土(客土)
- V 層：淡茶褐色を基調とする混土, しまりがなく土間には間隙を有する。(間隙部分に細砂混入…客土)
- VI 層：灰黒色粗砂層(灰色の粗い砂を基調とする混砂層…客土) VII 層：灰白色砂質土層(鉄分を含み, キメが細かい)
- VIII 層：淡灰黒色砂質土層(鉄分を若干含む。しまっている) IX 層：淡灰色砂質土層(土質はVIII層と同質である。鉄分の浸透はVIII層より少ない)
- X 層：灰黒色砂質土層(土質はVIII層, IX層と同質であるが黒味が強い)
- XI 層：淡灰黄色砂質土層(北西角に間層として存在する。土質は上層と同質である。キメが細かく, 鉄分を若干含む)
- XII 層：灰色砂質土層(軽石の小粒を若干含む。鉄分を含まない) XIII 層：灰茶褐色砂質土層(鉄分, 軽石を若干含む)
- XIV 層：XIII層土+黄色粗砂の層である。(二次たいせくの可能性が高い)
- XV 層：黒灰色砂質土層(軽石を少量含む。土層中には白色細砂をブロックとして含む)
- XVI 層：淡灰黒色粘質土層(こぶし大の軽石粒, 白色粒土をブロックで含む)
- XVII 層：XVI層土+XVIII層土の混土層(黄色の粗砂, 泥炭ブロックを含む)
- XVIII 層：黄白色粗砂層(軽石の小粒を多数含む南側部分には人頭大の軽石の集石もみられた)

※ No. 3 トレンチ, No. 4 トレンチの土層番号は必ずしも対応しない。

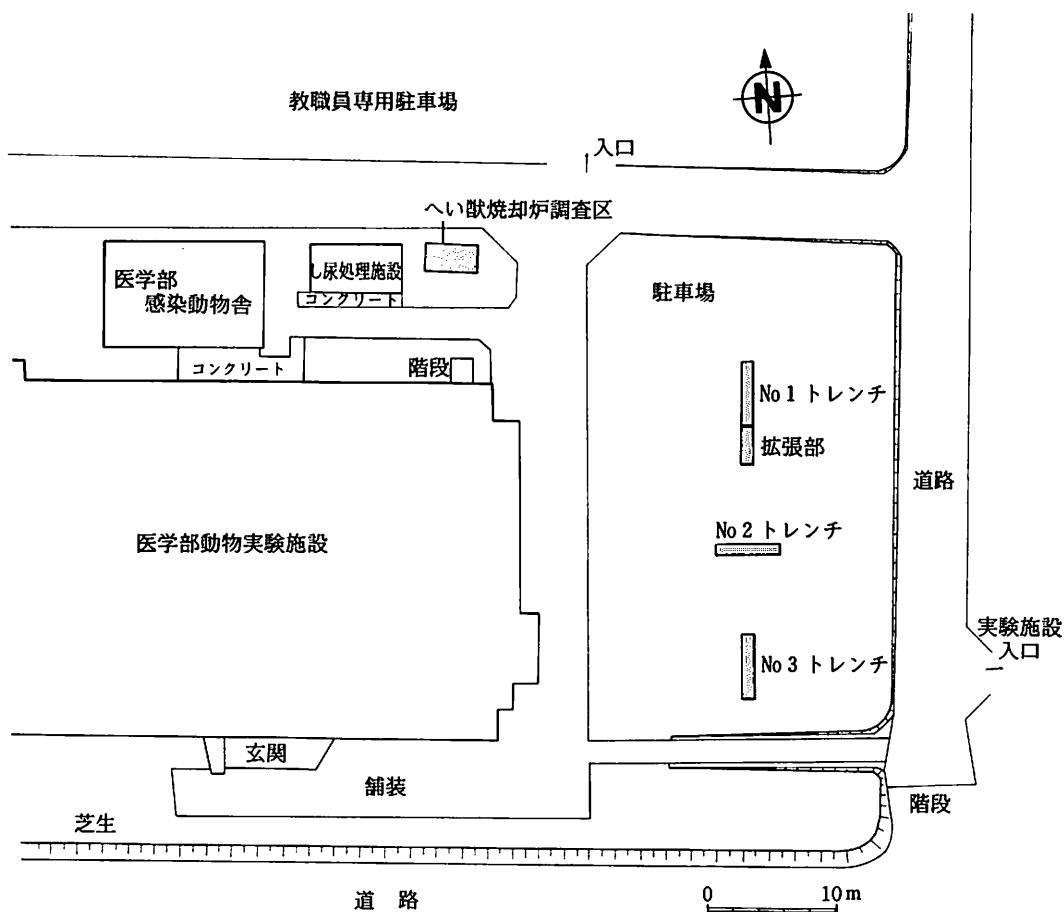
第25図 No. 3 トレンチ土層断面図(1/30)

第5章 鹿児島大学宇宿団地Ⅰ－7・8区における試掘調査

1. 調査に至る経過

医学部・歯学部・医療技術短期大学部を擁する鹿児島大学宇宿キャンパスは昭和45年の造成中におびただしい量の遺物の散布が認められ、遺跡の存在が明らかとなった。その当時採集された遺物の一部はすでに紹介されており、遺跡内容の一端をうかがい知ることができる。

現在の建物は旧地形（段々畑であったと言う）を利用し造成された削平地上に立地するため、場所によってはかなり良好な状態で遺物包含層が遺存していることが予想された。このような状況下、鹿児島市宇宿町1208-1に所在する鹿児島大学医学部敷地内に臨床研究棟の増築が計画された



第26図 試掘トレンチ位置図 (1/600)

ため、鹿児島大学埋蔵文化財調査室では増築予定地内の埋蔵文化財試掘確認調査を昭和62年1月19日から同年1月30日にわたり実施することになった。

2. 調査組織

調査期間 昭和62年1月19日～昭和62年1月30日

調査主体者 鹿児島大学学長 井形昭弘

調査体制 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 上村俊雄

室員 松永幸男・坪根伸也・金子千穂枝

3. 調査の経過

臨床研究棟の増築が計画されている部分は現在駐車場として利用されている平坦面で、標高76mを測る。調査は10日間実施したが、調査に先立ち、本地点より北西方向25mの所に、鹿児島大学医学部がへい猷焼却炉の設置を計画し、その部分の埋蔵文化財発掘調査を調査室に依頼してきたので、調査室では今回の調査と平行し同時に調査を実施した（第Ⅱ部第3章参照）。

調査トレンチは1m×5mを1単位とし、調査対象範囲のほぼ中央に第26図のように設定した。北側から順にNo. 1～No. 3トレンチと仮称して調査を進め、これらのうちNo. 1・No. 3トレンチについてのみ掘り下げを行った。また、No. 1トレンチについては、その南側部分に落ち込みを確認したので南側方向に3m拡張している。その結果、この落ち込みが溝状遺構であることを確認した。そこで土層確認のため深掘りを行った部分を除き、遺構検出面で掘り下げを中止している。調査終了後は埋め戻しを行い、現状に復している。

4. 層序（第27図・第28図）

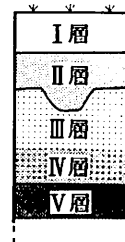
I層：客土層であり、20～40cm程度の厚さを測る。北側～南側へしだいに厚くなって行く状況を確認できた。パラス・ピンクシラス等を含み、硬くしまっている。

II層：黒褐色土層であり、土質はやわらかい。弥生時代中期土器片・成川式土器片（古墳時代該当）を包含する。造成時には本層の中位部分まで削平し客土をもったことが予想される。

III層：暗黄褐色火山灰土層であり、アカホヤ火山灰に比定できるも 第27図 基本土層模式図のと考えられる。安定した堆積状況を示し、20～40cm程度の厚さを測る。遺物は含まない。

IV層：淡黒茶褐色土層である。この層はIII層土に比して非常に硬質であり、少量であるが黄色バミスを含む。

V層：黒褐色土層であり、黄色軽石を多量に含む。前述のへい猷焼却炉調査区の状況を考慮すればV層は縄文時代早期の文化層と考えられ、遺物の出土が予想される。



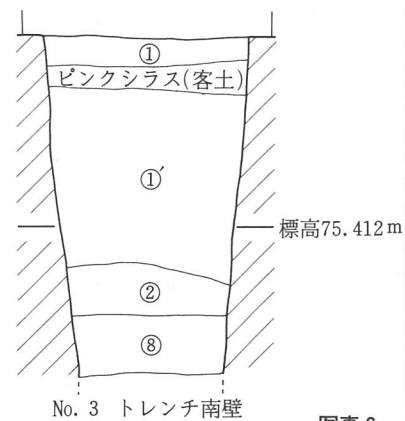
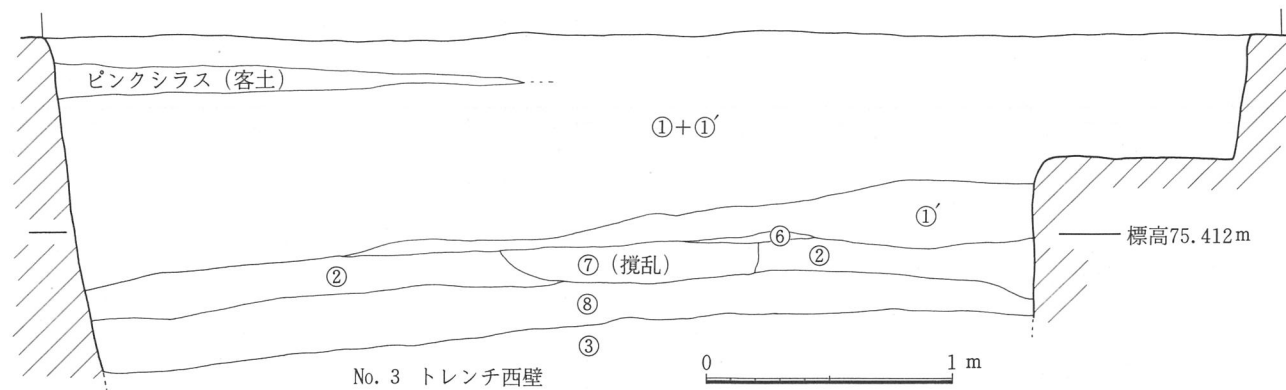
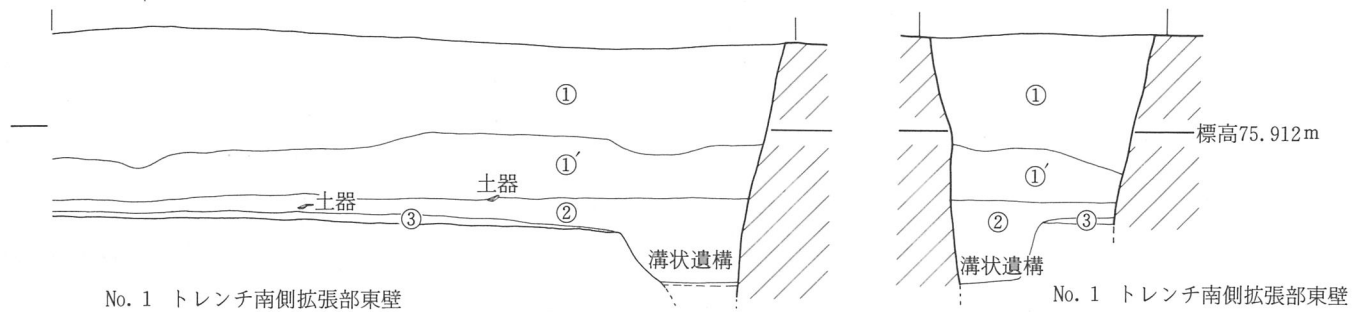
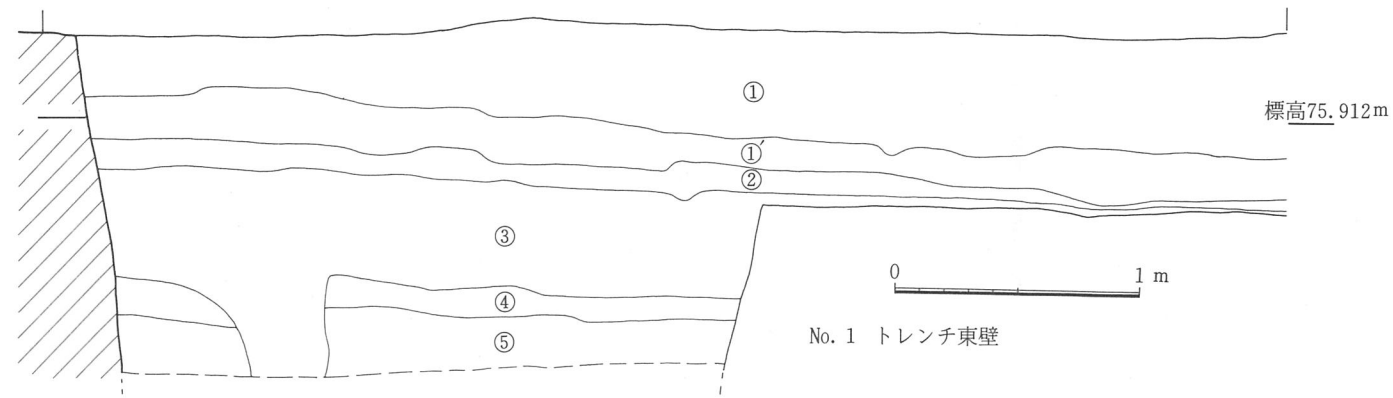
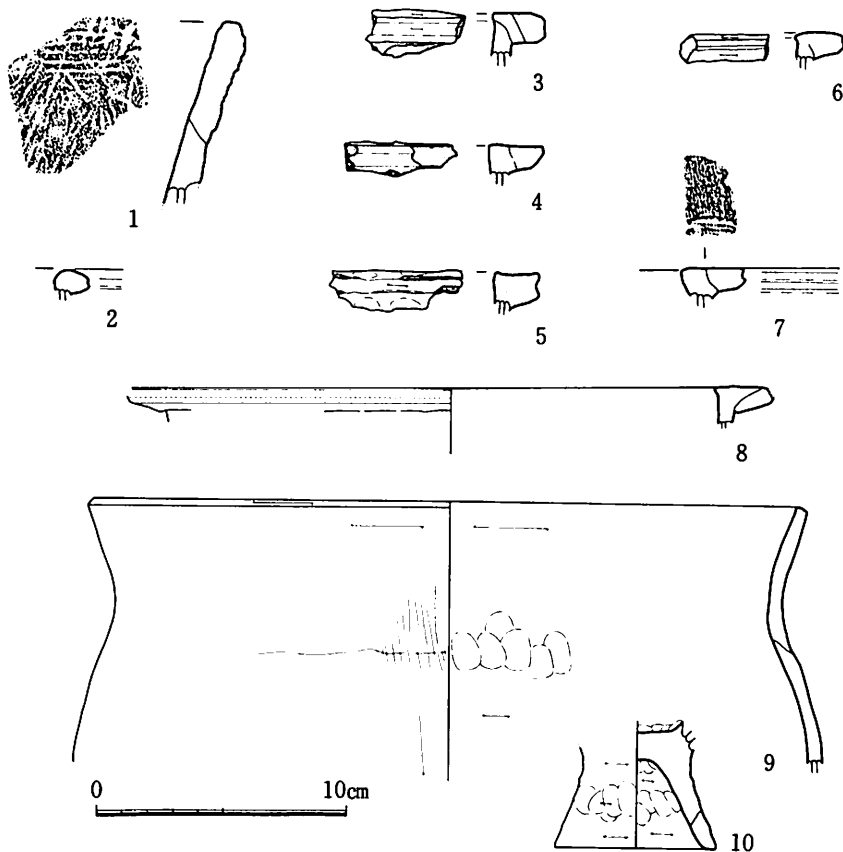


写真6 土層断面 (No. 1 トレンチ北壁)

- ① 基本層序Ⅰ層該当層(客土-バラス等を含み固くしまる。)
- ①' 基本層序Ⅰ層該当層(客土-下層土をブロック状に含み固くしまる。)
- ② 基本層序Ⅱ層該当層
- ③ 基本層序Ⅲ層該当層
- ④ 基本層序Ⅳ層該当層
- ⑤ 基本層序Ⅴ層該当層
- ⑥ Ⅱ層土のブロック
- ⑦ Ⅱ層土のブロック+①との混土
- ⑧ Ⅱ層土とⅢ層土の混土

第28図 土層断面図 (1/30)



第29図 出土遺物 (1 / 3)

5. 調査の概要

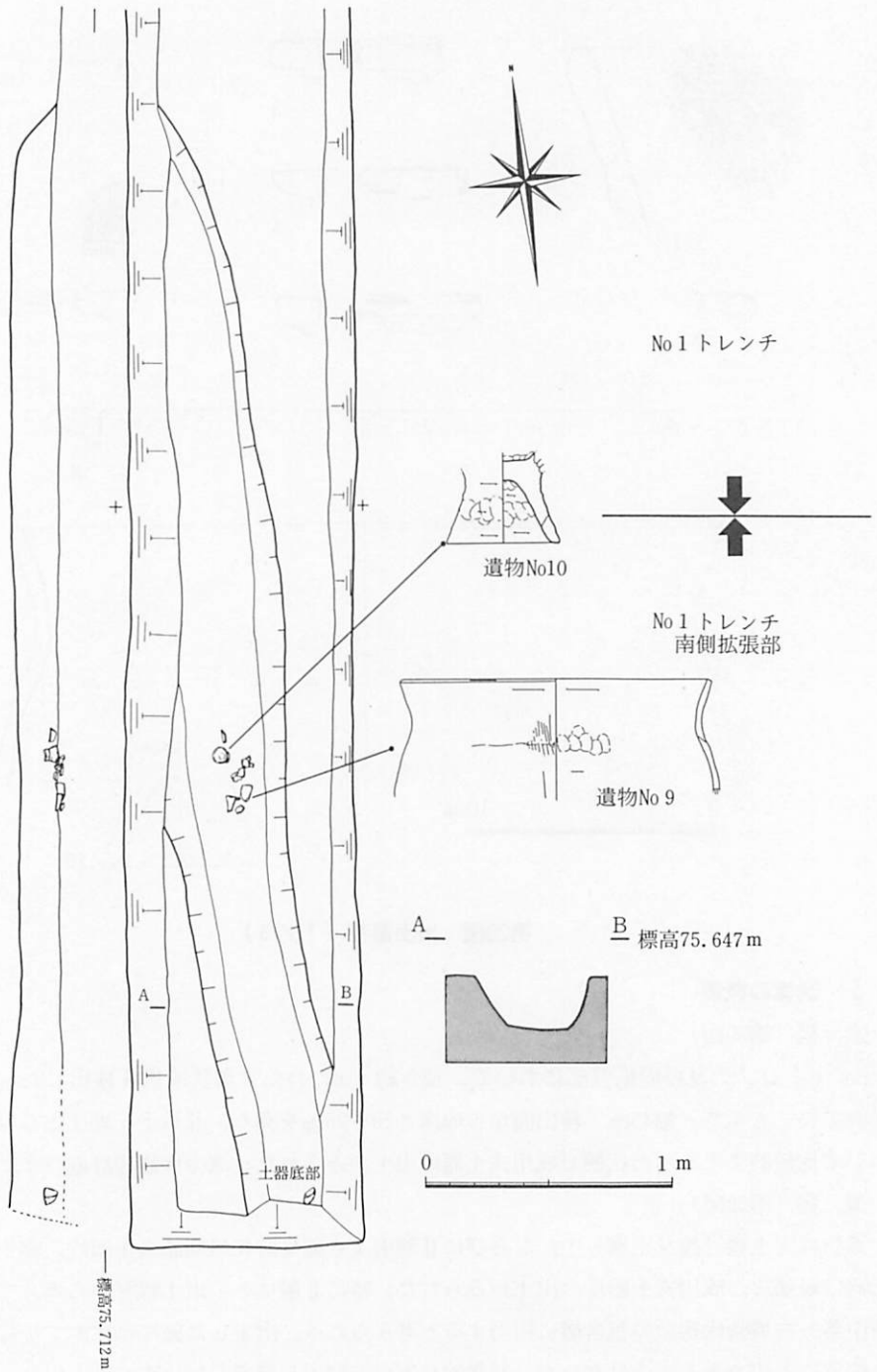
・遺構 (第30図)

No. 1 トレンチ及び同拡張部において、長さ約4 mにわたり溝状遺構を検出した。Ⅲ層に掘りこまれているもので、幅45cm・検出面からの深さ20~25cmを測る。Ⅱ層土を埋土とし検出面レベルにおいて比較的まとまった状態で成川式土器の出土がみられた。溝の性格等詳細は不明である。

・遺物 (第29図)

遺物は客土層(撓乱土層)中、ならびにⅡ層中より縄文時代早期該当土器片、弥生時代中期中葉土器口縁部片、成川式土器片の出土がみられた。特にⅡ層はその出土状況から考えて、弥生時代中期中葉~古墳時代初頭の包含層に相当すると考えられる。出土した破片はすべて小片であり、全形を知ることのできるものはないが、特徴的なものを図示し掲載している。

1は直線状に開口口縁部の直下に、貝殻腹縁による縦位の刺突をめぐらし、胴部には横位および綾杉状の貝殻条痕を施す。厚手の土器片であり焼成は不良である。口縁部の特徴は前平式(縄文時



第30図 溝状遺構実測図 (1/30)

代早期)の特徴を有しながらも、綾杉状の条痕をもつ点において一般的な前平タイプの土器とは異なる。

2～8は弥生時代中期中葉に比定される甕形土器の口縁部片である。同様の破片は昭和46年頃の造成時の採集品の中でも最も多く採集されており、該期の遺跡が広範囲にわたって主体をなして存在していたと予想される。特に7は口縁上面に短線を数ヶ所付すものであり、造成時の採集資料中にも散見できる他、近年、県内でも出土例が増加しつつある資料である。今回出土したものは短線施文部で欠損しているため、櫛状施文具によるものなのかあるいはヘラ工具によるものであるのか判断できなかった。

9・10は溝状遺構中に確認されたものである。9は口縁部片で復元口径28.9cmを計る。いわゆる成川式土器とよばれている土器様式群の中でも比較的古相の部類に属するものである。10は脚台部であり、諸特徴からやはり成川式土器の範疇に属するものと考えられる。9・10は接合できなかったが、胎土等から考えて同一個体である可能性が非常に高いと思われる。両方とも溝状遺構検出レベル位置において出土した。

6. まとめ

本調査地ではⅡ層中に弥生時代中期中葉・古墳時代初頭、Ⅴ層中に縄文時代早期の遺物をそれぞれ

表2 土器観察表

番号	器種	トレンチNo	出土層	法量	色調	胎土	調整	備考
1	深鉢 (口縁部)	No. 1	I層 (客土)		㊦ 赤褐黒色 ㊧ 赤褐黒色	石英粒 黒ウンモ	㊨ ミガキ? ㊩ 貝殻条痕	胴部部分の条痕は稜杉状を呈す。
2	甕 (口縁部)	No. 3	I層 (客土)		㊦ 淡黄褐色 ㊧ 淡黄褐色	石英粒	不明	全面摩滅
3	甕 (口縁部)	No. 1	I層 (客土)		㊦ 淡赤褐色 ㊧ 淡赤褐色	石英粒	㊨ 横位のナデ ㊩ 横位のナデ	口縁端部がわずかにくぼむ。
4	甕 (口縁部)	No. 1	Ⅱ層		㊦ 淡赤褐色 ㊧ 淡赤褐色	石英粒	㊨ 横位のナデ ㊩ 横位のナデ	全面摩滅
5	甕 (口縁部)	No. 3	I層 (客土)		㊦ 赤褐色 ㊧ 赤褐色	石英粒	㊨ 横位のナデ ㊩ 横位のナデ	指頭痕を残す
6	甕 (口縁部)	No. 1	I層 (客土)		㊦ 赤褐色 ㊧ 赤褐色	石英粒 黒ウンモ	㊨ 横位のナデ ㊩ 横位のナデ	
7	甕 (口縁部)	No. 1	Ⅱ層		㊦ 淡黄褐色 ㊧ 淡黄褐色	石英粒	㊨ 横位のナデ ㊩ 横位のナデ	口縁部上面に短線を施す。
8	甕 (口縁部)	No. 1	I層	26.2cm	㊦ 淡赤褐色 ㊧ 淡赤褐色	黒ウンモ	㊨ 横位のナデ ㊩ 横位のナデ	口縁端部欠損
9	甕 (口縁部)	No. 1	Ⅱ層	28.9cm	㊦ 赤褐色 ㊧ 黒茶褐色	長石 黒ウンモ	㊨ 横位のナデ ㊩ ハケナデ	外面煤の付着
10	甕 (脚台部)	No. 1	Ⅱ層	6.5cm	㊦ 淡黒茶褐色 ㊧ 赤褐色	長石 黒ウンモ	㊨ 横位のナデ ㊩ 横位のナデ	

れ確認することができ、さらにⅢ層上面において溝状遺構を検出している。

古墳時代該当遺物では第29図9・10に示した「成川式土器」と呼称される甕形土器が溝中あるいは溝上面に一括廃棄されたような状況で検出された。弥生時代中期中葉の遺物では該期の甕形土器の口縁部片の出土が認められる。これらは、昭和40年代の造成当時に採集された遺物の中でも最も量が多かったとされているものであり、また同時に調査を実施した医学部へい猷焼却炉設置に伴う埋蔵文化財発掘調査の結果等も考慮すれば、今回の臨床研究棟増築予定地での該期の生活遺構存在の可能性は非常に高い。県内においても当時期の遺跡・遺物の検出例は非常に僅少であり、貴重な遺跡といえる。縄文時代早期該当層については客土層中から1点出土しているのみではあるが、へい猷焼却炉建設予定地内の調査においてV層に早期土器を包含することが明らかにされており、本調査地のV層中にも縄文時代早期遺物が包含されることはほぼ確実であろう。

以上の諸点から当地、およびその隣接地には縄文時代早期・弥生時代中期～古墳時代にかけての包含層・生活遺構が広く存在することが予想され、事業の推進にあたっては埋蔵文化財に対する十分な配慮が必要である。

(参考文献)

1. 本田道輝「脇田亀ヶ原遺跡について―鹿児島大学宇宿キャンパス及びその周辺地区に於ける採集遺物の紹介―」【鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅰ】鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1986年

第6章 昭和61年度（昭和61年4月～昭和62年1月） 鹿児島大学構内における立合調査報告

昭和61年度（昭和61年4月1日～昭和62年1月31日）においては、以下の調査に伴って立合調査を実施した。

- ①附属病院中央診療棟新営（擁壁撤去）工事（昭和61年4月25日，宇宿団地F・G-7・8区）
- ②単車置場仮設工事（昭和61年12月25日～62年1月15日，郡元団地L-3～11）

①の工事はこれまで埋蔵文化財発掘調査が全く行われていない宇宿団地（医学部・歯学部キャンパス）における立合調査であった。宇宿団地においてはキャンパス造成時に多量の遺物が採集されながらもその包含層の存在の再確認がなされておらず、今回の立合調査はこのような状況を打開するための何等かの情報を提供するものと期待された。しかし、当該地は既にかかなりの削平を受けており、シラスが地表面に露呈している状況であった。

②の工事は掘削深度が極めて浅く、埋蔵文化財への影響はなかった。



写真7 医学部中央診療棟新営工事に伴う立合調査風景

写真8 医学部中央診療棟新営工事に伴う立合調査（アースドリル掘削坑）



鹿児島大学構内遺跡調査要項

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

(設 置)

第1条 本学に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(審 議)

第2条 委員会は、本学の施設計画を円滑に行うため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

- (1) 基本計画の策定に関すること。
- (2) 調査結果に基づく対策に関すること。

(組 織)

第3条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長
- (2) 各学部長、教養部長、附属図書館長、医学部附属病院長及び歯学部附属病院長
- (3) 事務局長
- (4) 学生部長

(委 員 長)

第4条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(議 事)

第5条 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は出席委員の3分の2以上をもって決する。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことが出来る。

(調査委員会)

第7条 委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行うため、埋蔵文化財調査委員会（以下「調査委員会」という。）を置く。

第8条 調査委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 第13条に規定する調査室の室長等の選任に関すること。
- (3) 第13条に規定する調査室の予算に関すること。
- (4) その他埋蔵文化財及び第13条に規定する調査室の業務に関すること。

第9条 調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、学長が任命する。

- (1) 各学部及び教養部の教授、助教授、講師の中から選出された者各1名
- (2) 第15条2項に規定する調査室長

2 前項第1号の委員の任期は2年とし、委員に欠員を生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第10条 調査委員会に委員長を置き、前条第1項第1号の委員の中から互選により選出する。

2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

第11条 調査委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決する。

第12条 調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(調査室)

第13条 調査委員会に、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行うための埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)を置く。

第14条 調査室は、次の業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

第15条 調査室に、室長、主任及びその他必要な職員を置く。

2 室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。

3 室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。

4 室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

5 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。

6 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。

7 職員は、調査室の業務に従事する。

(その他)

第16条 埋蔵文化財に関する事務は、事務局施設部において行う。

附 則

1 この規則は、昭和60年4月18日から施行する。

2 この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の任期は、第9条第2項及び第15条第4項の規定にかかわらず、昭和62年3月31日までとする。

3 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則(昭和51年1月22日制定)は、廃止する。

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会委員(昭和61年4月1日現在)

委員長 石神 兼文(鹿児島大学学長)

委員 米谷 静二(法文学部長)

長谷 綱男(理学部長)

松下 為隆(教育学部長)

橋村 三郎(医学部長)

浦郷 篤史 (歯学部長)	碓 醇 (工学部長)
小倉 弘司 (農学部長)	岩切 成郎 (水産学部長)
荒川 譲 (教養部長)	上村 剛一 (附属図書館長)
井形 昭弘 (医学部附属病院長)	野井倉武憲 (歯学部附属病院長)
河野 岩造 (学生部長)	明野 清和 (事務局長)

・鹿兒島大学埋蔵文化財調査委員会委員 (昭和61年4月1日現在)

委員長 難波 直彦 (農学部教授)	
委員 小田 洋 (法文学部教授)	桑波田 興 (教育学部教授)
大塚 裕之 (理学部助教授)	中野 勝磨 (医学部教授)
小片 丘彦 (歯学部教授)	桐岡 健 (工学部教授)
片岡千賀之 (水産学部助教授)	新田 栄治 (教養部助教授)
上村 俊雄 (調査室長併任 法文学部教授)	

・鹿兒島大学埋蔵文化財調査室 (昭和61年4月1日現在)

室長 (併) 法文学部教授	上村 俊雄
主任 (併) 法文学部助手	松永 幸男
技術補佐員	坪根 伸也
技術補佐員	金子千穂枝

受贈図書目録（1986年2月1日～1987年1月31日）

書名	発行機関	
単行本		
こんにちには縄文人－東京の遺跡展－	東京都教育委員会	1986年
若狭（要覧）	若狭歴史民俗資料館	1984年
藤ノ木古墳	斑鳩町教育委員会	1986年
竪穴式石室の地域性の研究	大阪大学文学部国史研究室	1986年
草戸千軒町遺跡－発掘調査十年の成果－	広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	1983年
草戸千軒町遺跡調査研究所－十年の歩み－	広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	1983年
小林コレクションⅠ－城南町東南部－	城南町歴史民俗資料館	1985年
宮崎の古墳文化	宮崎市教育委員会	1986年
鹿児島県埋蔵文化財の知識	鹿児島県教育委員会	1986年
鹿児島市文化財の手引き・その4	鹿児島市教育委員会	1986年
沖縄の文化財	沖縄県教育委員会	1980年
読谷の文化財 第1集（二版）	読谷村教育委員会	1981年
具志頭村の遺跡	具志頭村教育委員会	1986年
定期刊行物		
みやぎ考古学カレンダー 第1号	考古学カレンダー編集会編	1983年
東北大学埋蔵文化財調査年報1	東北大学埋蔵文化財調査委員会	1985年
年報5 昭和60年度	財茨城県教育財団	1986年

神奈川県立埋蔵文化財センター年報 5	神奈川県立埋蔵文化財センター	1986年
長野県埋蔵文化財センター年報 1	財(長野県埋蔵文化財センター)	1985年
長野県埋蔵文化財センター年報 2	財(長野県埋蔵文化財センター)	1986年
長野県埋蔵文化財ニュースNo17	財(長野県埋蔵文化財センター)	1986年
長野県埋蔵文化財ニュースNo18	財(長野県埋蔵文化財センター)	1986年
研究紀要 第9巻	名古屋市博物館	1986年
人類学博物館紀要 第6号	南山大学人類学博物館	1984年
人類学博物館紀要 第7号	南山大学人類学博物館	1985年
南山大学人類学博物館館報 第12号～第21号 年報	南山大学人類学博物館 福井県立若狭歴史民俗資料館	1985年
滋賀史学会誌 第5号	滋賀史学会	1986年
京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度 文化財学報 第4集	京都大学埋蔵文化財研究センター 奈良大学文学部文化財学科	1986年 1986年
大阪市文化財情報 葦火 創刊号	財(大阪市文化財協会編集・発行)	1986年
大阪市文化財情報 葦火 第2号	財(大阪市文化財協会編集・発行)	1986年
大阪市文化財情報 葦火 第3号	財(大阪市文化財協会編集・発行)	1986年
大阪市文化財情報 葦火 第4号	財(大阪市文化財協会編集・発行)	1986年
大阪市文化財情報 葦火 第5号	財(大阪市文化財協会編集・発行)	1986年
東大阪市文化財協会ニュース Vol. 1, No 1	財(東大阪市文化財協会)	1986年

東大阪市文化財協会ニュース Vol. 1, No 2	働東大阪市文化財協会	1986年
東大阪市文化財協会ニュース Vol. 2, No 3	働東大阪市文化財協会	1986年
兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度	兵庫県教育委員会	1986年
ひょうごの遺跡 9号	兵庫県教育委員会	1986年
蒜山研究所研究報告 第11号	岡山理科大学蒜山研究所	1980年
倉敷考古館研究集報 第19号	倉敷考古館編集発行	1986年
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査 年報Ⅰ	広島大学統合移転地埋蔵文化財調査 委員会	1982年
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査 年報Ⅱ	広島大学統合移転地埋蔵文化財調査 委員会	1985年
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査 年報Ⅲ	広島大学統合移転地埋蔵文化財調査 委員会	1985年
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査 年報Ⅳ	広島大学統合移転地埋蔵文化財調査 委員会	1985年
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査 年報Ⅴ	広島大学統合移転地埋蔵文化財調査 委員会	1986年
山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ	山口大学埋蔵文化財資料館	1985年
山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ	山口大学埋蔵文化財資料館	1985年
山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ	山口大学埋蔵文化財資料館	1985年
セラミック九州 No14	佐賀県立九州陶磁文化館報	1986年
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 ニュース No14	大分県立宇佐風土記丘歴史民俗資料 館	1986年
宇土市史研究 第7号	宇土市史研究会	1986年
紀要 第3号	沖縄県教育委員会文化課	1986年

調査報告書

花巻遺跡	黒石市教育委員会	1986年
赤羽台・袋低地・舟渡	東北新幹線赤羽地区遺跡調査団	1986年
奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡	(財)茨城県教育財団	1986年
大久保A遺跡・大久保B遺跡	(財)茨城県教育財団	1986年
大境遺跡	(財)茨城県教育財団	1986年
南三島遺跡5区	(財)茨城県教育財団	1986年
南三島遺跡・6・7区(上)	(財)茨城県教育財団	1986年
南三島遺跡・6・7区(下)	(財)茨城県教育財団	1986年
屋代B遺跡	(財)茨城県教育財団	1986年
小場遺跡	(財)茨城県教育財団	1986年
細原遺跡	(財)茨城県教育財団	1986年
長野北部遺跡群六反田中屋敷Ⅱ	高崎市教育委員会	1986年
法政大学多摩校地遺跡群Ⅰ A地区	法政大学	1986年
法政大学多摩校地遺跡群Ⅱ G地区	法政大学	1986年
海老名本郷 (1)	(株)富士ゼロックス本郷遺跡調査団	1985年
千葉地東遺跡	神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10	1986年
代官山遺跡	神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11	1986年
田名稻荷山遺跡	神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告12	1986年

東耕地遺跡	神奈川県立埋蔵文化財センター調査 報告14	1986年
神奈川県埋蔵文化財調査報告28	神奈川県教育委員会	1986年
田名稻荷山遺跡調査の概要	神奈川県立埋蔵文化財センター	1986年
代官山遺跡調査の概要	神奈川県立埋蔵文化財センター	1986年
東耕地遺跡調査の概要	神奈川県立埋蔵文化財センター	1986年
烏浜貝塚	福井県教育委員会	1984年
烏浜貝塚	福井県教育委員会	1985年
醍醐古墳群発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1986年
栗栖野瓦窯跡発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1986年
京都市内遺跡試掘立合調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1985年
御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1985年
平安宮跡発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1985年
烏羽離宮跡発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1985年
中臣遺跡発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1985年
奈良女子大学構内遺跡 (発掘調査概報Ⅲ)	(財)奈良女子大学	1986年
教育施設の建築的研究	(財)八尾市文化財調査研究会	1986年
八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 (昭和56・57年度)	(財)八尾市文化財調査研究会	1983年
八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 (1980・1981年度)	(財)八尾市文化財発掘調査研究会	1983年
埋蔵文化財発掘調査	(財)八尾市文化財調査研究会	1983年

成法寺遺跡	(財)八尾市文化財調査研究会	1983年
木の本遺跡	(財)八尾市文化財調査研究会	1984年
昭和58年度事業概要報告	(財)八尾市文化財調査研究会	1984年
八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 (昭和59年度)	(財)八尾市文化財調査研究会	1985年
昭和59年度事業概要報告	(財)八尾市文化財調査研究会	1985年
八尾市内遺跡(昭和60年度)発掘調査報告書	(財)八尾市教育委員会	1985年
芝ヶ丘遺跡発掘調査概報	(財)東大阪市文化財協会	1985年
法通寺	(財)東大阪市文化財協会	1985年
神並遺跡Ⅰ	(財)東大阪市文化財協会	1986年
丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書	兵庫県教育委員会	1985年
相生市・緑ヶ丘竪址群	兵庫県教育委員会	1986年
明石城跡Ⅱ	兵庫県教育委員会	1986年
上板井古墳群	兵庫県教育委員会	1986年
岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2冊 埋蔵文化財調査の概要	岡山大学埋蔵文化財調査室 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査 委員会	1986年 1982年
三国の鼻遺跡Ⅱ	福岡県小都市教育委員会	1986年
横隈狐塚遺跡Ⅲ	福岡県小都市教育委員会	1986年
三沢栗原遺跡Ⅴ	福岡県小都市教育委員会	1986年
大板井遺跡Ⅴ	福岡県小都市教育委員会	1986年

横隈鍋倉遺跡	福岡県小都市教育委員会	1986年
津古中製遺跡	福岡県小都市教育委員会	1986年
三沢・東古賀遺跡	福岡県小都市教育委員会	1986年
宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査概報Ⅱ	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1985年
宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査概報Ⅲ	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1986年
鶴見古墳	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1986年
富の原遺跡群確認調査概報Ⅴ 第11集	長崎県大村市教育委員会	1986年
大村城（玖島城）	長崎県大村市教育委員会	1986年
女夫塚古墳（女塚）	熊本県宇土市教育委員会	1985年
宇土城跡（城山）	熊本県宇土市教育委員会	1985年
ヤンボシ塚古墳・檜崎古墳	熊本県宇土市教育委員会	1986年
大丸・藤ノ迫遺跡	熊本県教育委員会	1986年
史跡 人吉城跡Ⅱ	熊本県人吉市教育委員会	1986年
セベツト遺跡	宮崎県高千穂町教育委員会	1984年
梅ノ木原遺跡	宮崎県高千穂町教育委員会	1985年
東平下周溝墓群	宮崎県川南町教育委員会	1982年
川南町の埋蔵文化財	宮崎県児湯郡川南町教育委員会	1983年
川南古墳群 第21・57号墳	宮崎県児湯郡川南町教育委員会	1984年
上ノ原遺跡	宮崎県児湯郡川南町教育委員会	1986年

新村遺跡・高山遺跡	宮崎県西諸県郡野尻町教育委員会	1986年
浮ノ城遺跡	宮崎市教育委員会	1986年
蓮ヶ池横穴群	宮崎市教育委員会	1986年
宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報 (Ⅴ)	宮崎県教育委員会	1985年
都城市文化財調査報告(第4集)	宮崎県都城市教育委員会	1986年
鹿児島大学郡元団地内遺跡 (J-7地点)	鹿児島大学理学部・鹿児島大学法文 学部考古学研究室	1986年
国分・隼人テクノポリス建設地区 埋蔵文化財分布調査報告書	鹿児島県教育委員会	1986年
泉川遺跡	鹿児島県教育委員会	1986年
ケジⅠ・Ⅲ遺跡	鹿児島県教育委員会	1986年
五社遺跡	鹿児島県薩摩郡東郷町教育委員会	1986年
妻山元遺跡	鹿児島県国分市教育委員会	1985年
妻山元遺跡(埋蔵文化財のはなし)	鹿児島県国分市教育委員会	1985年
城山山頂遺跡	鹿児島県国分市教育委員会	1985年
早山遺跡・宮の脇遺跡	鹿児島県鹿屋市教育委員会	1986年
岡崎4号墳・1号地下式横穴	鹿児島県串良町教育委員会	1986年
瀬ノ上遺跡・平田遺跡	鹿児島県大口市教育委員会	1986年
前目灰塚遺跡	鹿児島県菱刈町教育委員会	1986年
尾長谷迫遺跡	鹿児島県指宿市教育委員会	1986年
田間田遺跡	鹿児島県薩摩郡鶴田町教育委員会	1986年

明神下岡遺跡	鹿児島県出水郡長島町教育委員会	1986年
上場の遺跡	鹿児島県出水市教育委員会	1986年
西船子遺跡	鹿児島県指宿郡喜入町教育委員会	1986年
前谷遺跡	鹿児島県曾於郡松山町教育委員会	1986年
浏ノ尻古墳	鹿児島県出水郡東町教育委員会	1986年
上中段遺跡	鹿児島県末吉町教育委員会	1986年
山久保A遺跡・山久保B遺跡・蔵園遺跡 ・中迫遺跡・西中畑遺跡・小迫遺跡	鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会	1986年
龍郷町の埋蔵文化財	鹿児島県大島郡龍郷町教育委員会	1986年
知名町埋蔵文化財分布調査概報	鹿児島県大島郡知名町教育委員会	1986年
ヨラキ洞穴	鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会	1986年
城遺跡・下山田遺跡・ケジⅢ遺跡	鹿児島県大島郡笠利町教育委員会	1986年
下田原貝塚・大泊浜貝塚	沖縄県教育委員会	1986年
知花遺跡	沖縄県教育委員会	1986年
地荒原遺跡	沖縄県教育委員会	1986年
竹下遺跡	沖縄県教育委員会	1986年
石嶺坂石敷道	沖縄県教育委員会	1986年
伊原遺跡	沖縄県教育委員会	1986年
イシグスク内古墓群	沖縄県教育委員会	1986年
松田遺跡	沖縄県教育委員会	1986年

米須貝塚	糸満市教育委員会	1986年
川田原貝塚	糸満市教育委員会	1986年
地荒原貝塚・苦増原遺跡	具志川市教育委員会	1983年
今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書	沖縄県今帰仁村教育委員会	1986年
木綿原	沖縄県読谷村教育委員会	1978年
備瀬貝塚	本部町教育委員会	1986年

付 編

- I. 教育学部附属中学校敷地内遺跡発掘調査報告
- II. 入来牧場（鹿児島大学農学部附属農場）分布調査報告
- III. 鹿児島大学工学部機械工学学科校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（付. 教育学部における試掘調査）

付編 I. 教育学部附属中学校敷地内遺跡

河 口 貞 徳

遺跡発掘概要報告

昭和38年11月25日

発掘担当者 鹿児島市鴨池町334 河 口 貞 徳

文化財保護委員会 殿

1. 遺跡地 鹿児島県鹿児島市郡元町
2. 発掘年月日 昭和38年7月11日～同21日
3. 遺跡の種類 弥生式土器文化後期住居址
4. 発掘概要

①地形・位置・地層

遺跡地は鹿児島市西南隅の地点にあり、海岸より約1軒の距離にある。遺跡は沖積地であるが、紫原のシラス台地下の小段丘ともみられる地形で、一ノ宮神社より継続した微高地である。

地層は表面10～15㎝灰褐色砂まじり層（表層）、第2層20～25㎝灰白色軽石まじり層、以上の2層は埋め立てなどの人為的な原因により形成されたものと思われる。第3層60～70㎝黒色粘質層、この層の表面は水田耕作が行われた時期の耕土であつたらうと思われる。第4層紅褐色砂層（基盤）、河底の堆積又は氾濫原面と思われるもので、遺跡形成時の地表面をなしたものであろう。

この地はもと県立医大の敷地で、以前は水田地帯であつたが、現在鹿児島大学附属中学校の敷地となっている。大学の設立の際に地ならし等の作業によって地形にも変化がおこつたが、県立医大の敷地であつた時代には、遺跡地東側には水路があり、これを境にして約1米の高さで東側の水田にのぞむ小台地状の微高地であつた。この時期から現在の地形になるまでには、遺跡地は削られ又、埋立てられるというような人工が加わつた跡がみられるが、遺物包含層は第3層下部、第4層表面であるために揜ぜられてはいないことが判明した。

②周辺遺跡

この遺跡地は東南方向にあたる一ノ宮遺跡より継続したもので広範囲にわたる地域をしめる遺跡の一部である。

一の宮は昭和25年7月より8月へかけて発掘を行っているが、弥生中期の住居址数か所と、弥生中期及び後期の遺物を出土、両者の層位関係も明らかにされた。

昭和26年3月に本遺跡の一部が発掘が行われ、弥生後期の住居址が発見された。この住居址は砂層中に掘りこまれたもので、円形竪穴住居址である。

径4.42米、深さ30㎝、床面は硬くふみかためられ、心もち東へ傾斜している。炉址がみられない点は特異なものである。

最近本遺跡の北東部にあたる文理学部玉利池附近に多量の土器の出土がみられたが、ほとんど後期のもので、わずかに中期の土器片が混出したごくまれな例もある。この点より考えると本遺跡は

さらに北東へ延びていたものと考えられる。

附近の遺跡では唐湊、笹貫、高見など紫原等シラス台地及びその継続したシラス台地の縁辺部は弥生式土器文化の遺跡地をなしており、大概、後期に属するものであるが、高見遺跡のみは弥生前期に属するものである。

少々離れた地点では鹿児島市沖積平野の東北部山麓地に位置する玉里町の遺跡がある。これは、弥生前期末から中期に至る遺跡と思われ、石包丁の出土がみられる。

以上のように鹿児島市周辺には、山麓地帯に弥生の集落がみられるが、一の宮より本遺跡に至る地域は明瞭に判明した最も大きな弥生集落の営まれた地域であった。

③調査の概要

発掘は附属中学校正門より西側約100米の地点にコンクリート壁に沿って、幅2米、長さ20米のトレンチを設けた。理由は前の県立医大があった時代に行った発掘によって発見された円形竪穴住居跡がこの地点附近であったと推定されたからである。はたして、トレンチの東端部にあって、竪穴の一部を発見したので、6米幅でコンクリート壁ぎりぎりまで約4米を拡張発掘を行ったのである。この発掘によって、不正円形の竪穴住居跡を発見することができた。

遺物としては第3層下部、第4層表面が包含層であって、この層から弥生式土器が散発的に出土している。大部分が後期に属するものであるが、一片だけ中期の甕形土器の底部破片を発見した。

④出土遺物

◎土器

完全な器形をとどめるものは一箇であった。上げ底の器台付鉢形土器である。高さ23㎝、径20㎝、第5調査区の第3層黒色粘質層中から出土したもので後期に属する。

壺形土器

完形品はないが、直口又は少々外へひらいた口縁部を有し、肩の張った倒卵形の器胴を有し、底部は丸底又は小さな平底の土器で、頸部の口縁部と胴部の境に凸帯があり、また肩部にも幅の広い凸帯を有する。これらの凸帯には竹管文、篋がきの斜行文、格子文、S字状文、或はこれらを組合せた文様を施している。

甕形土器

上げ底バケツ形の器形を有し、口縁部よりやや下った位置に縄状の凸帯を有している。指宿十二町下里の上層土器と同一形式で、近くでは笹貫が同一形式である。

高杯形土器

丹塗磨研で脚はラッパ状にひらき、杯は半球形と思われる。

◎その他の遺物

軽石加工品

軽石礫に人工を加えたもので、他遺跡では輪状のもの、あるいは、小孔を穿ったもの等種々みられる。

砥石

台形の砂岩質のもの一個が出土した。

⑤住居址

住居址は第4層砂層を掘り込んでつくられている。

形は不正円形で長径4.65米、短径4米、深さ(壁高)0.4米である。

四隅に支柱のピットがあり、北側のピットは軽石礫をもってかためられ柱を固定している。この他に床面に四か所のピットがみられ、二か所は南西隅、他の二か所は北東隅に並んでいる。

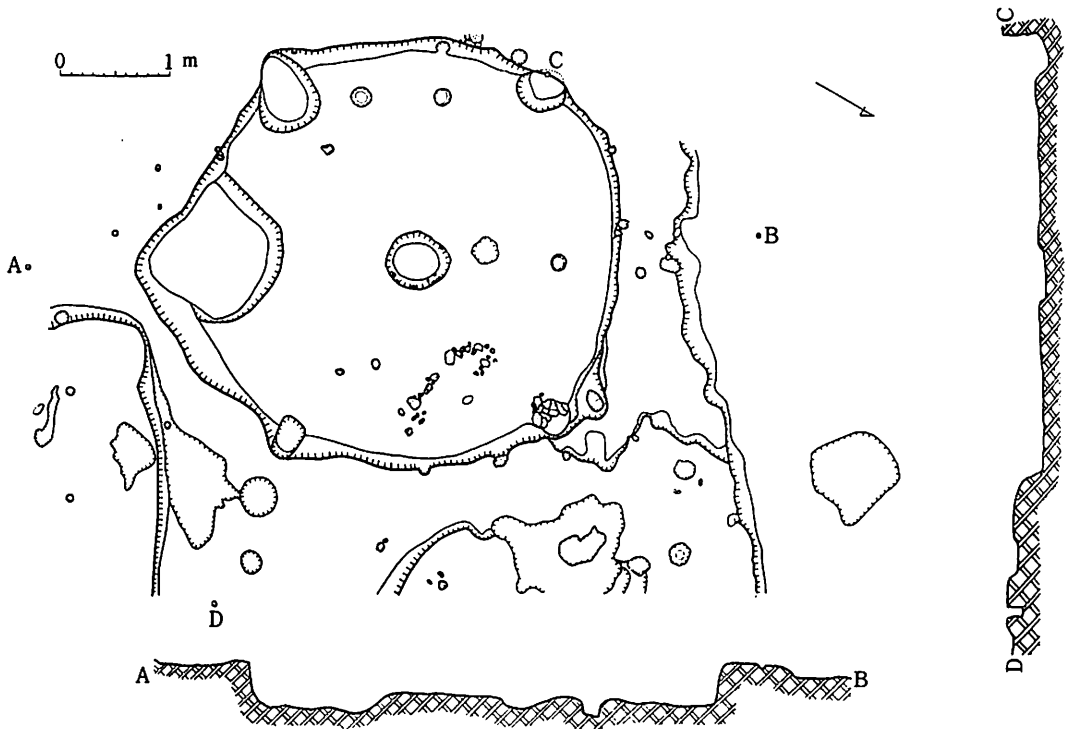
この他住居址壁面に接して小ピットがみられるが、これらは傾斜しているものもあり、これに柱をたてるとすれば屋根の傾斜に一致すると思われるので、垂木の孔であろうと思われる。

竪穴外にも若干のピットがみられるが、用途不明である。

床面中央には、床面を更に掘り窪めた炉址が発見された。形状は楕円形で長径60糎、短径53糎、深さ10糎である。炉のふちには部分的に軽石礫がはめられていた。炉中には木炭片が残存し、炉底は焼けて変色しているのが認められた。

床面北東隅には軽石の小礫を幅50糎、長さ1米(略東西方向)に並べた場所があり、この部分には弥生式土器が床面に密着して出土したものもあった。この地点は土器置き場ではなかろうか。

構造上特色とみられるのは、住居址の南々東に当たる部分が外方え張り出しており、この部分は



第31図 附属中学校敷地内遺跡検出住居址(鹿児島市史Iより転載)

床面も1.3米の径を有す菱形の部分が、床面より更に16榿深く掘り込まれて、入口の観があった。

◎住居趾外の状況

住居趾外の東側の部分は、さらに約10榿高く段をなした部分がみられ、この附近に深く掘られた（深いところで45榿）部分があり焼土、木炭の発見等の理由から住居趾外の炉かとも思われた。住居趾北東部にも一段高くなった部分があり、住居趾北西側は幅50~70榿で段をつくって北西側は約10榿低くなっていた。これらの構造は本住居趾の遺構であるが、隣接した遺構の一部であるかは不明である。

5. 考察

遺物からみるとこの遺跡は弥生式土器文化後期に属するものである。住居趾は昭和26年に発掘されたものと大きさはほとんどかわらないが、前者が炉趾を有しなかったのに比べ、中央に炉趾を有する点標識的な遺構である。

入口と思われる一段低く掘りくぼめた床面を有する点は特色あるものと思う。

昭和25年以來の発掘状況から今回に至る発掘まで、その結果を考えあわせると、この地域は中期から後期に至る大集落跡であると思われる。



写真9 調査状況

付編Ⅱ. 入来牧場（鹿児島大学農学部附属農場）
分布調査報告

上 村 俊 雄・中 園 聡

1. 調査に至る経過

入来牧場は、鹿児島県薩摩郡入来町浦之名大谷4,022（農学部の北西42kmの八重山）に所在する。八重山は薩摩郡と日置郡の境界にあり、主峰は横尾岳（676.8m）である。輝石安山岩で形成され、その風化した粘土が全山を覆っている。鹿児島湾へ流れる河川と川内川支流の分水嶺となり深い谷を形成している。

八重山高原の穏やかな傾斜面を利用して、標高516.7mの高原に入来牧場は開設されている。鹿児島農林専門学校以来の附属施設、種子島牧場（大正7年～昭和42年）の代替として、1968年（昭和43年）設置された。

総面積146万3,884平方メートル。このうち、畑は91万平方メートル（飼料畑・採草地を含む）、放牧地は49万平方メートル、その他、水源かん養林・庇蔭林・管理敷地となっている。

実習に参加した農学部の学生達が、この入来牧場の敷地内で石斧を採集していることは、早くから知られていた。

昭和59年中旬、埋蔵文化財対策委員の小倉弘司教授（現農学部部長）より、入来牧場の主幹道路整備計画に支障を来すことがないように、事前に分布調査を実施して欲しい旨、法文学部考古学研究室に要請があった。

これをうけて、同年5月30日、上村俊雄（法文学部助教授）・松下昌弘・岩見典子・坪根伸也・武石静子・奥村真由美・吉元昌代（以上考古学研究室学生）が、片山忠夫教授（附属農場農場主事）の他、入来牧場の関係者の協力を得て、分布調査を実施した。

遺物の報告については、中園聡（考古学専攻4年）に委ねた。

小倉教授・片山教授の他、調査にご協力頂いた入来牧場の関係者にお礼を申しあげたい。

（上村俊雄）

2. 採集遺物について

(1) 石器（第34図・第35図14・15）

石器・石片は多く採集されたが、その中でも黒曜石が主体であり、その他の石材はわずかである。

1は漆黒色の黒曜石を用いた比較的小型の石鏃である。調整は全面に及んでおり、比較的整った形状である。完形品。

2は他に比べて透明度の強い黒曜石を用いている。全体に光沢が強い。主軸から半分は欠損しているが、欠損面の風化は他の面と同程度である。

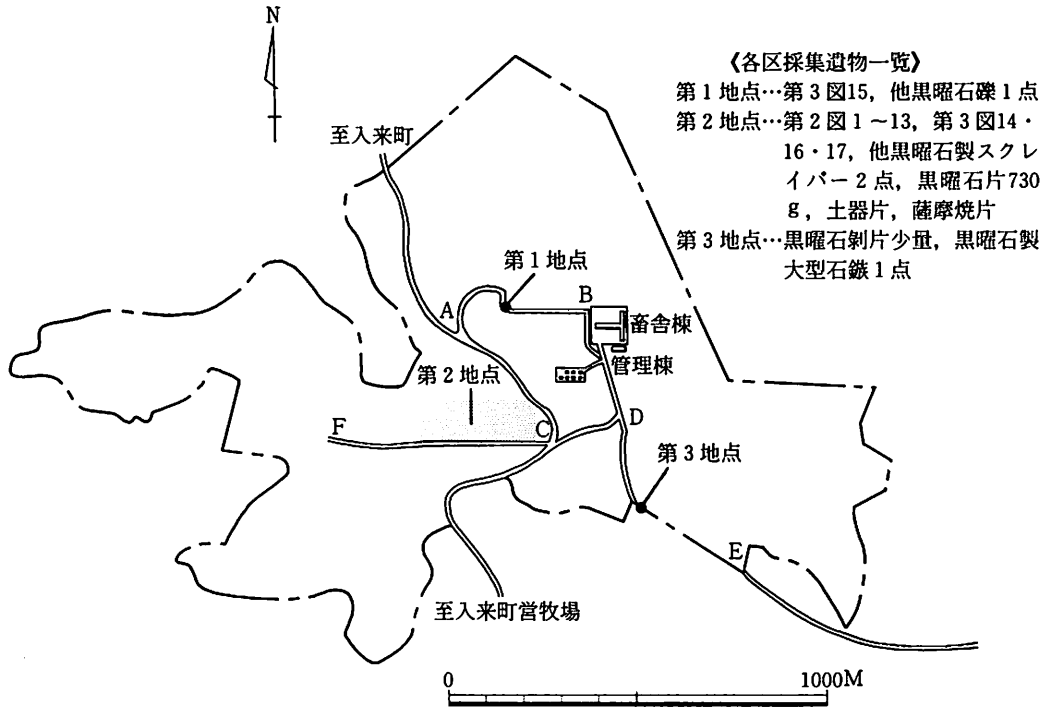
3は漆黒色の黒曜石を用いたやや小型の石鏃で、先端部を欠損する。欠損面の風化は他の面と同程度である。脚端は直線的である。両面中央に Step Flaking 状の剝取が観察される。裏面に僅かに剝片面を残す。

4は安山岩製かとおもわれる。先端を欠損するが欠損面の風化は他の面と同程度である。薄めに仕上げられ、特に脚部は薄く端正な形である。

5は黒曜石製で、基本的に漆黒色であるが、若干縞が入るものを素材としている。片脚端を僅かに欠損するが、ほぼ完形である。調整は全面に及び、両側辺に一对の突起をもつ。



第32図 入来牧場位置図 (1/50000)



第33図 入来牧場内遺物採集地点 (1 / 20000)

6は漆黒色の黒曜石製である。両脚端を欠損するが欠損面の風化は他と同程度である。これも両側辺に一对の突起を持ち、調整は全面に及んでいる。5と極めて似た形状を呈しており、同形式ととらえてよからう。

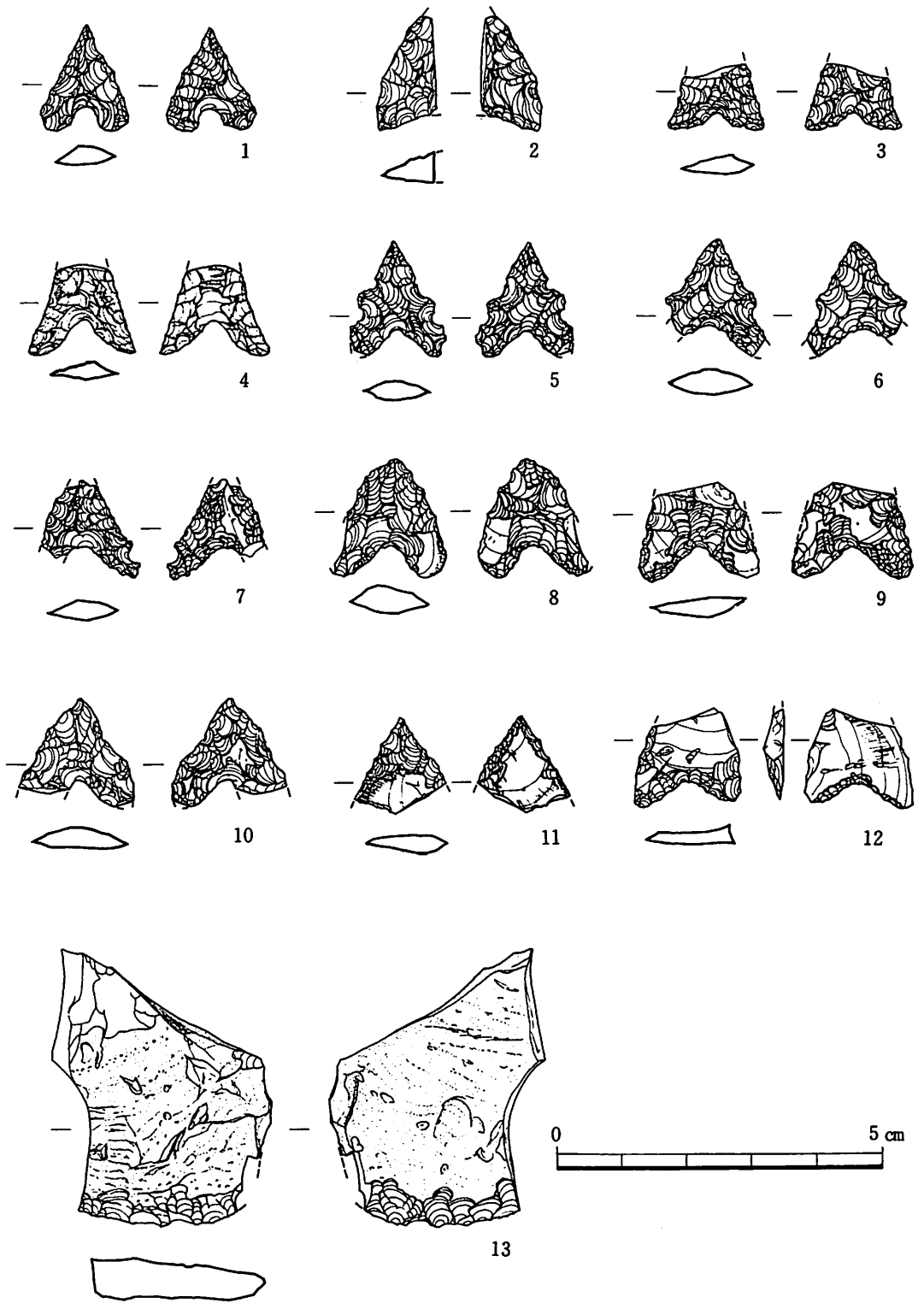
7は漆黒色の黒曜石製である。比較的長く細い脚部を持つ。片脚を新しく欠損している。脚部側辺にやや強い凹凸があるが、意図的な造作かどうかは不明である。裏面に主要剝離面を若干残す。

8は他の漆黒色のものと比べてやや透明であり、細かな白色不純物が目立つ。左側辺部の欠損面の風化は他の面と同程度である。先端部は鈍角に仕上げられている。表面に主要剝離面を残し、裏面にも剝離面を残している。側辺~脚端は素材となった剝片の端部にあたり、若干の調整を加えたのみとなっている。

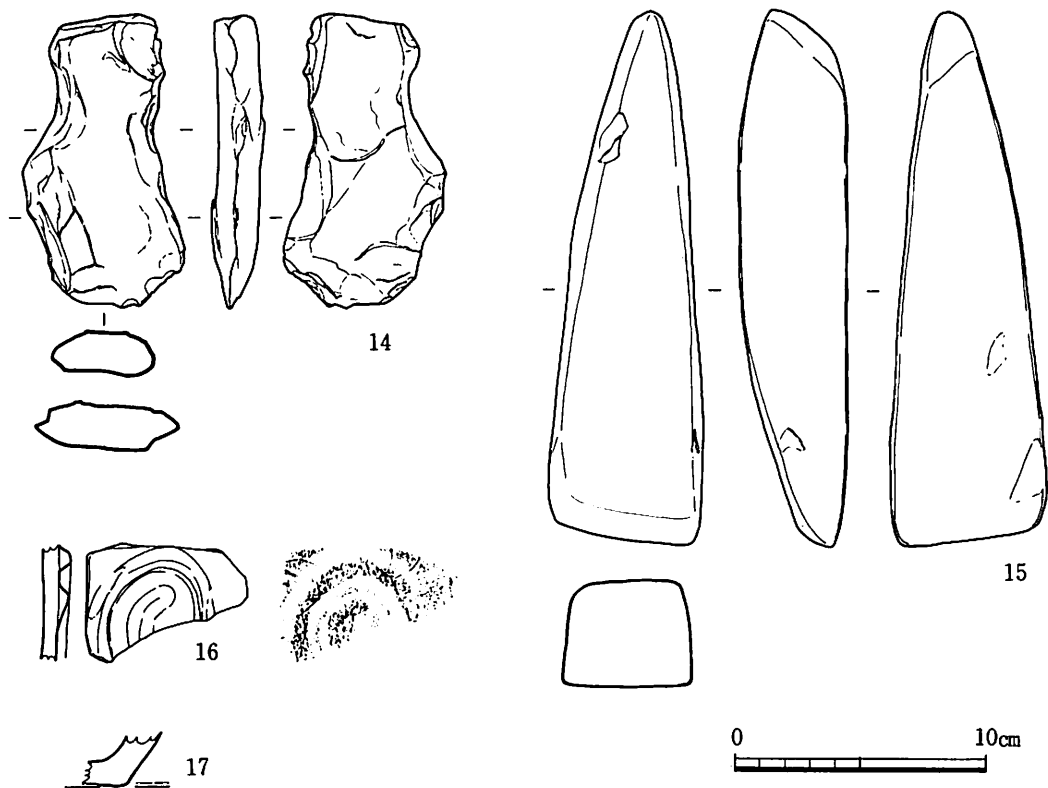
9は漆黒色の黒曜石製である。脚部を欠損するが欠損面の風化は他の面と同程度である。表面に主要剝離面を残し、表面左側の脚端は素材となった剝片の端部にあたる。

10は漆黒色の黒曜石製で、両脚端を欠損するが欠損面の風化は他の面と同程度である。左右非対称でややいびつな形状をなす。素材となった剝片の形に制約され、断面形も菱形ではない。裏面中央に剝片面を若干のこしている。

11は漆黒色の黒曜石製である。脚部を欠損するが、欠損面の風化は他の面と同程度である。薄めの剝片を素材としており、両面ともに素材となった剝片の面を残している。図上の裏面が主要剝離



第34图 採集遺物実測図(1) (1/1)



第35図 採集遺物実測図(2) (1 / 3)

面にあたる。

12は漆黒色の黒曜石製で、これも薄めの剝片を素材としている。図上の裏面が主要剝離面にあたる。右側辺は折り取られたような形状をなしており、打瘤部を除去するためとも考えられる。また、左側辺は剝片の端部に若干の調整を加えただけである。

以上はいずれも打製石鏃である。

13は黒曜石製のスクレーパーである。漆黒色を呈する板状の黒曜石片に刃部調整を加えただけのごく簡単なつくりである。

14は打製石斧である。重量179g。石材は不明である。撓形を呈する扁平なもので、やや小型である。全体に摩滅しており、各部ともやや丸みを帯びている。

15は磨製石斧である。重量738g。石材は不明。基部がかなり厚く、やや特異な形状を呈す。風化がかなり激しく細かい調整法等は不明であるが、各面ともかなり丁寧に磨いて制作されたものとみられる。

図示したほかに黒曜石製の石鏃が5点ある。いずれも漆黒色である。うち1点は大型のものである。また、同様の石材を用いたスクレーパーが2点ある。

(2) 土器 (第35図16・17)

土器は摩滅したものばかりで、細片がほとんどである。全部で20点ほどあり、石器・石片に比べて数量的にずっと少ない。

16は外面に渦巻状の貼付突帯をもつ土器である。明橙褐色～明灰橙色を呈し、胎土に砂～細砂粒を多く含む。石英、長石、角閃石その他を含み金雲母は含まない。採集された土器片中最大の破片である。

17は底部である。明橙褐色～灰橙色を呈し、胎土に砂～細砂粒を含む。胎土に含まれる鉱物は16に似るが、角閃石は16ほどは含んでいない。

16・17ともに摩滅しているが、16はナデもしくはミガキによる調整とみられる。

これらの他に貝殻条痕を施す細片もある。また、いわゆる薩摩焼の茶家の底部とみられる小片が1点あり、暗緑色の釉調その他からみて苗代川系のもと考えられる。

(3) まとめ

採集された遺物のほとんどがC～F間道路沿い北側の畑(第2地点)に集中する。A～B間の道路上の第1地点で大型石斧・黒曜石、D～E間の道路上の第3地点でもわずかながら採集された。すでに述べたように土器はわずかで、石器・石片が多く、中でも黒曜石が圧倒的多数を占める。黒曜石には次のようないくつかのバリエーションが認められる。漆黒色のものは白色不純物をわずかに含むが良質と思われる。それよりやや透明で白色不純物が目立つもの、さらに透明度が増し白色不純物が極めて多いものがあり、透明度が増すにつれて白色不純物を多く含む傾向がある。量的には漆黒色のものほど多い。これらのほかに第34図2のような白色不純物を含まずきれいなものや、あまり透明ではなく灰色で良質なものがごくわずかある。

第35図16の土器はやや特異なものであるが、類例は熊本県上益城郡益城町古閑遺跡にあり、縄文時代晩期とされている。^(註)

採集遺物から、入来牧場内には縄文時代を中心とする遺跡があることが推定される。また、鹿児島大学法文学部助手の本田道輝氏の話によると、昭和46年～47年頃入来牧場内の工事で出土した遺物が、楠原郁子氏ほか数名によって採集され、南福寺式土器等多くの遺物がみられたという。以上から、縄文時代の良好な遺跡が存在している可能性が強い。

(文責 中園 聡)

(註)「古閑遺跡」「古保山・古閑・天城」熊本県文化財調査報告第47集 熊本県教育委員会
1980年

参考文献

1. 鹿児島大学農学部あらた同窓会「「あらた」七拾五年の歩み」昭和60年6月30日
2. 蟹江松雄「鹿児島大学附属諸施設」『鹿児島大百科事典』南日本新聞社 昭和56年
3. 米留 博「八重山」『鹿児島大百科事典』南日本新聞社 昭和56年

付編Ⅲ．鹿児島大学工学部機械工学科校舎建設に伴う埋蔵
文化財発掘調査報告
(付．教育学部における試掘調査)

池畑 耕一・中島 哲郎・松永 幸男

工学部機械工学科校舎建設に伴う調査

1. 調査の経過と調査組織

工学部の校舎新築工事が字江夏町と神川境にまたがる地域に計画されたため、鹿児島大学から鹿児島県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて鹿児島県教育委員会では昭和55年5月12日から5月22日まで遺構の確認調査を実施した。

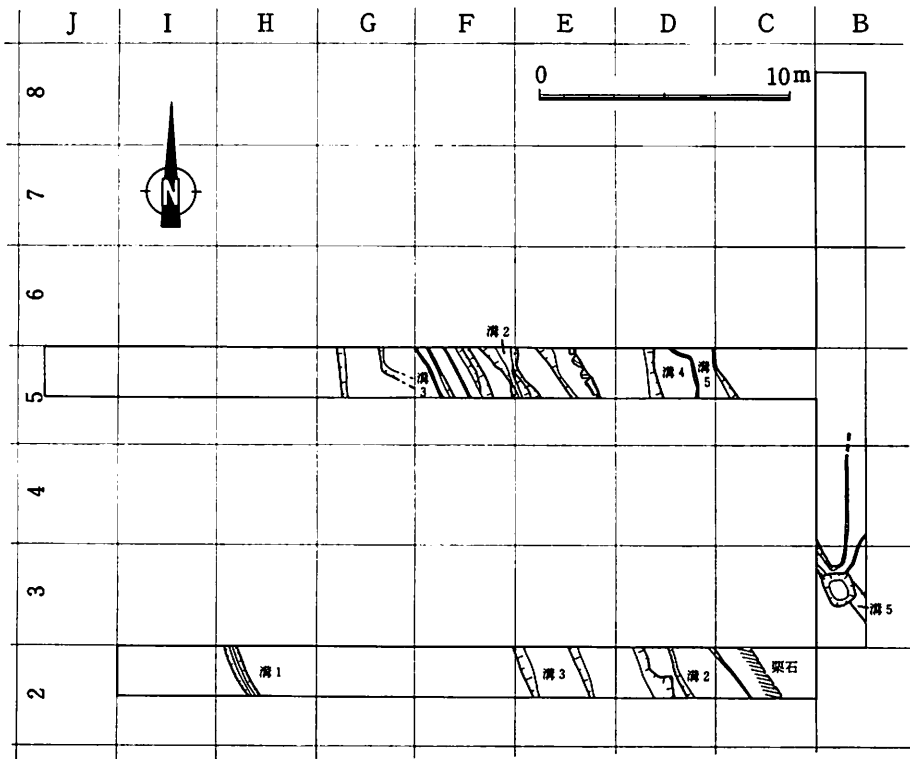
建物敷地に合わせて4m四方の方眼をつくり、南から北へ向けて1区・2区・3区…、東から西へ向けてA区・B区・C区…、と呼ぶことにした。向きはほぼ磁北に近い。

調査は幅2mのトレンチ調査によるものとし、2区の北半分をC区からI区まで(28m)、5区の北半分をC区からJ区(J区は3mだけ)まで(31m)調査した。いっぽう南北方向にはB区の西半分を3区から8区(8区は3mだけ)まで(23m)調査した。調査面積は164㎡である(第36図)。

調査したほぼ全域に高等農林学校以来の田境石列、暗渠、建物基礎のコンクリート列、ヒューム管などの埋没溝、ごみ捨て穴などがみられたが、その間に遺構も残存していた。

2区のトレンチではC区で斜交するグリ石列がみられ、これを溝4とした。C区・D区には溝4とほぼ並行する幅2mの溝が検出され、これを溝2とした。D区・E区にも溝4、溝2とほぼ並行する幅5mの溝があり、これを溝3とした。H区には幅50cmの溝があり、これを溝1とした。

5区のトレンチではC区・D区に幅1mの溝が斜交して検出され、これを溝5とした。D区・E



第36図 試掘調査トレンチ配置図及び検出遺構 (1 / 300)

区には幅3.6mの溝があり、これは石列を伴うことなどから溝4である。E区、F区には幅1.1mの溝があり、向き、埋土等より溝2である。F区・G区には幅5.5mの溝があり、これも向き、埋土等からして溝3である。なお、D区には方眼とほぼ並行する石列があるが、これは高等農林学校時代の建物基礎であり、2-D区でも検出されている。

B区のトレンチでは3区から4区にかけて2本の浅い溝状のものが検出され、このうち南東から北西へ向く溝は溝5と思われる。

この調査の結果、本調査が必要となり、その対象を並行する溝にあわせた2区から8区、C区からH区のほぼ平行四辺形の区域とし、昭和55年7月21日から8月9日まで実施した。

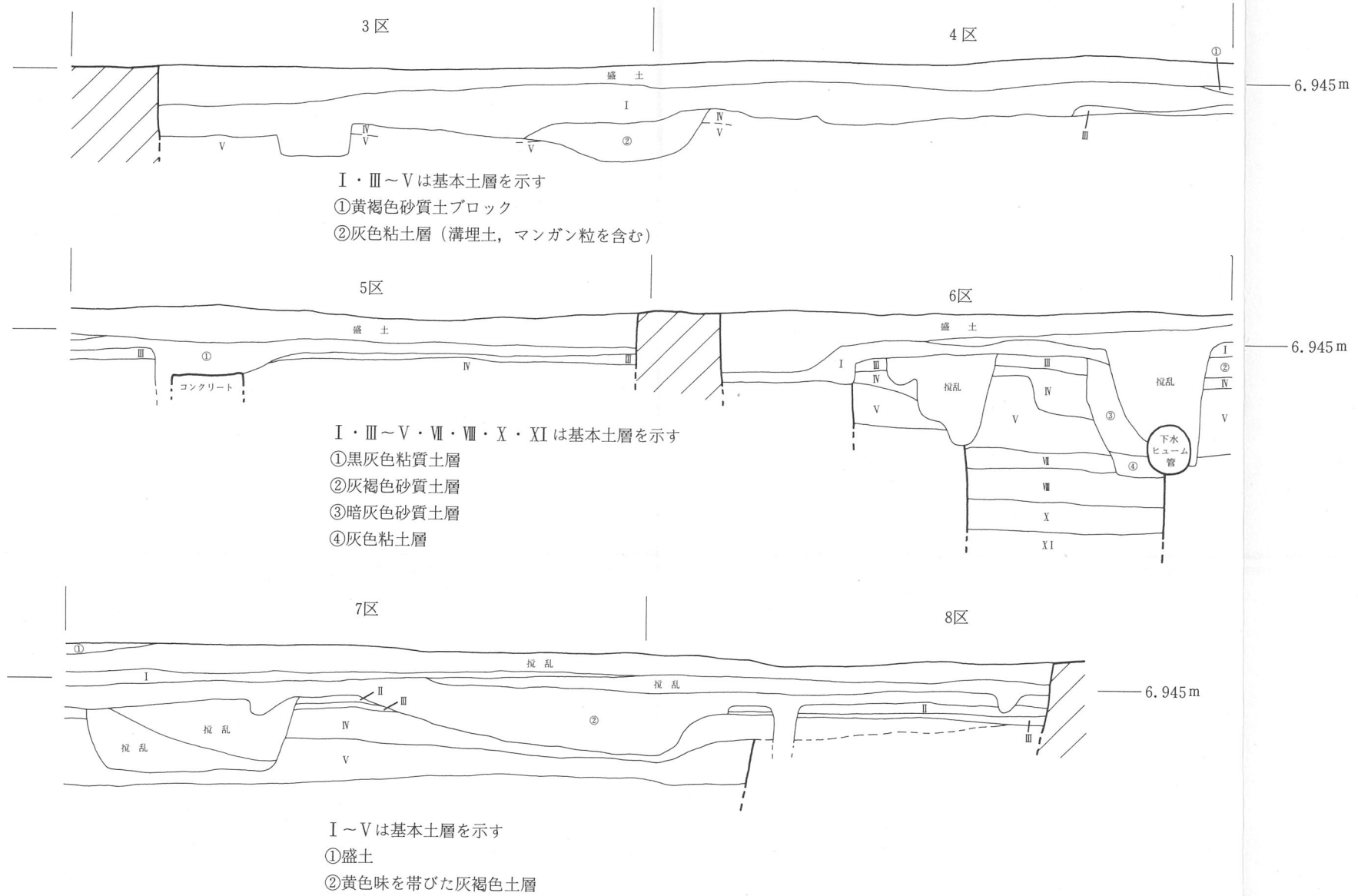
調査体制（所属は当時）

調査主体	鹿児島大学
調査責任者	山下典夫（鹿児島県教育委員会文化課長）
調査担当者	池畑耕一・中島哲郎（鹿児島県教育委員会文化課）
調査作業員	前之園藤雄・下畠徹・梶島裕二・畑中俊昭 佃フミ・沢田エミ子・井上ツギ子・福崎トメ・郡山キミ・西郷ハルエ・江夏スエ子・岩田タケ・前原ハツエ・中間キミ子・川路フミ子・梶原トメ・安田ヒサ子

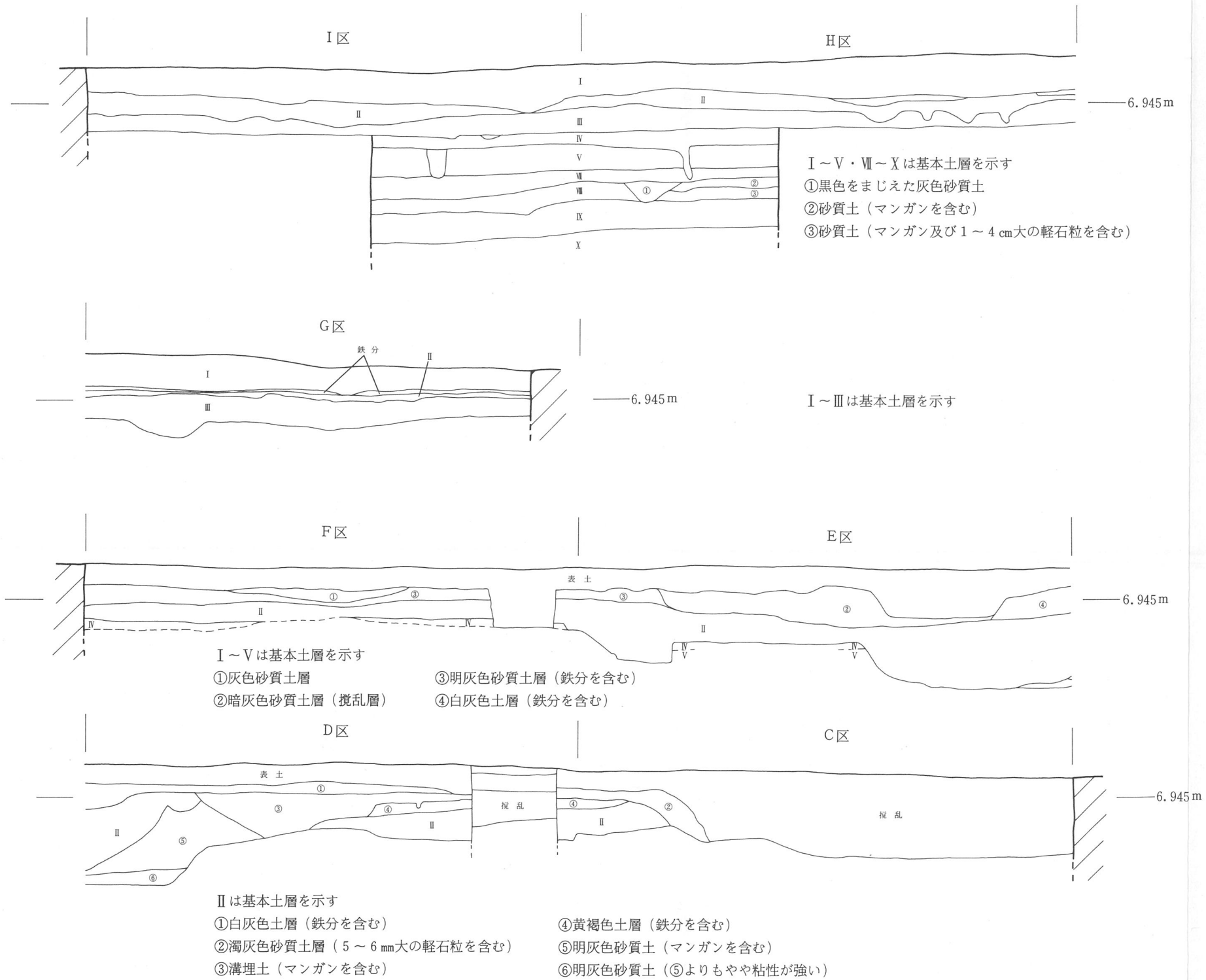
2. 基本層序

試掘調査の際に、B-3～8区の西壁、C-1～2区の北壁において土層の観察を行った（第37～39図）。このときに得られた所見をもとに基本層序を呈示するならば以下の様になる。

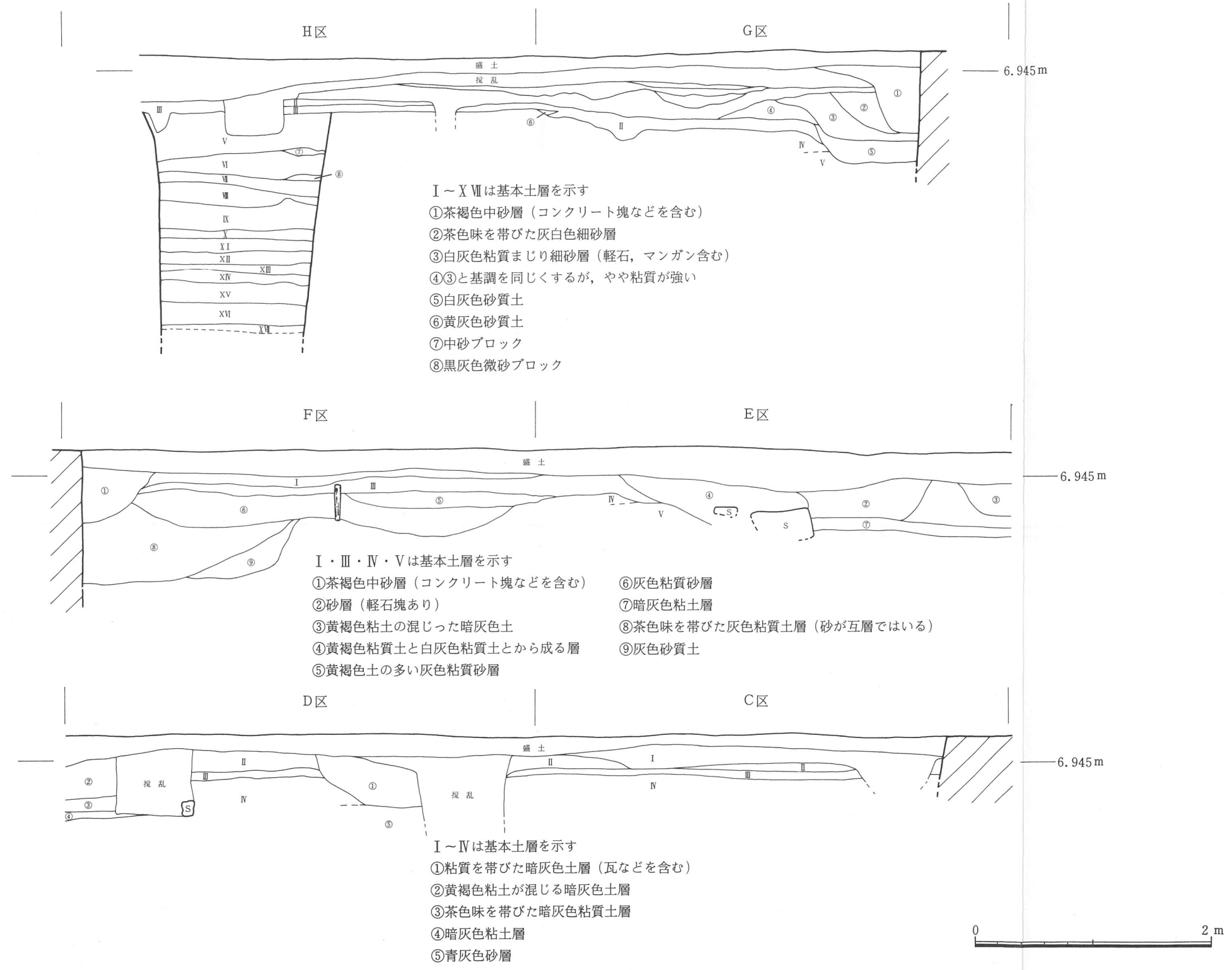
- I層 黒褐色土層
- II層 灰色粘質砂層
- III層 茶灰色砂質土層
- IV層 黄褐色砂質土層（軽石を多く含む）
- V層 白灰色細砂層（マンガンを多く含む）
- VI層 白灰色細砂質土層
- VII層 灰色細砂質土層
- VIII層 灰白色細砂質土層
- IX層 灰色粘土層
- X層 灰黒色粘土層
- XI層 黄灰色中砂層（軽石を含む）
- XII層 灰白色粘土層
- XIII層 黒色粘土層
- XIV層 乳灰色粘土層
- XV層 黒色粘土層
- XVI層 茶褐色中砂層（軽石を含む）
- XVII層 青灰色粗砂層（軽石を含む）



第37図 B区西壁土層図 (1/40)



第38図 2区北壁土層図 (1/40)



第39図 5区北壁土層図 (1/40)

3. 遺構

溝5本が検出されている。溝2～溝5はほぼ並行している。

(1) 溝1 (第36図)

2H区にある幅50cm、現存の深さ15cmのU字溝で蛇行している。埋土は黒色まじりの灰色砂質土で、埋土の上を古墳時代の包含層がおおっていることから、古墳時代あるいは弥生時代の水路の跡かと思われる。

(2) 溝2 (第40図)

8-G区から2-C区へ、ほぼ北西から南東の方向へ流れているU字溝である。40～100cm幅があり、現存の深さは10～40cmある。溝はIV層から掘り込んでおり、埋土は2層に分かれる。上層が黄褐色土の多くまざった灰色粘質砂、下層が灰色粘質砂である。溝3より新しい。

(3) 溝3 (第40図)

2-C区・2-D区・2-E区から8-G区・7-G区・7-H区へほぼ南東から北西へ流れている溝だが、底面はほぼ平坦で、どちらが上流か不明である。幅は5～5.5mあるが段をもって中央へ落ちており、深さは20～50cmある。断面形は逆台形を呈する。埋土は大きく3層に分かれ、上層からマンガン粒を多く含む暗灰色砂質土、灰色砂質土、灰色粘質土となっている。溝2より古く、青磁・備前焼など15世紀頃の遺物が包含されている。溝3が完全に埋もったあと、中央付近に平行して幅2m、深さ60cmのU字溝が掘られており、これは数層の互層となった細砂が埋もっている。これには近世の磁器も包含されており、時期的に下るものである。これは溝3'とする。

(4) 溝4 (第40・41図)

2-B区・2-C区から8-F区・8-G区にかけて検出された石積みの溝である。5区・6区付近では切石が良く残り整然と積まれているが、6区から7区・8区にかけてと2区付近では、ほとんど抜き取られている。裏には切石と同じ凝灰岩や、軽石などでぎっしりと裏込めがしてある。掘り方の幅は3.5mほどであるが、溝幅は1mほどかと思われる。溝の埋土は砂で、軽石などもはいつている。裏込めには黄褐色土・乳灰色粘土がつまっていた。

(5) 溝5 (第36図)

3-B区と5-C区・5-D区に検出された幅1m、深さ40cmほどのU字溝である。埋土はマンガン粒を多く含んだ粘質のある暗灰色土で、埋土中に瓦などもはいつている。

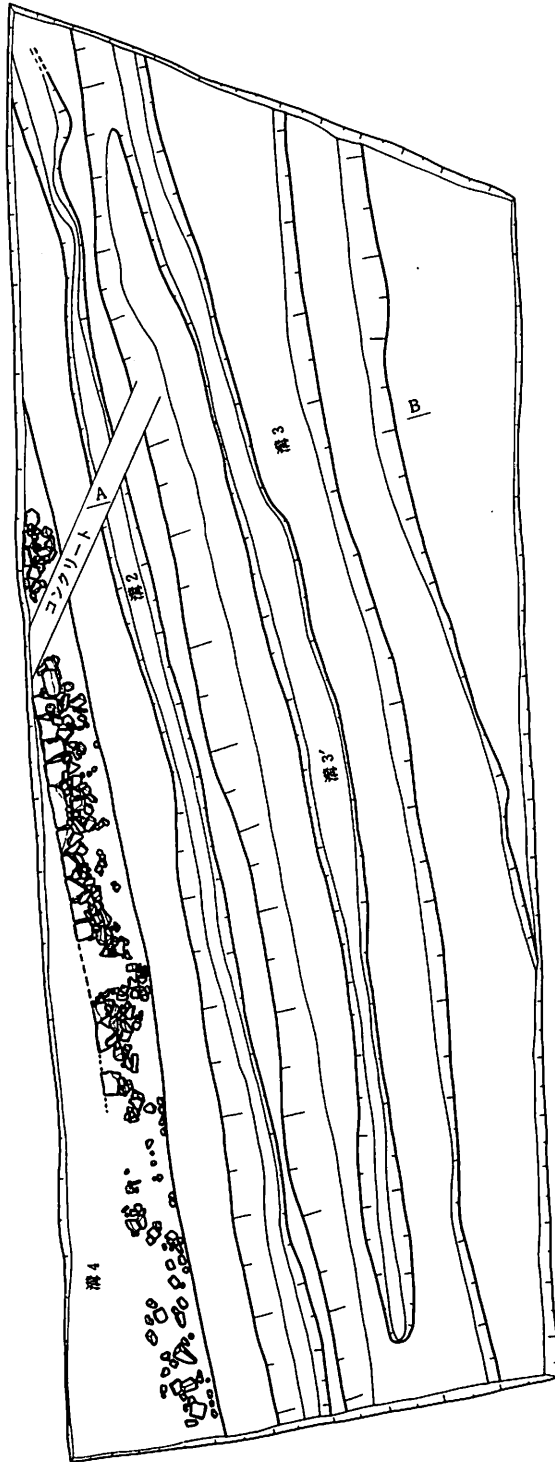
(6) 溝の新旧関係

溝は切りあいのあるものもあるが、ほとんど切り合いはない。ただ、包含している土・遺物などから次のような順序が考えられる。溝1→溝3→溝2・溝3'・溝5→溝4。溝2・3'・5の関係については前後関係がはっきりしないが、溝5に瓦のはいつていることから、あるいはもっとも新しいのかもしれない。

4. 出土遺物

(1) 土器

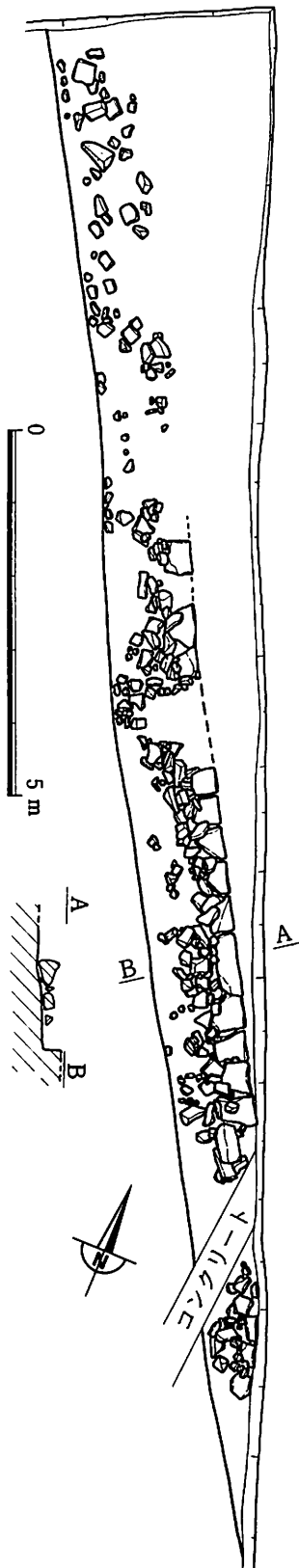
i) 溝3出土土器



- ① 雑草
- ② 黄灰色粘質土
- ③ 細砂層 (数層の互層となる)
- ④ 黄褐色細砂層 (鉄分多い、軽石を含む)
- ⑤ 暗灰色粘質土層 (マンガン多い)
- ⑥ 青灰色粘土層 (マンガン含む)
- ⑦ 暗灰色土層 (マンガン粒多く含む)
- ⑧ 灰色砂質土層
- ⑨ 暗灰色土層
- ⑩ 黄灰色土層 (乳灰色土を混じえる)
- ⑪ 灰白色細砂層
- ⑫ 灰色粘質土層
- ⑬ 黒茶褐色砂層 (上面が固く、マンガン、軽石を含む)



第40図 検出遺構平面図 (1/150)



第41図 溝4平面図 (1/100)

縄文土器 (第42図1)

底部外面が外方へ強く張り出し、不整な台形状を呈する。おそらく縄文時代晩期後半に位置付けられる突帯文をもつ甕形土器の底部であろう。

成川式土器 (第43図1～第45図5)

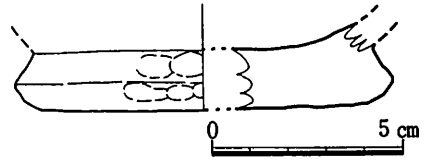
・壺形土器 (第43図1～7)

1は肩部と口縁部との間に稜線を形成し、そこから上方へとゆるやかに外反する口縁部片である。口径が15.4cmあり、外面には斜位のハケメ及び指頭痕をよく残している。2・3は肩部の破片で断面形が台形の突帯が貼付されている。2の胴部上位の突帯に施された刻目内には凹凸が認められる。3は頸部と胴部に突帯を貼付したもので、刻目内には布目圧痕が認められる。4～7には底部資料を呈示している。4は底径がやや大きい平底で、底面中央部には敲打によって凹部が形成されている。これは底部穿孔を行った際に生じたものと考えられ、当該部分から欠損していることは敲打作業中に本土器が破損したことを推測させるものである。5・7は底径が小さい平底、6は丸底を呈する壺形土器の底部である。

・甕形土器 (第43図8～第44図18)

第43図8は若干ゆるやかに外反しつつほぼ直線的に外開きする口縁部片である。胴部に三角突帯を施すが、当該部分には突帯貼付以前に何らかの調整具によるヨコナデの痕跡がみとめられる。おそらく突帯貼付の際の目安としたものであろう。第43図の9と13は同一個体と思われる資料で、胴部に三角突帯を貼付する外反口縁土器である。突帯に付された刻目内には布目圧痕がみとめられる。刻目は幅2cm以上の先端部を有する施文具を押圧することによって施されており刻目は突帯下方にも連続している。突帯貼付以前に当該部にヨコナデ調整が行われていることは8と同様である。第43図10は胴部の三角突帯がやや上方に施された外反口縁土器で、突帯上には横位のハケメ調整痕が認められる。第43図11は口縁部がやや強く外反する甕形土器で他の土器に比べて器壁の厚さは薄い。胴部突帯の断面

形は台形状を呈するが、これは突帯の上下両方から指で挟み押しえ付けることによって貼付した突帯の頂部をナデつけていることによる。第43図12は肩部が若干張り出した外反口縁土器で、ややしまった頸部に三角突帯を施す。突帯上には布目圧



第42図 溝3出土土器(1) (1/2)

痕の認められる刻目が施されている。第44図1は低平な三角突帯を施した土器で突帯には鋭利な施文具によって切るような感じで斜位の刻目が施されている。第44図2・3は若干しまった頸部に三角突帯を施した外反口縁土器で、2には布目圧痕をもつやや小さめの刻目が、3には斜位の布目圧痕をもつ刻目が施されている。第44図4もやや低い三角突帯をもつ土器で突帯に施された刻目には布目圧痕が認められる。第44図5は器壁がやや薄手の土器で三角突帯上に布目圧痕をもつ刻目を施す。第44図6は三角突帯の上下に突帯貼付時のユビオサエの痕を残すもので、突帯頂部は押しえ気味にナデつけられている。第44図7は口径21.4cmを測り、口縁部からさほど下がない部分に三角突帯を施す。突帯上には横位のハケメが認められる。第44図8～18には底部資料を呈示している。14を除いた他は全て脚台状を呈するが、これらには下方へ直線的に外開きするもの(8・9)とゆるやかに外反するもの(11・13・15～18)とが認められる。12の底面中央部には逆台形上の凸部が形成されている。14は底部側面が外方へ鋤状に張り出しており、径10.8cmほどの底面を形成している。

・高坏形土器 (第44図19～24)

19は塊形を呈する坏部の口縁部片で、内面には黒斑が認められる。20・21は坏部の底部から立ち上がり部へ移る部分の破片である。20は屈曲部にわずかに稜線が認められるが、屈曲部以下底部の調整はやや雑である。21は内外面ともに丁寧なナデ調整によって仕上げられており、底部と立ち上がり部との境には明瞭な段が形成されている。底部側の破面は接合部に当たる。22は脚部の全形を知ることができる資料で、筒部から脚部へとなめらかなカーブを描きながら強く外反する。23は脚部の筒にあたる部分で裾部との間に稜線を形成しつつ下方へとつながる。24は坏の底部から脚裾部上半にかけての資料である。脚筒部下半は若干膨らみ、直線的に外開きする裾部との間には稜線が形成される。

・罎形土器 (第44図25・26)

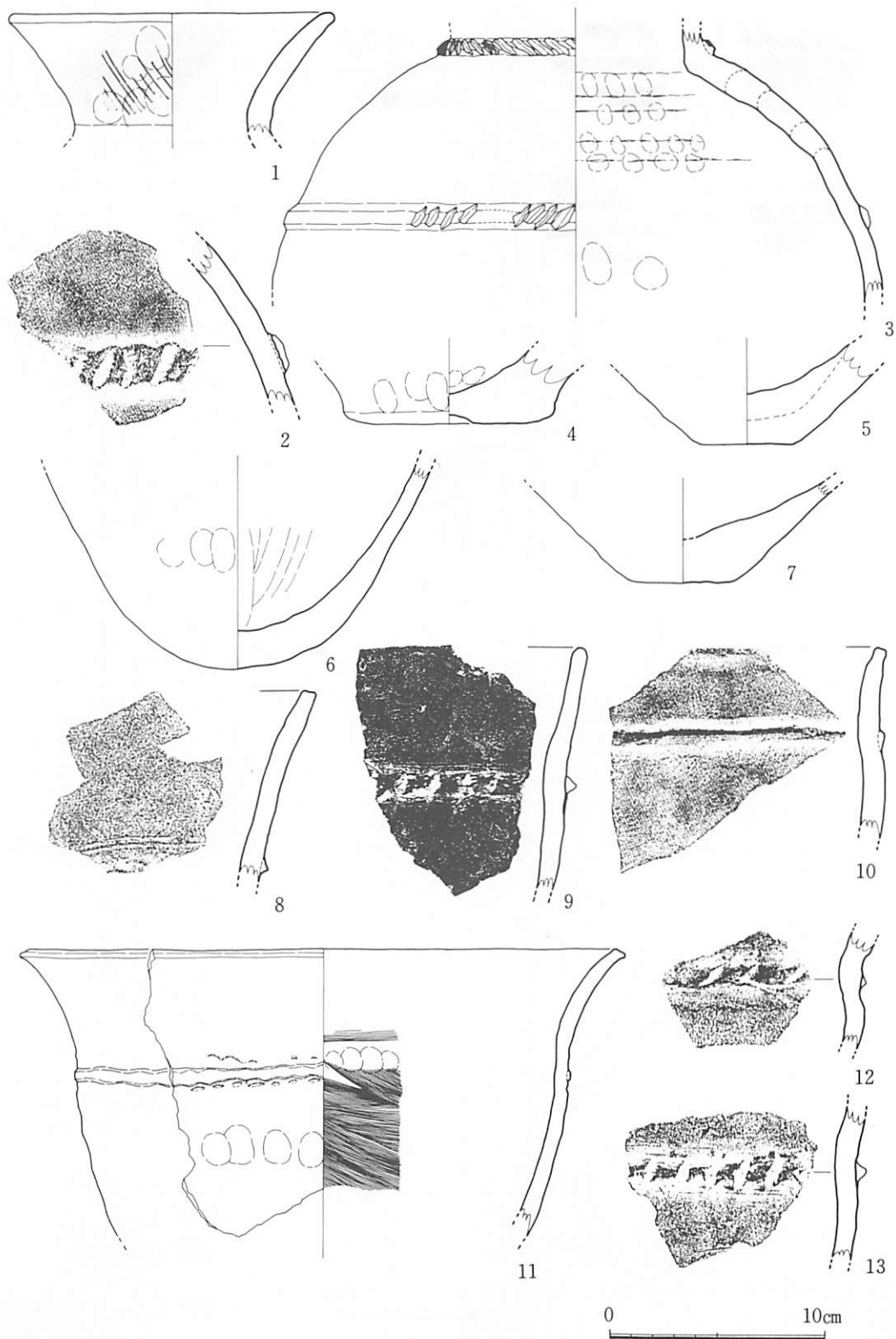
25は口縁部を欠失しているものの胴部のほぼ全形を知ることができる資料で、丸みを帯びた胴部はその最大径を上半部にもつ。底部にはわずかに平坦面を認めうるのみであるが、正位の状態で一応据えることが可能である。外面には丹塗りの痕が認められる。26は屈曲する胴部下位にその最大径をもつ胴部片資料である。屈曲部にはわずかに稜線が認められる。

・鉢形土器 (第45図1～5)

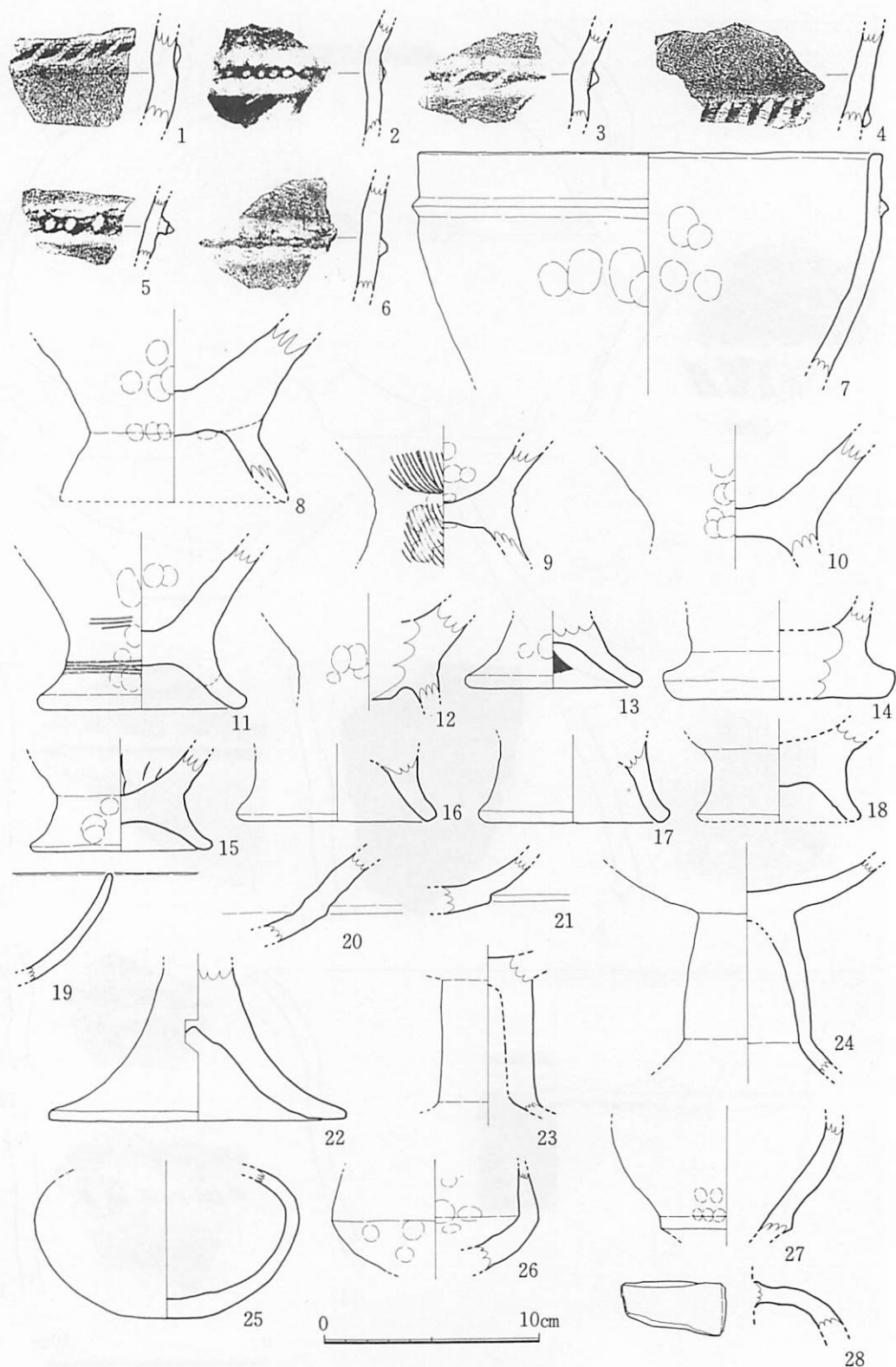
全て底部片で浅い脚を持つ底部(1・3～5)と平底(2)とがみられる。1・4・5は脚台部の内底面を丁寧なナデ調整によって仕上げている。

・その他の成川式土器 (第44図27・28)

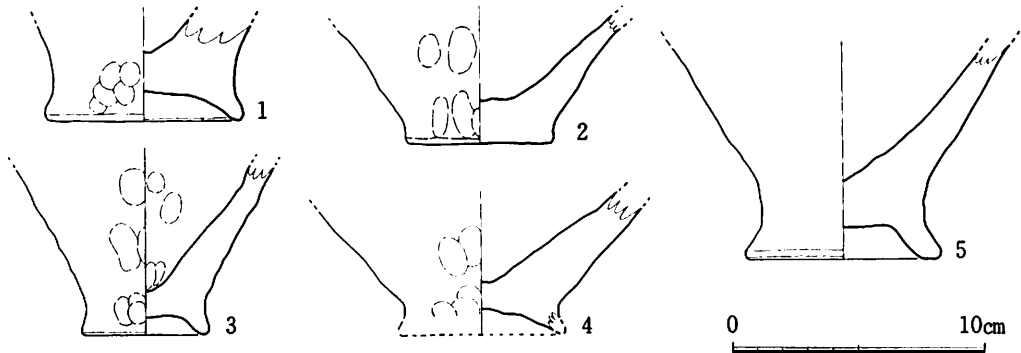
27は膨らむ器体部が下方へとすぼまるもので、下部に三角突帯をもつ。外面には黒斑も認められる。28は把手と考えられる資料で、上方の破面は本体との接合面である。



第43图 沟3出土土器(2) (1/3)



第44图 溝3出土土器(3) (1/3)



第45図 溝3出土土器(4) (1/3)

土師器 (第46図1～5)

・ 坏 (第46図1)

底径6cmを測る坏の底部片で、切り離しはヘラ切りによる。内外底面には丁寧なナデ調整が施される。

・ 埴 (第46図2～5)

2は底径6cmを測る底部片である。底部が若干円盤状に立ち上がり、内湾気味の体部へとつづく。内外面にはヨコナデが施され、底面はヘラ切り痕をナデ消している。3・4は高台付埴の底部片である。3の高台部断面形は先細りする形態をとり、端部を丸くおさめる。内外底面にはナデ調整が施される。4は高台部及び体部上半を欠く底部片で体部にはヨコナデ調整の痕が認められる。5は内湾する体部にやや外開きする口縁部がつづく高台付の埴である。ほぼ完形に復元できる資料で、口径13.4cm・高台径6.2cmを測る。器面はナデ調整によって仕上げられるが、内外面共にユビオサエの痕も比較的良好に残っている。

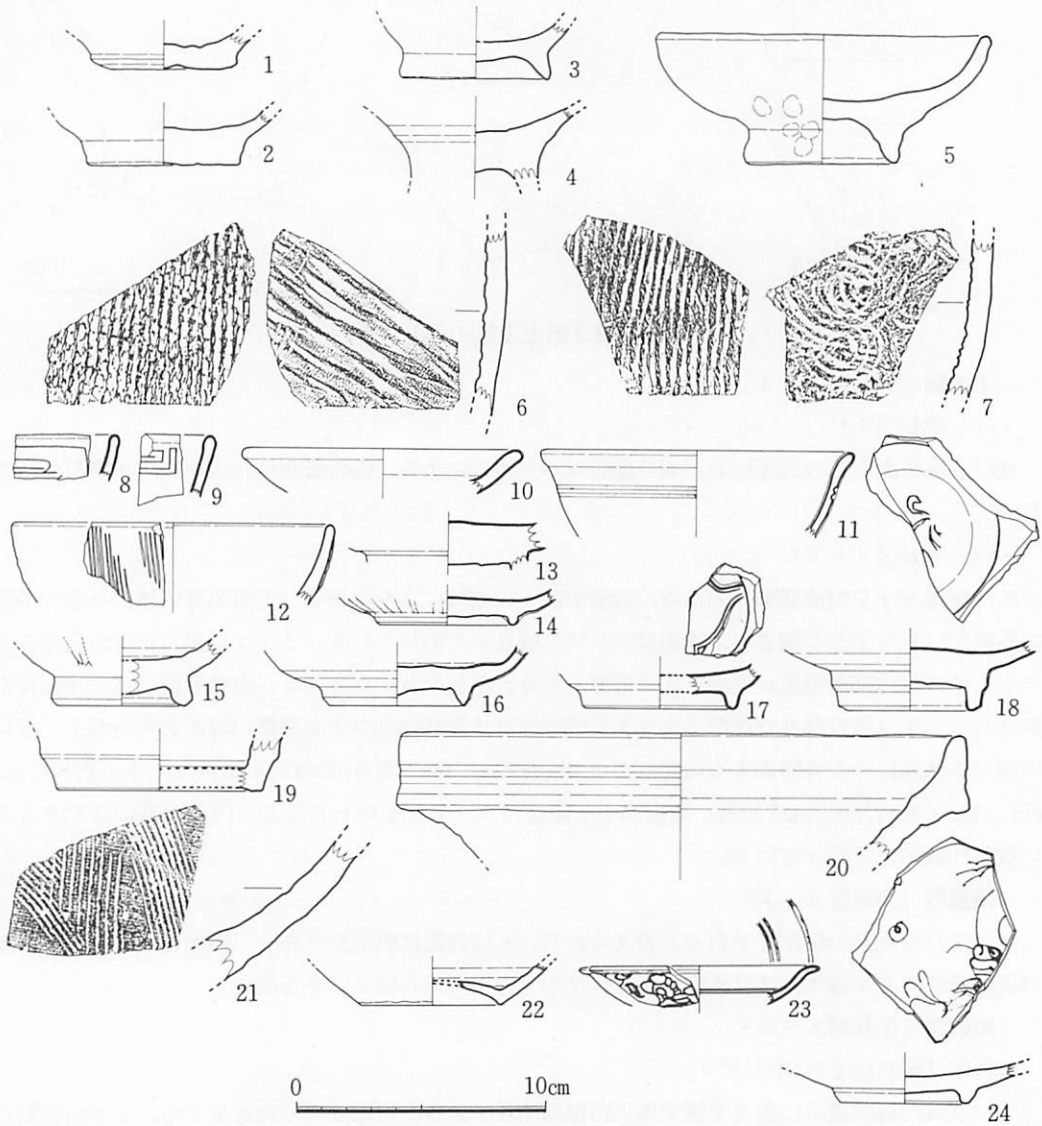
須恵器 (第46図6・7)

6・7共に大甕の胴部片であると考えられる。6は外面に格子タタキを、内面には同心円タタキの後平行タタキを施す。7は外面に平行タタキを内面に同心円タタキを施す。

陶磁器 (第46図8～24)

・ 青磁 (第46図8～18)

8・9は口縁部直下に雷文を施す碗の口縁部小片である。磁胎は灰白色を呈する。9が直線的に伸びるのに対し、8はわずかに内湾する。8・9ともに緑色の釉がかかる。10は皿の口縁部片で体部でやや強く屈曲する。磁胎は灰白色を呈し、黒色の極微細粒を含む。釉は緑色を呈する。11は口縁部がやや外反し口縁部下に二条の凹線を施す碗である。磁胎は灰白色を呈する。緑色の釉がかかる。12はゆるやかに内湾する体部がそのままやや外開き気味の口縁部へとつづくもので、体部外面には縦位の櫛描文が施されている。釉は淡灰白色を呈してかなり薄く、磁胎は灰白色を呈する。13は体部・高台部を欠く碗の底部片で釉色は淡緑色を呈する。釉は現存部において内面見込み部から高台外面まで認められるようであり、高台内には回転ヘラケズリが施されている。この際の碗の回転方向は、底部外面に向かったとき反時計回りとなる。磁胎は淡灰色を呈し、若干砂粒を含む。14



第46図 溝3出土土器(5) (1/3)

は低い高台の付された碗で、釉色は淡緑色を呈する。体部外面には線描きによって細身の蓮弁文を施しているようである。施釉は畳付部も含め高台内側にまで及ぶが、高台内側の釉は輪状に欠き取られている。磁胎は灰白色を呈する。15は若干外側へ開く高台を持つ碗底部片で、二次的に火を受けているために釉は変色し白色味を帯びている。内面見込みから体部への変換点には沈線が輪状にめぐっており、体部外面には蓮弁文が施されている。施釉は高台内側に及ぶ。16は薄い緑色を呈する釉が内面立ち上がり部から体部及び高台部外面に施されるものである。内面見込みの無釉部は正

円形を呈しており、また高台部外面下端には釉の溜りも認められる。焼成の際に重ね焼きされたものであろう。高台部外面下半はヘラケズリによって内傾しており、高台部断面形は下方に向かって先細りしている。高台部内側は回転ヘラケズリが行われており、また高台付け根部分は輪状に欠き取られている。17は磁胎が淡灰色を呈し緑色の釉が畳付及び高台内側まで含めた内外全面にかかった碗で、内面見込み部及び体部外面には貫入がみられる。18は緑色の釉が内面見込み部から高台部分内側にかけて施された碗の底部片である。厚い底部に作りのしっかりした高台が付くがその下半部及び最下端部は回転ヘラケズリによって削り取られており、高台外面中央部と下部には鋭い稜線が形成される。高台部内側には回転ヘラケズリが施される。

・褐釉（第46図19）

壺の底部片で磁胎は青灰色を呈する。現存部でみると、体部内外面から底面にかけてやや暗い茶色の釉がかかる。

・備前焼（第46図20・21）

20は揺鉢の口縁部片である。口縁は強く上方に立ち上がって直立に近く、幅広い口縁帯の下端部は下方へ若干拡張されている。やや暗い青灰色を呈し、胎土には5mm前後の白色の石粒を含む。内外面にはヨコナデ調整が施される。21は揺鉢体部下半に当たる部分で、内外面ともに明褐色を呈する。体部内面には9本歯もしくは10本歯の櫛目が施されている。備前焼であるか否か不明であるが、瓦質の土器であり、便宜的にここで説明を加えた。

・薩摩焼（第46図22）

白色の磁胎に透明釉が底部を除いて施される白物で、底面が扁平なドーム状の凹部を形成する。内外面には貫入がみられる。

・伊万里焼（第46図23・24）

23は皿の口縁部小片で、全体にごく薄い青みを帯び体部外面には菊花文が施される。24は皿の底部片で、内面見込みに梅花文を施している。高台断面形は逆台形状を呈し畳付部を除いて体部内外面から高台見込み部まで釉がかかるが、高台内側には砂が付着している。磁胎は白色を呈し、23と同様に全体にごく薄く青味を帯びる。

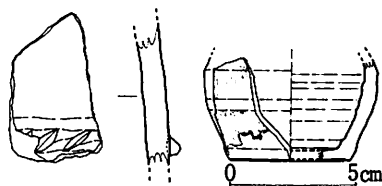
ii) 4号溝出土土器（第47図1・2）

成川式土器（第47図1）

1は小片であるため確定することは困難であるが、直口ないし内湾口縁の甕形土器の口縁部片であろう。胴部には斜位の刻目を施した三角突帯が施されている。

褐釉（第47図2）

小壺の胴部から底部にかけての破片で褐色の釉が胴部下半までかかっている。



第47図 溝4出土土器（1／3）

iii) 包含層出土土器（第48～50図）

弥生土器（第48図1）

弥生時代中期に位置付けられる甕形土器の充実脚台である。外面・底部ともにユビオサエの後にナデ調整を施している。

成川式土器（第48図2～第49図9）

・壺形土器（第48図2～9・第49図6）

2・3は倒卵形の胴部のほぼ中に突帯を貼付する壺形土器の胴部片である。両者とも突帯上に工具押圧による刻みを持つが、3の刻みには布目痕が認められる。また、突帯断面形は鈍い低台形状を呈する。4はおそらく壺形土器の肩部付近に貼付されたと考えられる突帯で、鋭利な工具によって斜格子文が施されている。5・6は底部片で、底面が凸レンズ状を呈する。両者とも内外面をユビオサエの後ナデ調整によって仕上げているが、6の内面には一部ケズリ痕も残存している。第49図6は底径8.0cmを測る底部片で器壁はやや厚い。底部からゆるやかに立ち上がり胴部へとつく。鉢の底部である可能性も考えられる。

・甕形土器（第48図7～23）

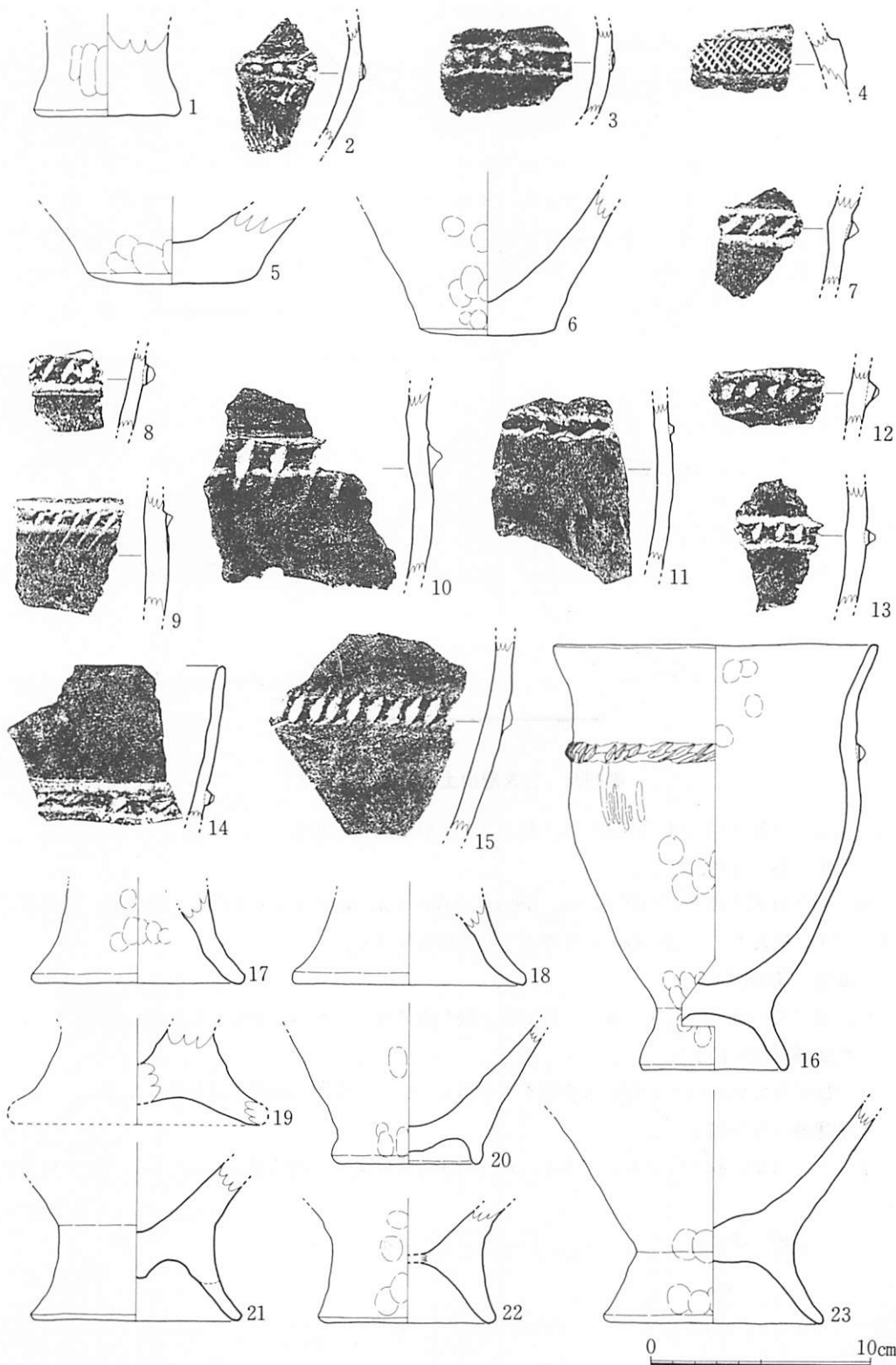
7～15はいわゆる退化「く」字口縁を呈する土器であると考えられるもので、断面三角形の突帯上に斜位の刻みを施す。8は断面形が鈍い三角形を呈する突帯にやはり斜めに刻目を入れたものである。9・10は断面三角形突帯を肩部に貼付し、そこに斜めの刻目を施したものであるが、この刻目には布目圧痕が認められる。11は肩部に断面台形の突帯を貼付する。突帯貼付後、突帯頂部をナデつけたもので、突帯の上下には突帯貼付の際のユビオサエの痕も残している。12は若干大きめの刻目を施した三角突帯を肩部に貼付したものである。13は頂部が丸みを帯びた断面三角形の突帯を貼付した土器で、口縁上端へ向けて若干内湾するようである。14は若干外開き気味の直口口縁甕形土器の口縁部で、刻目をもつ三角突帯を胴上半部に施す。15は断面形が頂部の丸い低い三角形を呈する突帯を胴上半部に貼付する土器で、突帯上の刻目には布目圧痕が認められる。16は頸部で若干しまる外反口縁甕形土器で、肩部には斜位の刻目を施した三角突帯を貼付する。胴部上半にはしわ状の凹部が縦位に数条みられるのが注意される。土器製作時の粘土がまだ柔らかい段階で成形のために当該部を両手で側方から挟みこみ若干おさえつけたものであろうか。また、胴部中ほどよりやや下位には外形のラインが若干不連続になる部分が認められるが、これは一旦この部分まで一気に作り上げた後、これより上方の製作に移ったことを示すものと考えられる。17～23には甕形土器の底部を示している。17・18・21～23はゆるやかなカーブを描きながら外反する脚台状底部である。21は外底面の中央に突起を有する。19はやや短い脚部が外方へ強く張り出す脚台状底部である。20は短い脚部を強いユビオサエによって貼り付けたものである。鉢形を呈する可能性もある。

・高坏形土器（第49図1～5）

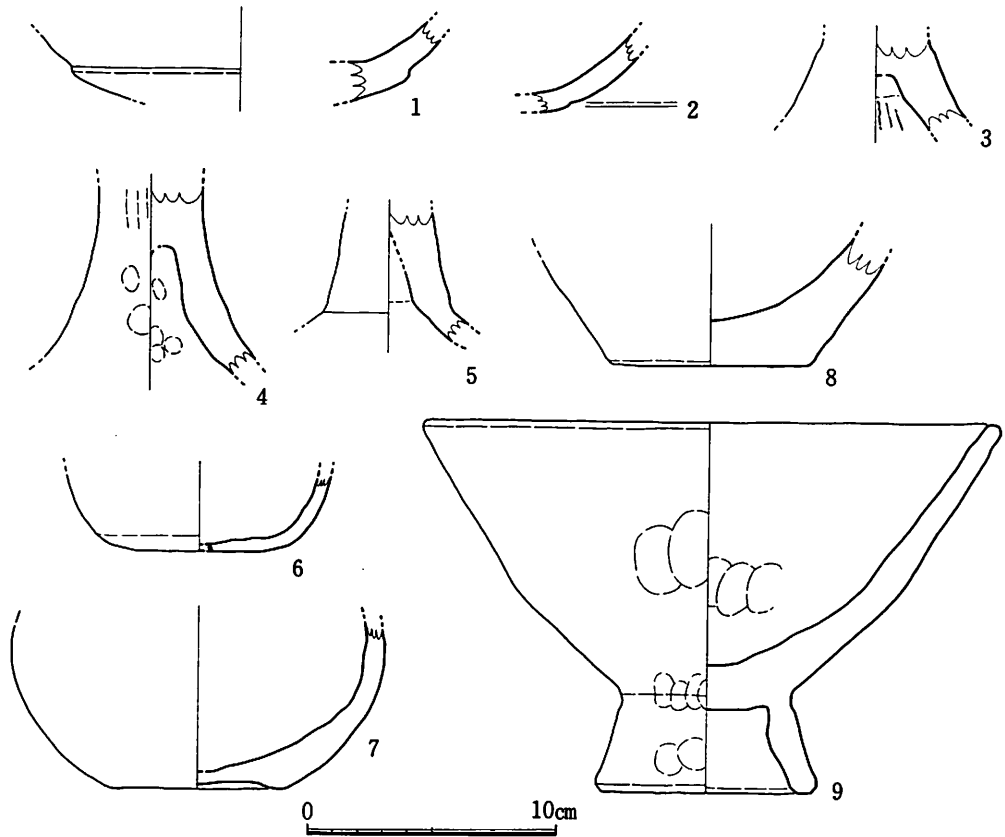
1・2は高坏形土器坏部の破片で、底部と立ち上がり部との境に段が形成される。底部側の破面は接合面である。3～5は高坏形土器脚部片で、3は坏部との接合部直下から外方へ強く開く。4は筒部から裾部へとゆるやかに開いて行くもので裾端部を欠く。5はやや短い脚部で直線的に伸びる筒部と外形土器開きする裾部との間に稜線が形成される。

・埴形土器（第49図7・8）

7・8ともに底部片である。7は平底で底部から胴部へゆるやかなカーブを描きながら立ち上が



第48图 包含層出土土器(1) (1 / 3)



第49図 包含層出土土器(2) (1/3)

る。8は上げ底を呈し底部内面にはユビオサエの痕が明瞭に残る。

・鉢形土器 (第49図9)

脚台付の鉢形土器で、口径23.2cm、脚台部底径8.8cm、器高14.7cmを測る。胴下部で若干張り出すものの、底部からほぼ直線的に外開きする器形を呈する。

青磁 (第50図1)

口縁部でやや強く外反する碗で、淡緑色の釉が内外面にかかる。磁胎は白色を呈する。

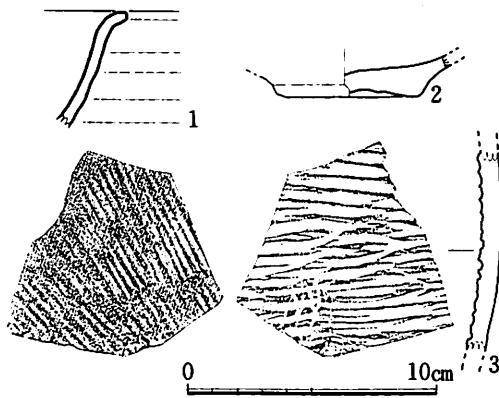
土師器 (第50図2)

坏の底部片で底面はヘラ切りの痕跡をナデ消している。胎土は微細で淡黄色を呈する。

須恵器 (第50図3)

おそらく大甕の胴部片であると考えられ、青灰色を呈する。内外面ともに平行タタキが施されている。

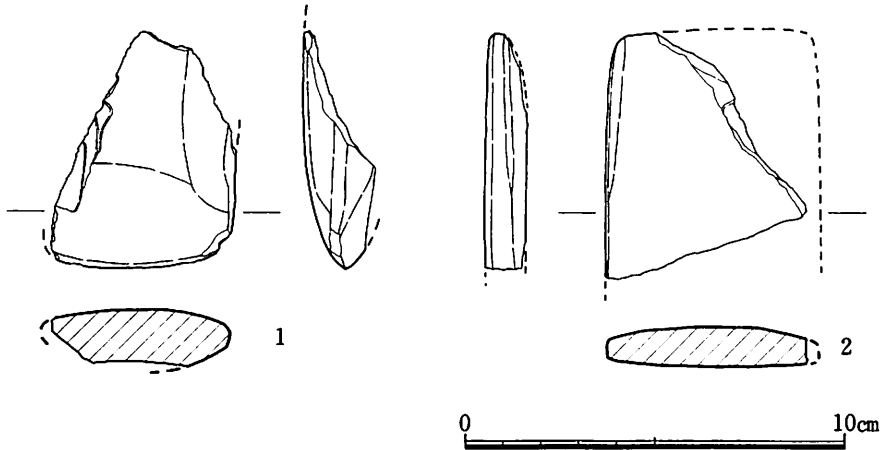
(2) 石器 (第51図)



第50図 包含層出土土器(3) (1 / 3)

面図外郭線を手掛かりとして全形の一部を推定復原している。幅広の扁平な石斧であろうか。砂岩製で包含層からの出土である。1は52gを、2は50gを計る。

1は3号溝から出土した砂岩製の磨製石斧で上半部を大きく欠いている。両刃で刃縁の両端付近にわずかに刃こぼれが認められる。裏面の破面には貝殻状剝離がみられ、破損の原因となった衝撃が刃部右半部から頭部の方へとはたらいたことを示している。2は表裏両面及び側縁部を丁寧に磨いた磨製石器であるが、体部の大半を欠いており全形等については不明である。図においては横断面図外郭線を手掛かりとして全形の一部を推定復原している。幅広の扁平な石斧であろうか。砂岩製で包含層からの出土である。1は52gを、2は50gを計る。



第51図 溝3・包含層出土石器 (1 / 2)

5. まとめにかえて

鹿児島大学構内遺跡の発掘調査はすでに50回を越え、その地点は構内全域をほぼ網羅しているようである。したがって、過去の歴史的変遷は、かなり詳細に押さえられているはずだが、なにせ報告書として公開されたものが少なく、その多くは今でもまだ不明なものが少なくない。過去の調査を通じ、この遺跡の主体をなす時期は古墳時代各期であることがわかっているが、その他にも縄文時代前期から現代にわたる遺物も少なからず出土している。ここでは、当地点の調査結果を振り返ってみながら、周辺地域の様子を概観し、今後さらに詳細化されるであろう当地点の位置づけを見通してみよう。

まず、古墳時代について考えてみれば、今回の調査で遺物の出土量をもっとも多いのが当時期で

あり、当地点でははっきりした遺構を押さえることが出来なかったとはいえ、集落の近くに所在していることが予想できた。

昭和50年度の教養部での調査、昭和51年度および昭和60年度の理学部での調査から考えれば、古墳時代の集落は微高地上に営まれており、その北側には大きな川が流れている。さらに昭和58年度の電子計算機室での調査結果を加味すれば、河川の北側には水田が広がっているという地形が復元できよう。これらの結果からして、当地点はどういった様相のところにあるのであろうか。

大きな川は現在のところでは、理学部の一か所では確認できていないが、この下流と思われる所には高等農林学校の頃から学生の心のよりどころとなっていた玉利池があり、これを川の延長部と考えることも可能である。この川の上流は理学部よりやや南へ曲がる様相にあったが、昭和60年度の調査ではその一端さえも確認できなかったことから、まだここまでは達していないことが想定できた。当地点の層序をみると、古墳時代のはV層が包含層であることよりV層あるいはVI層であることが予想できる。そしてVI層には鉄分が、V層にはマンガン粒が含まれていることから、これらの層は水田耕作土であるようである。とすると、当地点は川の北側の水田跡の可能性はあるが、それにしても出土している土器量が多いという難点もあり、解決にはもう少し中間点での調査とプラント・オパール定量分析や花粉分析あるいは水田雑草などの種子分析等の科学的分析の必要が望まれよう。

なお、当地点出土の土師器は古墳時代後半のものを主体とするが、前半のものも含まれており、短期間に出来た包含層ではない。

次には平安時代の土師器・須恵器・青磁などが少量であるが出土している。当地は郡元という地名や、一ノ宮神社が付近にあることから、古代に鹿児島郡の役所跡があった所であろうといわれているが、これまで大学構内では古代の遺物を多く出す場所もなく、古墳時代の集落が廃棄されたあと、集落化が進むのは早くとも近代以降であろうと思えるほど出土量はすくない。全国の地名研究を進めている本間信治氏によると、鹿児島県には「郡」と付く地名が多く、命名の仕方が他の地方とは異なっているようだとい⁽¹⁾。とくに、鎌倉時代には「郡本」という地名が各地にみられるが、⁽²⁾ 当地の郡元もまた文和3年(1354)の行状によると「郡本」の字が当てられており、江戸時代になって初めて「郡元」の字が当てられる。ともあれ、この周辺に平安時代の集落があったことは遺物の出土から予測できるが、学内に郡役所の予想される地点は今のところ無く、当地点については水田であった可能性が大であるといえる。

溝3は包含層を削っているために古墳時代の遺物が多く含まれていたが、年代の決め手となるのは青磁碗と備前焼甕・すり鉢である。青磁碗は底が分厚く、無文のものもあるが、しのぎ蓮弁や雷文帯をもつものがあり、これらは14世紀後半から15世紀前半に該当するものばかりである。⁽³⁾ 備前焼すり鉢の口縁部もいわゆる備前焼編年Ⅳ期に属し、⁽⁴⁾ その年代は青磁碗の年代とみごとに一致することから、この溝の使用された時期を15世紀前半頃に比定できよう。この溝の性格については、周辺の状況や、他の溝との比較からして水田耕作用の溝であることは間違いなからう。

溝4は石垣による水路であり、そのうしろには裏込め石もある本格的なものである。出土遺物のなかに伊万里焼や薩摩焼があり、古くみても江戸時代以降だが、はっきりした年代は不明である。

しかし、溝の方向が中世のものと並行しており、現在の学内の地割線とはその向きが全く違うことから、新しく考えても昭和時代には下るまい。

鹿児島大学構内の調査も、本調査の頃までは自然科学系の調査がされなかったために詳細不明であるが、最近ではプラント・オパール分析などの科学的方法を数か所で実施しており、その性格も具体的にはっきりしつつある。これまでの電子計算機室、農学部、理学部などの調査結果をまとめると、当地点付近の環境は古墳時代以降一貫して水田の営まれた可能性がある。プラント・オパール分析の結果によると各地で異常ともいえる多量の数が検出されており、先の川に造られたせき跡や、この時期以降のヨシの減少などから古墳時代以降は開田化が進み、相当に発達した水田耕作が営まれたようである。古墳時代後期に起こったとみられる大洪水は、集落に壊滅的打撃を与え、集落の台地近くへの後退化をもたらしたが、これと同時に水田の改良工事は一段と進み広大な水田化が図られてきたようで、ここでみられる遺構や層序はそうした過程を示している。

なお、弥生時代以前についてはすでに縄文時代前期からの遺物が数か所で出土しており、ここでも縄文時代晩期の土器や石器が出ている。しかし、土層を見る限り弥生時代以前についてはまだヨシの多い低湿地である可能性が強く、仮にこの湿田で稲作が行われたとしても集落はもう少し上流域でしか営まれなかったのではないかと思われる。さらに縄文時代にさかのぼって考えれば、地層の状況や、大竜遺跡などの調査からしてまだ砂地であった可能性が強い。

(参考文献)

鹿児島大学埋蔵文化財調査室『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報1 昭和60年度』 1986年

(注)

- (1) 本間信治『日本古代地名の謎』 新人物往来社 1975年
- (2) この行状では『鹿児島郡内 中村・郡本・田上村』とあるが、鹿児島大学郡元団地のほとんどは旧中村に属している。また、一之宮神社は建久8年(1197)の薩摩国図田帳では郡本社と記述されており、昭和30年に一之宮神社と呼ばれるまでは一条宮(一之宮)神社とか郡元神社とよばれていた。
- (3) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No. 2 1982年
- (4) 間壁忠彦・間壁葎子「備前焼研究ノート(2)」『倉敷考古館研究集報』第2号 1966年

表3 工学部機械工学科校舎建設地出土土器観察表

図番号	調 整		色 調	備 考
	外 面	内 面		
42-1	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	外底面のユビオサエ痕は比較的明瞭に残る。
43-1	ユビオサエ→ハケメ→ナデ	ユビオサエ→?	㊶ 淡黄褐色 ㊷	内面の磨耗著しい。石英・角閃石を含む。
43-2	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷ 淡黄褐色	外面に黒斑あり。石英・角閃石を含む。
43-3	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	石英を含む。刻目内布目痕あり。
43-4	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡灰褐色 ㊷ 淡褐色	石英・長石・黒曜石を含む。底面に敲打による凹部あり。
43-5	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 灰褐色 ㊷ 淡褐色	角閃石を含む。
43-6	ユビオサエ→ナデ	強いナデ上げ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷ 淡黄褐色	内外面ともに黒斑あり。角閃石を含む。
43-7	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡黄褐色 ㊷	ウンモ・角閃石を含む。
43-8	ケズリ→ナデ・ヨコナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 暗褐色 ㊷ 淡褐色	角閃石を含む。
43-9	ユビオサエ→ヨコナデ・ナデ	ユビオサエ→ヨコナデ・ナデ	㊶ 灰褐色 ㊷ 淡褐色	石英を含む。
43-10	突帯以上：ヨコナデ 突帯以下：ユビオサエ→ケズリ→ハケメ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 黄褐色 ㊷	外面に黒斑あり。ウンモを含む。
43-11	突帯以上：ユビオサエ→ヨコナデ 突帯以下：ユビオサエ→ナデ	上半部：ユビオサエ→ヨコナデ 下半部：ユビオサエ→ハケナデ	㊶ 暗灰褐色 ㊷	突帯上下に爪痕あり。角閃石を含む。
43-12	ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 明褐色 ㊷	石英・角閃石を含む。
43-13	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 灰褐色 ㊷ 褐色	石英・角閃石を含む。
44-1	ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 暗灰褐色 ㊷ 淡褐色	角閃石を含む。
44-2	ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷ 明褐色	石英・角閃石を含む。刻目内布目痕あり。
44-3	ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	石英・角閃石を含む。刻目内布目痕あり。
44-4	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 黄褐色 ㊷ 淡黄褐色	石英を含む。刻目内布目痕あり。
44-5	ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 褐色 ㊷	角閃石を含む。
44-6	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 暗褐色 ㊷	ウンモを含む。
44-7	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡灰褐色 ㊷ 淡黄褐色	角閃石を含む。
44-8	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	石英・角閃石・黒曜石を含む。
44-9	ユビオサエ→ハケメ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡黄褐色 ㊷	石英を含む。
44-10	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡黄褐色 ㊷ 灰褐色	角閃石・黒曜石を含む。
44-11	ユビオサエ→ハケナデ→ナデ・ヨコナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	石英・角閃石を含む。
44-12	ユビオサエ→ナデ	ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷ 灰褐色	石英・角閃石を含む。
44-13	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ハケナデ→ナデ	㊶ 褐色 ㊷	角閃石・黒曜石を含む。
44-14	ユビオサエ→ナデ	体部：ナデ 底部：ユビオサエ→ナデ	㊶ 褐色 ㊷	角閃石を含む。

図番号	調 整		色 調	備 考
	外 面	内 面		
44-15	体部：ユビオサエ→ナデ・ヨコナデ 底部：ユビオサエ→ケズリ→ナデ	ユビオサエ→板状工具による調整→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷ 淡灰褐色	石英・角閃石を含む。
44-16	ユビオサエ→ヨコナデ	ユビオサエ→ヨコナデ	㊶ 褐色 ㊷	角閃石を含む。
44-17	ハケナデ→ナデ・ヨコナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 黄褐色 ㊷	角閃石を含む。
44-18	ユビオサエ・ハケナデ→ヨコナデ		㊶ 褐色 ㊷	角閃石・石英を含む。
44-19	ユビオサエ→ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	㊶ 淡黄褐色 ㊷ 淡褐色	角閃石を含む。
44-20	ユビオサエ→ケズリ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	石英を含む。
44-21	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 褐色 ㊷ 淡褐色	
44-22	縦位のヘラナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 明褐色 ㊷ 淡褐色	角閃石を含む。
44-23	ナデ	ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	
44-24	ナデ	ナデ	㊶ 淡黄褐色 ㊷	ウンモを含む。
44-25	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	
44-26	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	
44-27	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 明褐色 ㊷	ウンモを含む。
44-28	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	ウンモを含む。
45-1	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 黄褐色 ㊷	角閃石を含む。
45-2	ユビオサエ→ケズリ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 褐色 ㊷ 暗灰褐色	内外面に黒斑が認められる。
45-3	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 褐色 ㊷	石英・黒曜石を含む。 外面に黒斑あり。
45-4	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	石英・角閃石を含む。 内外面に黒斑あり。
45-5	ユビオサエ→ケズリ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷ 暗灰褐色	角閃石を含む。
46-1	ヘラ切り→ナデ	ナデ	㊶ 淡黄褐色 ㊷	
46-2	ヘラ切り→ナデ	ナデ	㊶ 淡黄褐色 ㊷	
46-3	ナデ	ナデ	㊶ 淡黄褐色 ㊷	
46-4	ナデ	ナデ	㊶ 淡黄褐色 ㊷	
46-5	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷ 淡黄褐色	
46-6	格子タタキ	平行タタキ	㊶ 青灰色 ㊷	
46-7	平行タタキ	同心円タタキ	㊶ 青灰色 ㊷	
47-1	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 褐色 ㊷ 淡黄褐色	角閃石を含む。
48-1	ユビオサエ→ナデ		㊶ 褐色 ㊷	弥生中期。 充実脚台。
48-2	ハケメ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 黄褐色 ㊷ 淡褐色	石英を含む。
48-3	ナデ	ユビオサエ→ナデ	㊶ 淡褐色 ㊷	刻目内布目圧痕。 角閃石を含む。

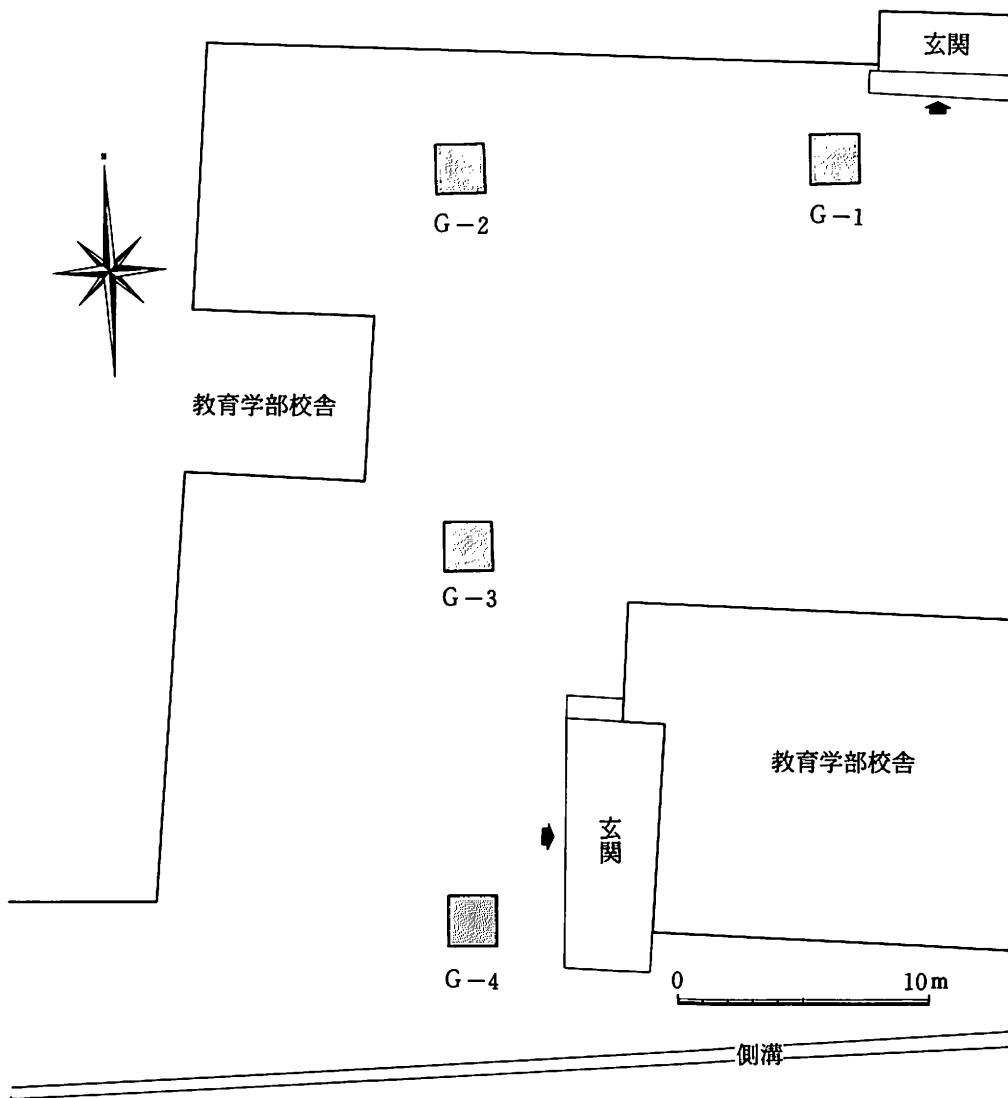
図番号	調 整		色 調	備 考
	外 面	内 面		
48-4	ヨコナデ	ナデ	②③ 明褐色	石英を含む。
48-5	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 淡褐色	角閃石を含む。
48-6	ユビオサエ→ナデ	ケズリ→ユビオサエ→ナデ	②③ 淡褐色	角閃石を含む。
48-7	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 白灰色 ④ 淡黄褐色	角閃石を含む。
48-8	ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 明褐色 ④ 淡灰褐色	
48-9	ケズリ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 暗褐色 ④ 明褐色	刻目内布目疔痕あり。
48-10	ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 灰褐色	内面下半に黒斑あり。 石英を含む。
48-11	ユビオサエ→ナデ	ハケナデ→ナデ	②③ 褐色 ④ 暗褐色	外面下半に黒斑あり。
48-12	ヨコナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 暗灰褐色 ④ 淡褐色	角閃石を含む。
48-13	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 淡褐色	
48-14	ナデ	斜位の強いナデ上げ→ナデ	②③ 暗褐色 ④ 淡褐色	
48-15	ユビオサエ→ナデ	ナデ	②③ 淡黄褐色	刻目内布目疔痕あり。
48-16	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 淡黄褐色	
48-17	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 淡褐色	角閃石を含む。
48-18	ナデ	ナデ	②③ 褐色	角閃石を含む。
48-19	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 淡黄褐色	角閃石・長石を含む。
48-20	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 淡黄褐色	角閃石を含む。
48-21	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 淡黄褐色	石英を含む。 内底面にスス付着。
48-22	ユビオサエ→ハケナデ→ヨコナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 淡褐色 ④ 褐色	石英・角閃石を含む。
48-23	ユビオサエ→ハケナデ→ヨコナデ	ユビオサエ→ケズリ→ナデ	②③ 淡黄褐色 ④ 灰褐色	角閃石を含む。
49-1	ナデ	ナデ	②③ 淡明褐色 ④ 淡褐色	内面に黒斑あり。
49-2	ケンマ	ケンマ	②③ 丹塗り ④ 淡灰褐色	
49-3	ユビオサエ→ナデ	ナデ	②③ 淡黄褐色	内面に紋り痕あり。
49-4	ユビオサエ→ナデ・ヘラナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 褐色	
49-5	ユビオサエ→ナデ	ナデ	②③ 淡黄褐色	内面に紋り痕あり。
49-6	ユビオサエ→ナデ?	ユビオサエ→ナデ?	②③ 淡黄褐色	内外面磨耗
49-7	ナデ	ユビオサエ→ナデ?	②③ 淡褐色	
49-8	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 褐色	内底面のユビオサエ痕は比較的明瞭に残る。
49-9	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	②③ 淡黄褐色	角閃石を含む。
50-2	ナデ	ナデ	②③ 淡黄白色	底面ヘラ切り
50-3	平行タタキ	平行タタキ	②③ 青灰色	

付. 教育学部の調査

工学部の本調査中、教育学部でも校舎新築工事が計画されているのでその事前調査をして欲しいとの申し出が、鹿児島大学から鹿児島県教育委員会にあったため、工学部の調査と並行して8月4日から6日まで調査を実施した。

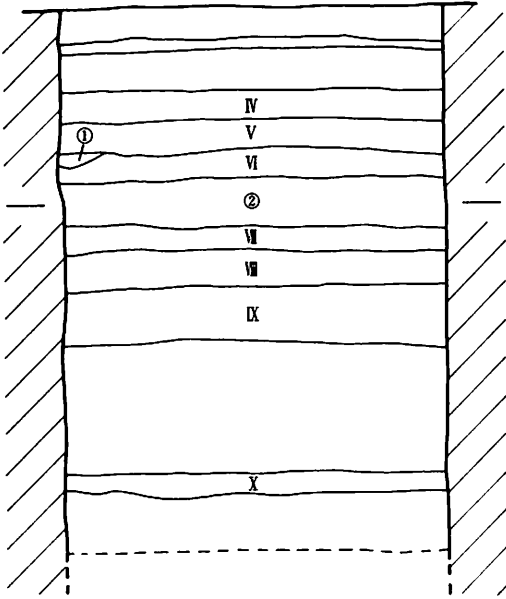
1. 調査の概要

調査は建設予定地内に任意に起点を定め、南北方向に15m間隔で2m×2mのグリッドを3か所



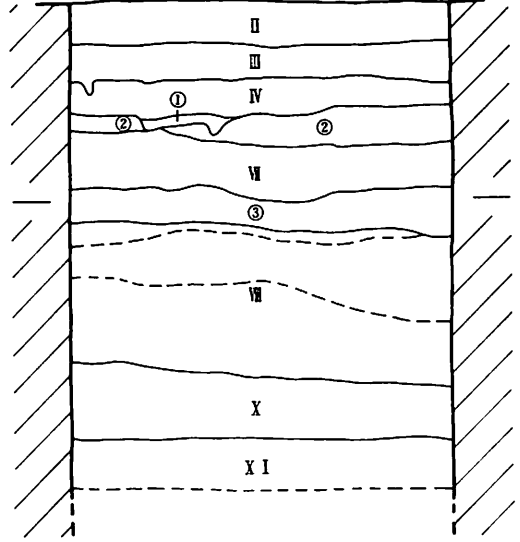
第52図 教育学部試掘調査グリッド位置図 (1 / 300)

G 1 北壁



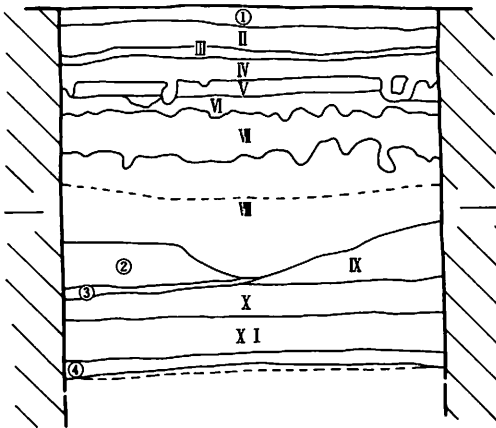
- ①軽石層
- ②赤褐色粘質土層 (鉄分を含む)

G 2 北壁



- ①軽石ブロック (鉄分を含む)
- ②粘質土層 (1mm前後の軽石粒を含み粘性弱い)
- ③赤褐色粘質土層

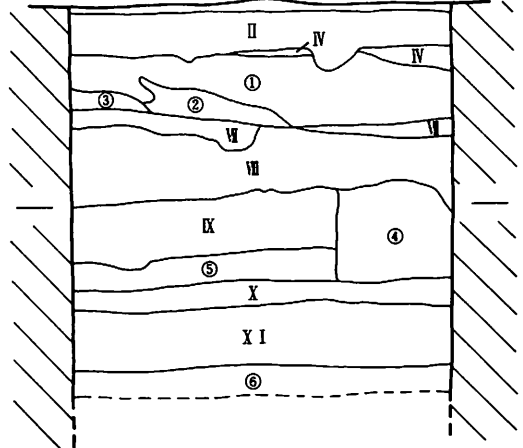
G 3 東壁



- ①ガラス
- ②砂質土
- ③軽石層
- ④砂質土層

※ I ~ XI は基本土層を示す。
 ※※ L. H. = 4.00m

G 4 東壁



- ①細砂質土層 (鉄分を含む)
- ②軽石ブロック
- ③砂質土
- ④砂質土 (鉄分を含む)
- ⑤砂質土層
- ⑥砂質土層

0 2 m

第53図 教育学部試掘調査グリッド土層図 (1/40)

調査し、南よりグリッド4 (G4), グリッド3 (G3), グリッド2 (G2) と呼んだ。さらにこの方向と直交し、グリッド2の東側15mのところにグリッド1 (G1) を設定した (第52図)。調査面積は16m²である。

層序は次のようになっている (第53図)。

I層 (表土) 灰色粘質砂, II層 灰色砂質土, III層 マンガン粒を多く含む灰色粘質砂, IV層 鉄分を含む黄褐色砂質土, V層 マンガン粒を多く含む灰褐色砂質土, VI層 鉄分を含む黒褐色砂質土, VII層 若干軽石を含む黒色砂質土, VIII層 軽石を多く含む茶褐色砂質土, IX層 若干軽石を含む白っぽい砂質土, X層 鉄分を含む赤褐色砂質土, XI層 こまかい白っぽい砂, 以上の層を見るとII層からVI層までは泥炭層を含む層となっており, 鉄分とマンガン粒が互層となっていることから水田の様相を示している。時期はIII層に15世紀頃の青磁片が, V層に古墳時代の遺物が含まれていることから, 古墳時代からつづく水田跡だろう。VII層からIX層までは軽石を含んでおり, 河川敷あるいは海岸線付近ではないかと思われる。X層以下は何層にも重なる砂層独特の堆積がみられ, 砂浜の様相を呈している。

各グリッドとも出土遺物は少なく, 包含層もV層に古墳時代の希薄なものがあっただけであった。中世の遺物も少量だけが出土している。

グリッド4でVI層の黒褐色砂質土がはいった2本の並行するU字溝が検出された。北西から南東へ向いており, 東側のものが幅1.3m, 深さ10cm, 西側のものが幅20cm, 深さ5cmである。古墳時代頃の水路であろう。

2. 出土土器 (第54図)

口縁部直下に雷文帯を施す青磁碗の口縁部片である。磁胎は淡灰色を呈し, 緑色の釉がかかる。



第54図 教育学部試掘調査グリッド1出土土器 (1/2)

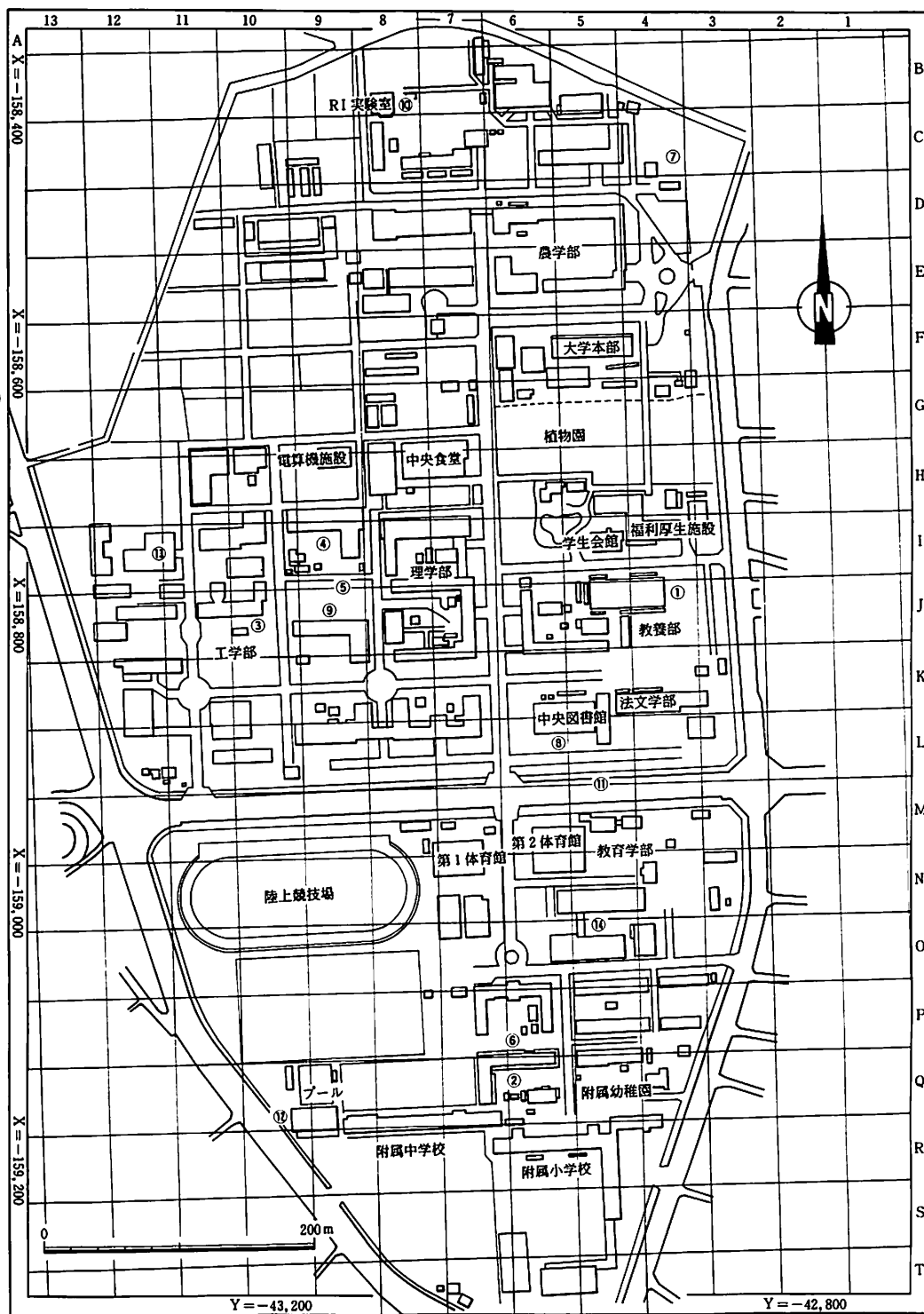
圖 版



- ①工学部機械工学科校舎建設予定地（昭和55年調査）
- ②教育学部試掘調査（昭和55年調査）
- ③附属中学校敷地内住居址（昭和38年調査）
- ④ I・J-9・10区（昭和60年調査）
J-9区（昭和61年調査）
- ⑤釘田第1地点（昭和50年調査）
I・J-4区（昭和61年調査）
- ⑥釘田第8地点（昭和51年調査）
- ⑦B-8区（昭和61年調査）
- ⑧神川堤第1地点
- ⑨水町遺跡（昭和59年調査）
Q-6・7区（昭和61年調査）

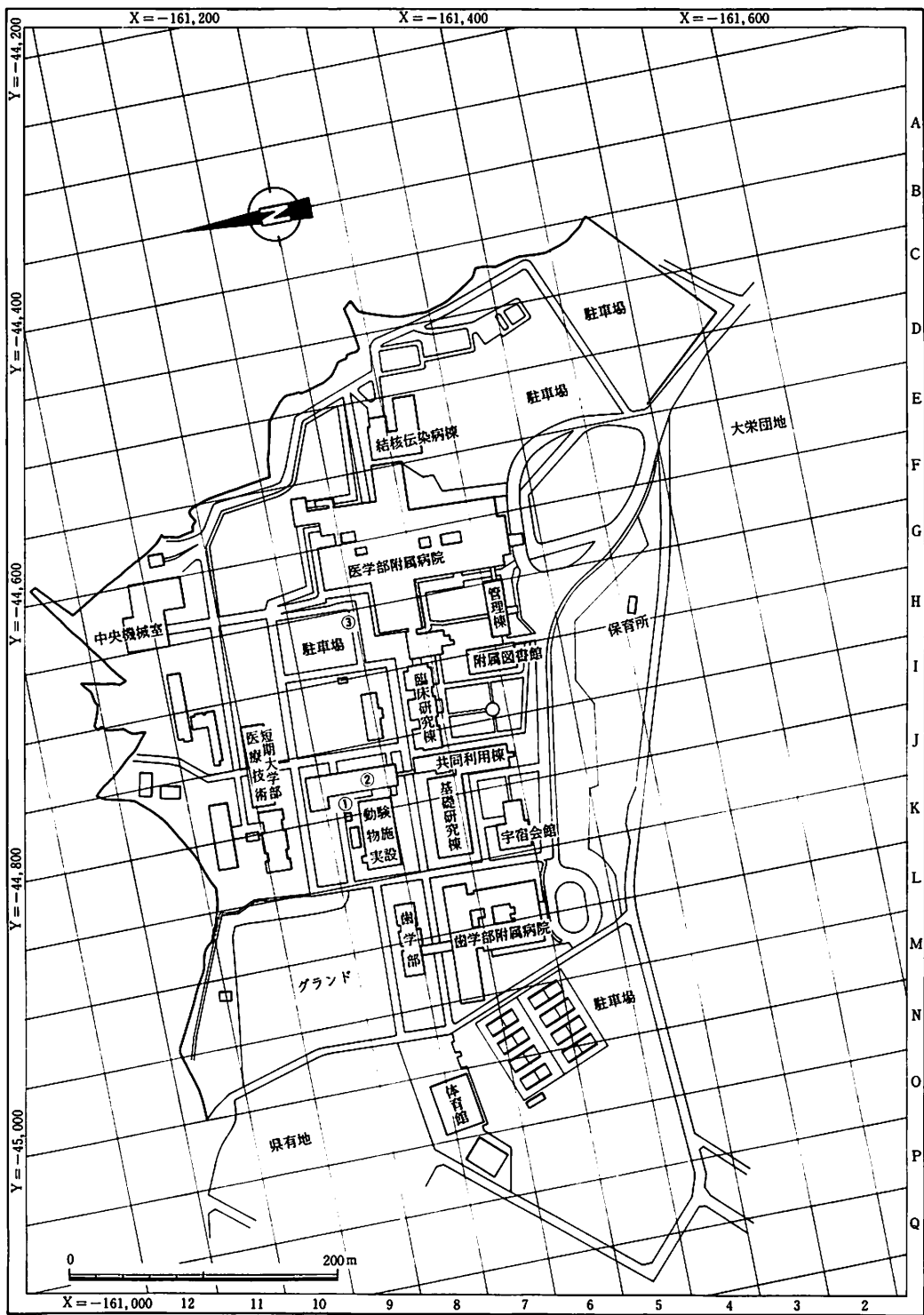
図版2 鹿児島大学都元団地構内図

1/5000



- | | | |
|-----------------|------------------|------------------|
| ① 試掘調査 (第I部第2章) | ⑥ 立合調査 (第I部第4章) | ⑪ 立合調査 (第II部第6章) |
| ② 試掘調査 (第I部第3章) | ⑦ 立合調査 (第I部第4章) | ⑫ 発掘調査 (付編1) |
| ③ 立合調査 (第I部第4章) | ⑧ 立合調査 (第I部第4章) | ⑬ 発掘調査 (付編3) |
| ④ 立合調査 (第I部第4章) | ⑨ 発掘調査 (第II部第2章) | ⑭ 試掘調査 (付編3) |
| ⑤ 立合調査 (第I部第4章) | ⑩ 試掘調査 (第II部第4章) | |

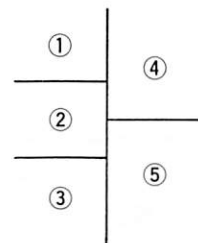
図版3 鹿児島大学宇宿団地構内図 (1/5000)

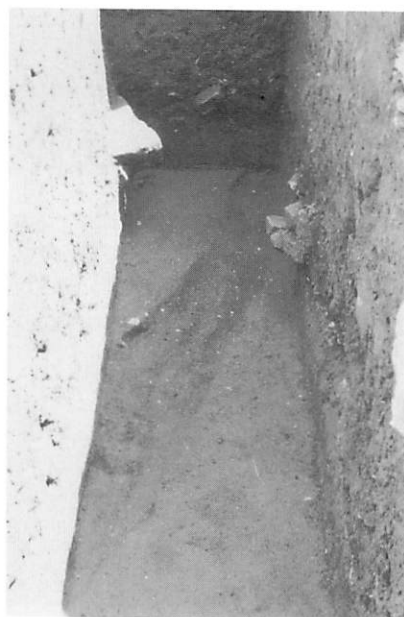
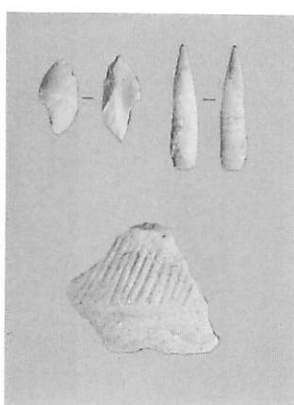


- ① 発掘調査 (第Ⅱ部 第3章)
- ② 試掘調査 (第Ⅱ部 第5章)
- ③ 立合調査 (第Ⅱ部 第6章)

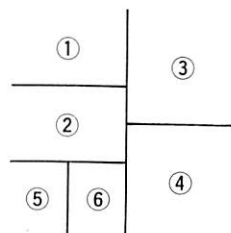


- ①調査前状況（東方向から）
- ②調査風景（西上から）
- ③No. 3 トレンチ北壁土層断面
- ④No. 3 トレンチⅥ層遺物出土状況
- ⑤No. 3 トレンチⅥ層遺物出土状況（近景）

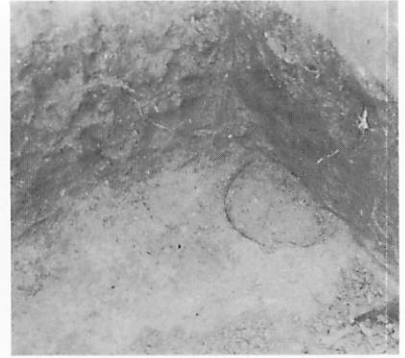
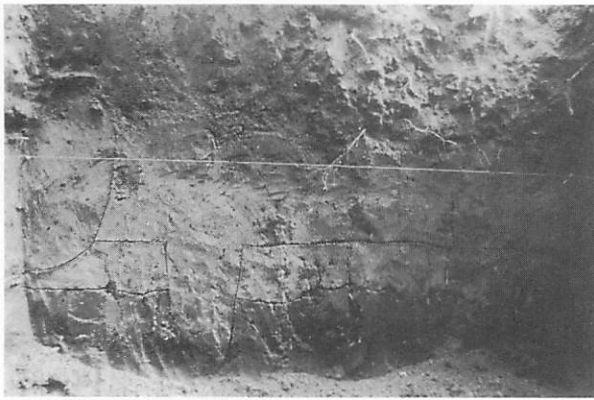




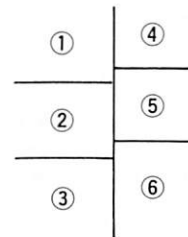
- ①調査区全景（西側から）
- ②No. 3 トレンチⅢ層上面検出ピット
- ③No. 1 トレンチ西壁土層断面
- ④No. 2 トレンチ溝状遺構検出状況
- ⑤土器出土状況
- ⑥出土遺物



図版 6 理学部校舎新営電気工事に伴う立合調査(マンホールA)



- ①マンホールA掘削部全景
- ②マンホールA掘削部東壁土層
- ③マンホールA掘削部西壁土層
- ④柱穴検出状況
- ⑤柱穴
- ⑥マンホールA掘削部南壁土層





①マンホールC北壁土層

②マンホールC南壁土層

③マンホールC掘削部南西隅における住居址確認状況

①

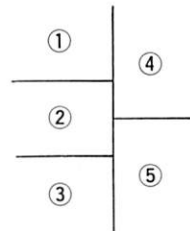
②

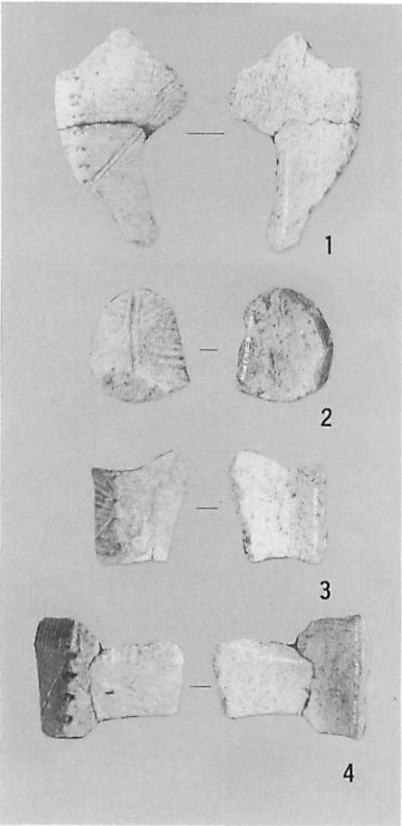
③

図版 8 郡元団地 J-9 区における発掘調査

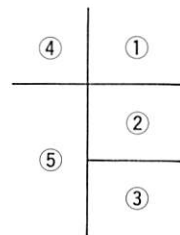


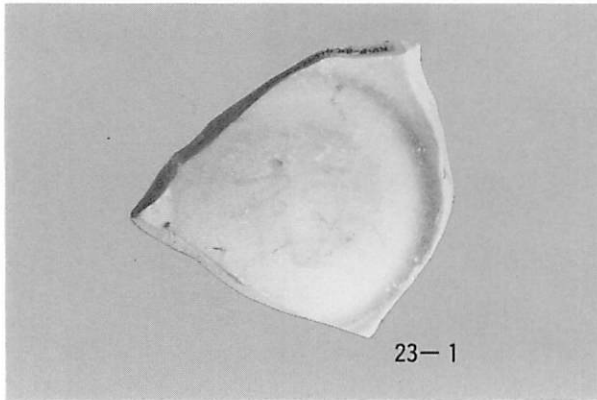
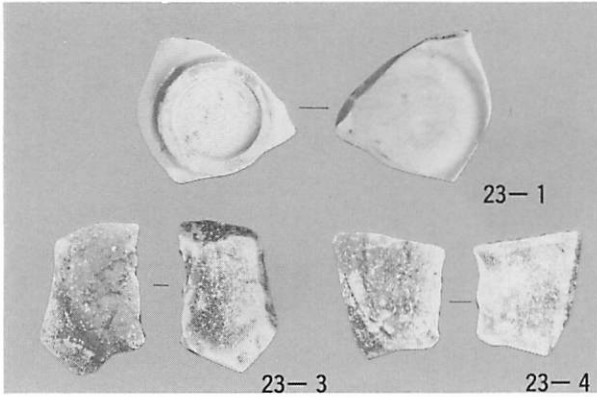
- ①調査区全景（北東方向から）
- ②VI層上面検出住居址（南方向から）
- ③南壁土層断面
- ④攪乱坵完掘状況
- ⑤VI層上面検出住居址（近景）



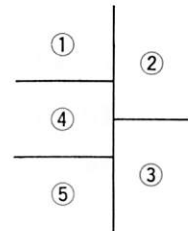


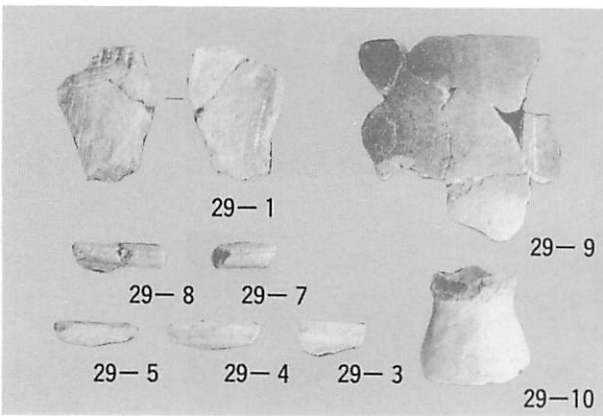
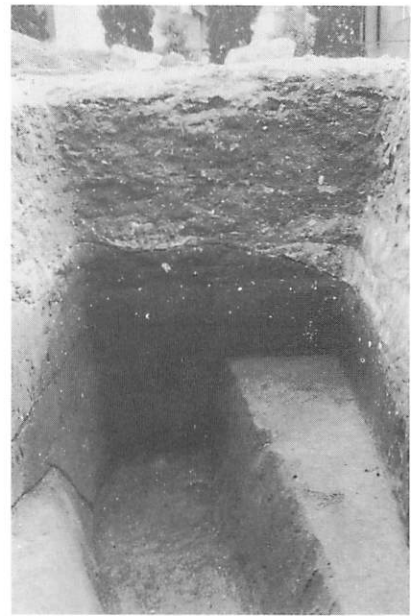
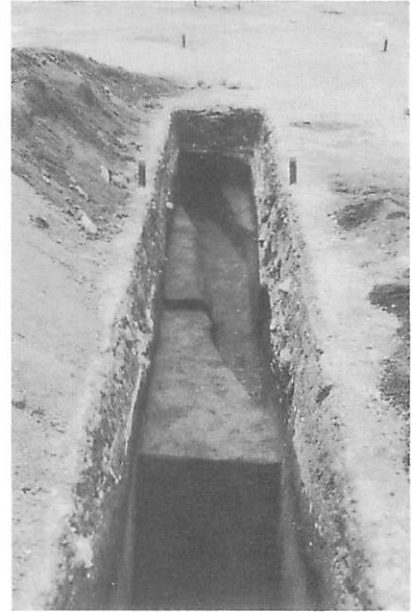
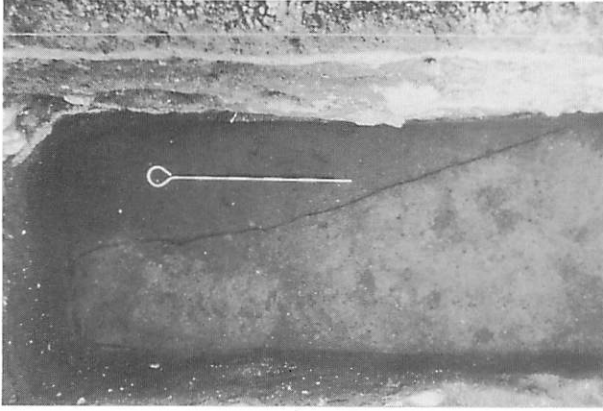
- ①南壁土層断面
- ②住居址様遺構検出状況
- ③住居址様遺構（南から）
- ④住居址様遺構（東から）
- ⑤出土遺物



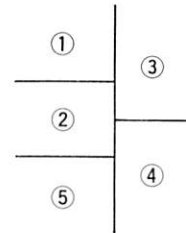


- ①調査前状況（東方向から）
- ②No. 1 トレンチ水道管検出状況（北方向から）
- ③No. 3 トレンチ溝状遺構検出状況（東方向から）
- ④出土遺物
- ⑤出土遺物（23-1の拡大）



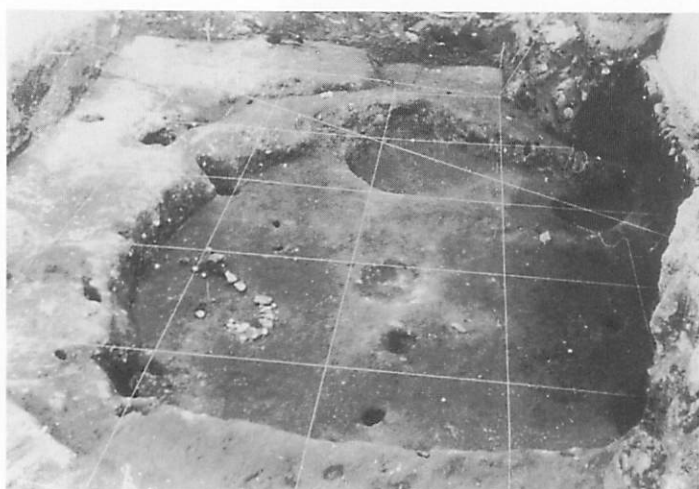


- ①溝状遺構検出状況
- ②成川式土器出土状況
- ③溝状遺構完掘状況（北方向から）
- ④No. 1 トレンチ拡張部南壁土層断面
- ⑤出土遺物

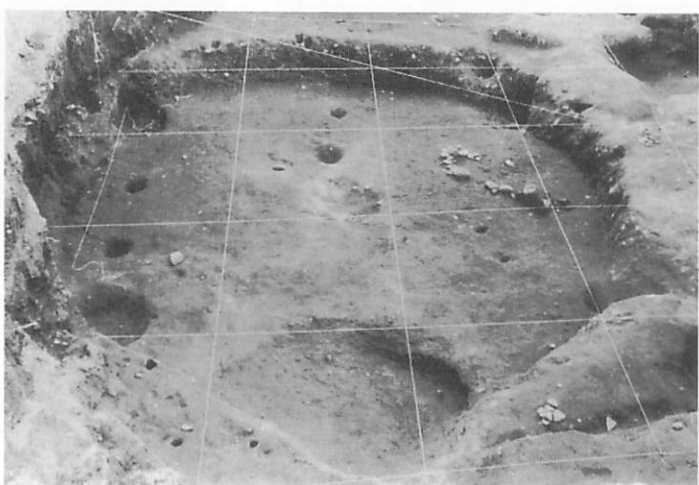




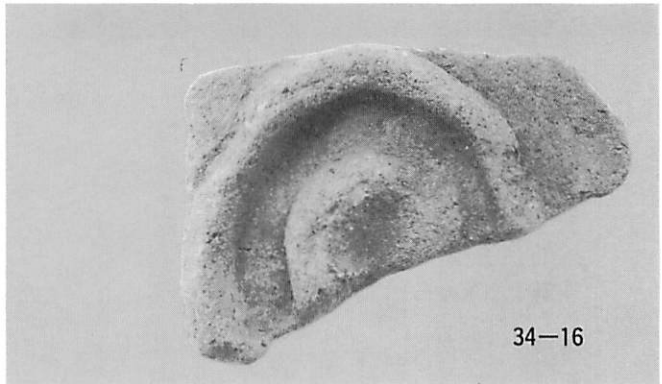
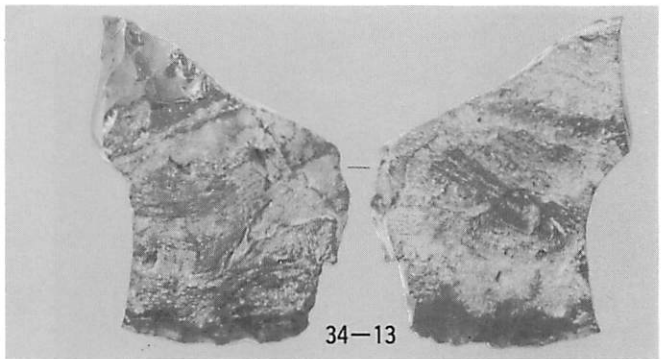
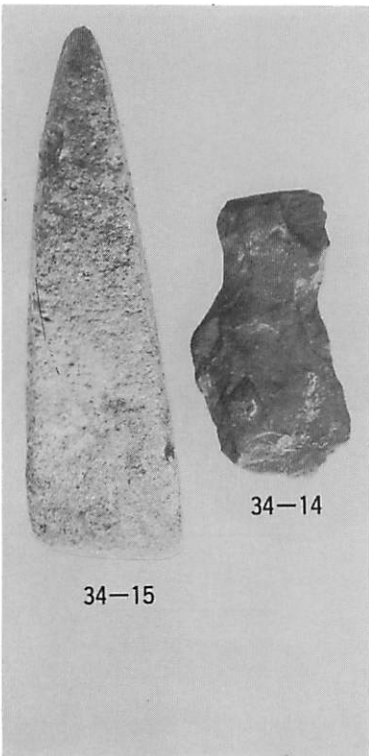
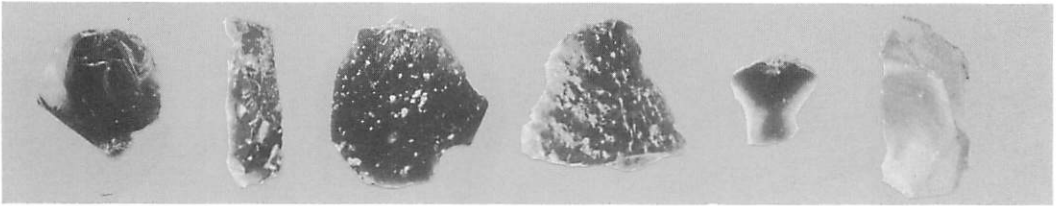
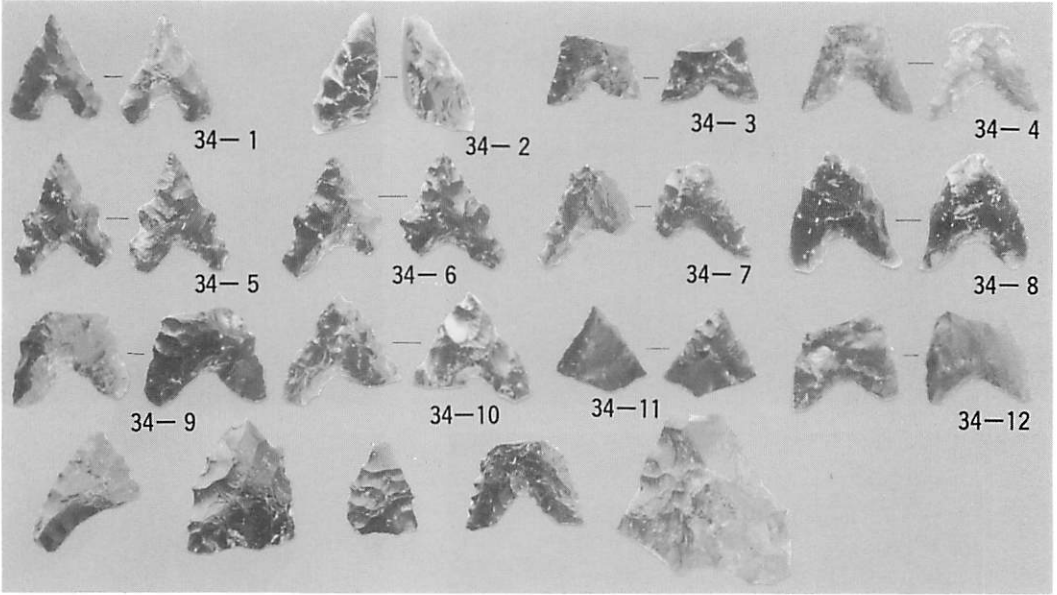
東から



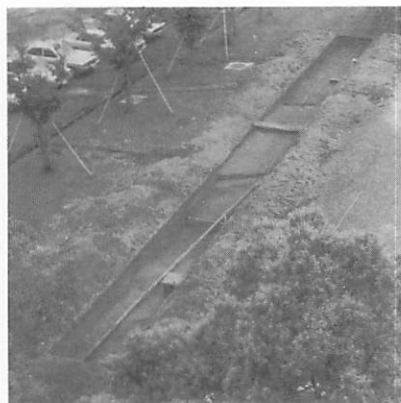
北から



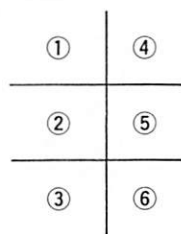
南から

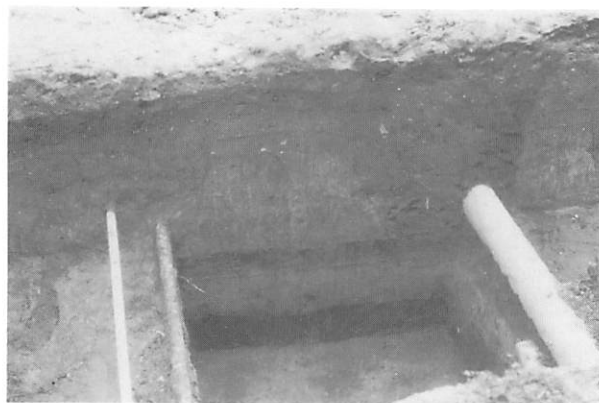


図版 14 工学部機械工学科校舎建設に伴う試掘調査(1)



- ①調査区全景 (南から)
- ②G～J-5区 (東から)
- ③C～E-5区 (東から)
- ④C～I-2区 (東から)
- ⑤溝1 (東から)
- ⑥溝5 (北から)





① B-6区西壁土層

② H・I-2区北壁土層

③ H-5区北壁土層

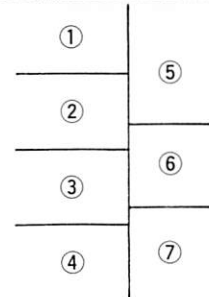
①

②

③

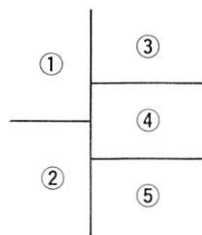


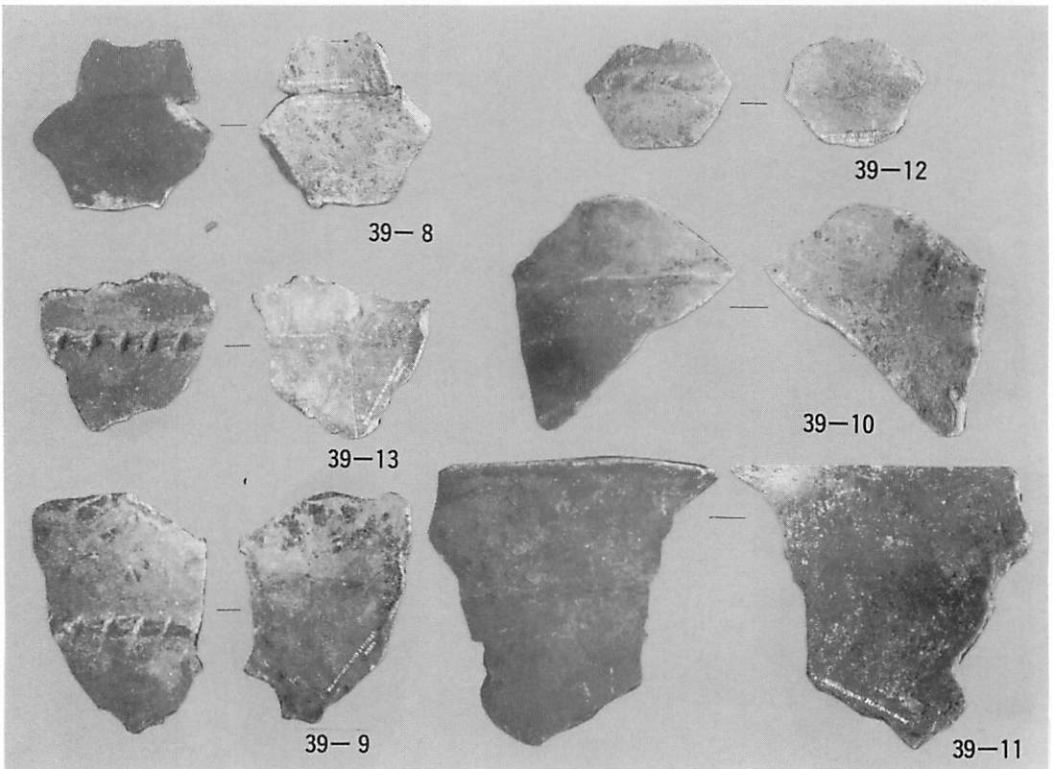
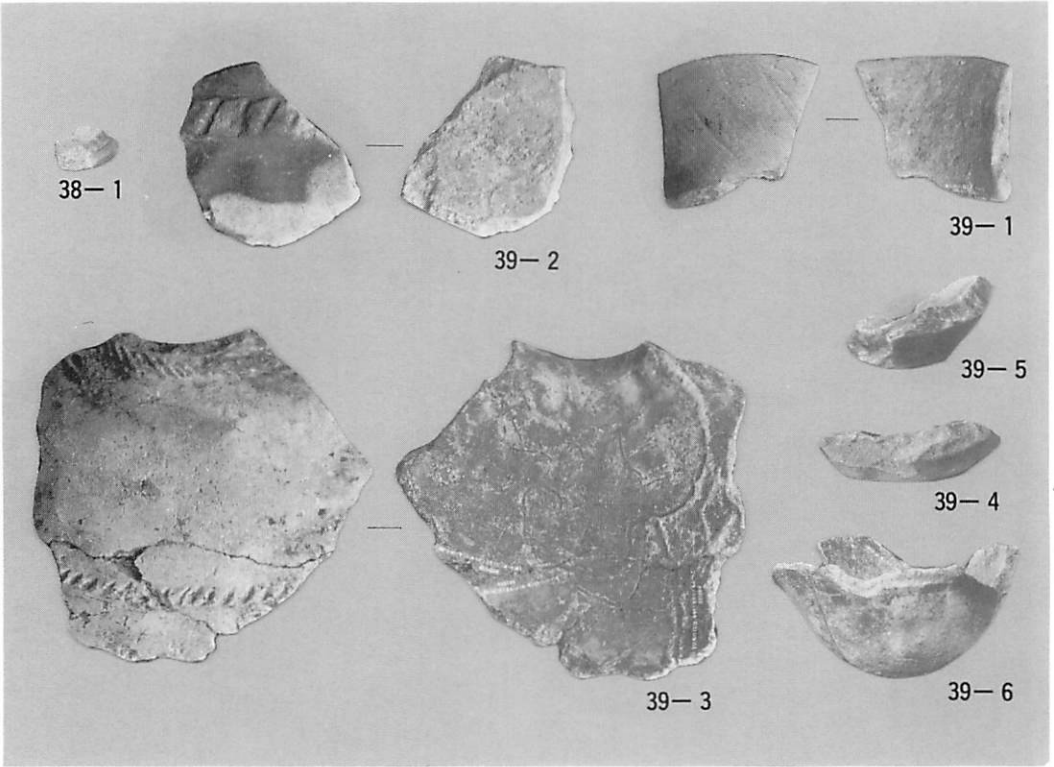
- ①調査区全景（南から）
- ②調査区全景（東から）
- ③調査区全景（北から）
- ④溝3埋土断面
- ⑤溝4（北から）
- ⑥溝4（南から）
- ⑦溝4（北から）

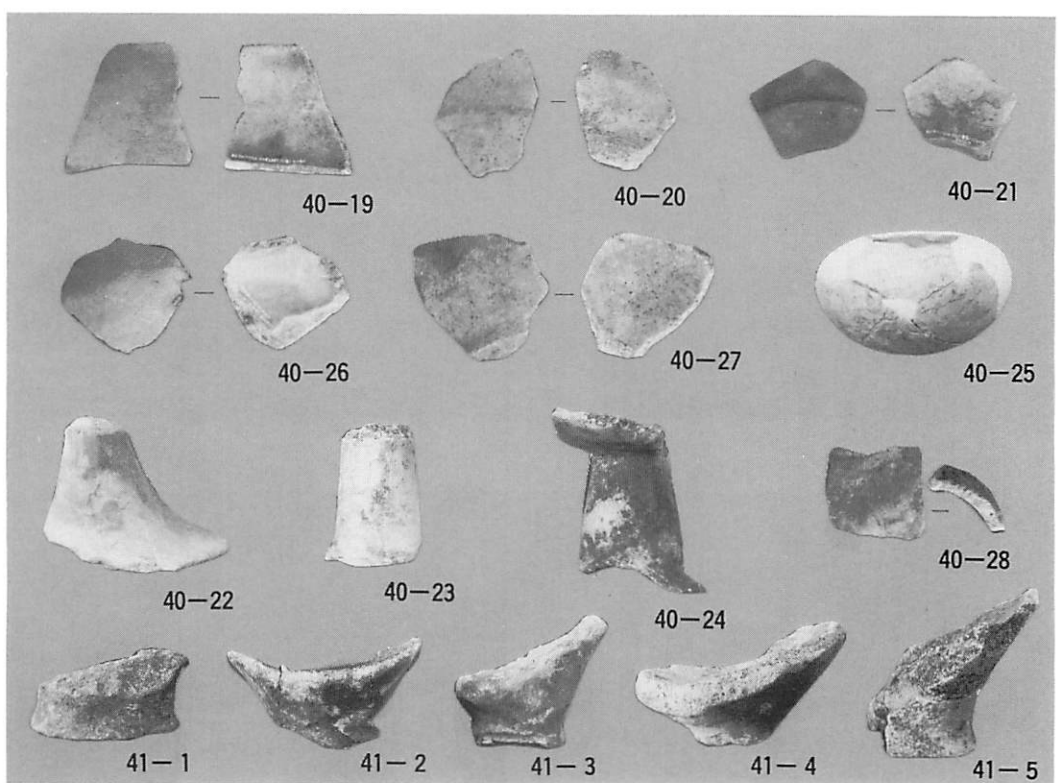
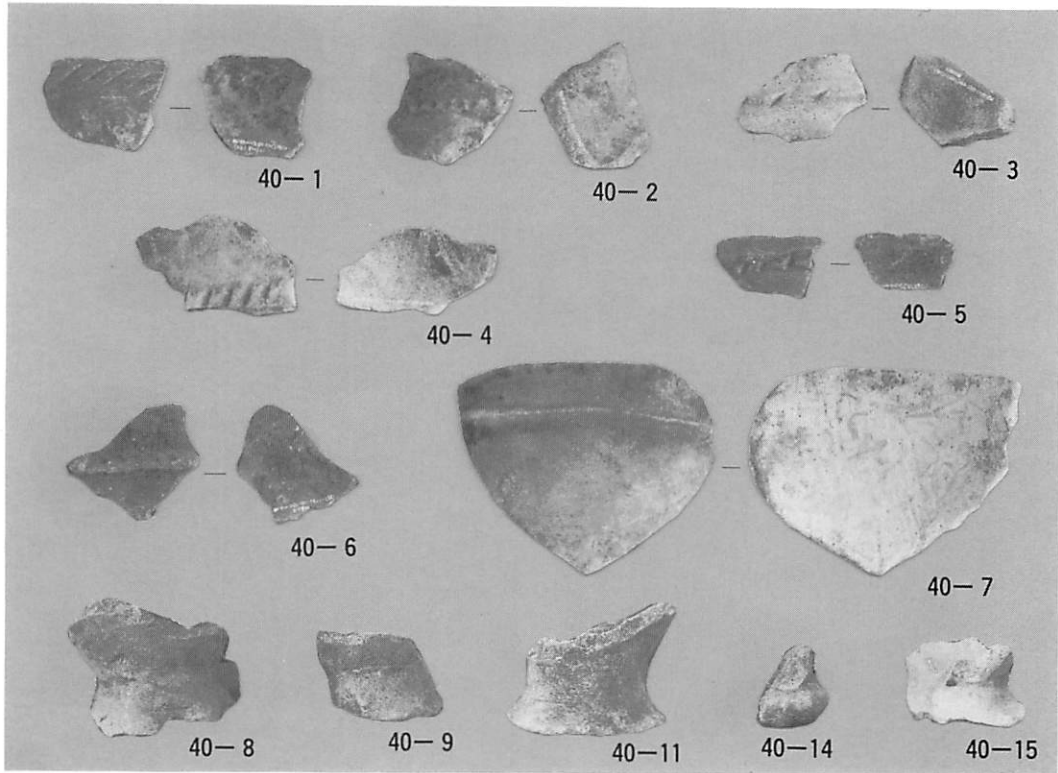


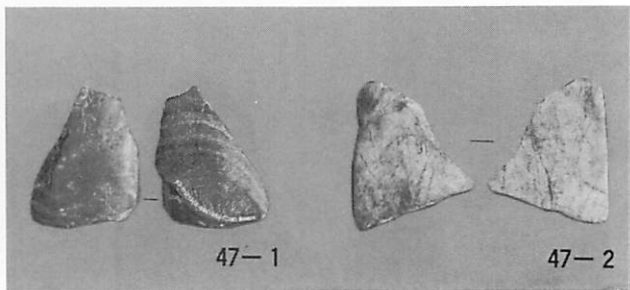
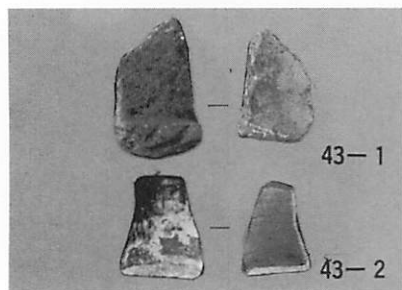
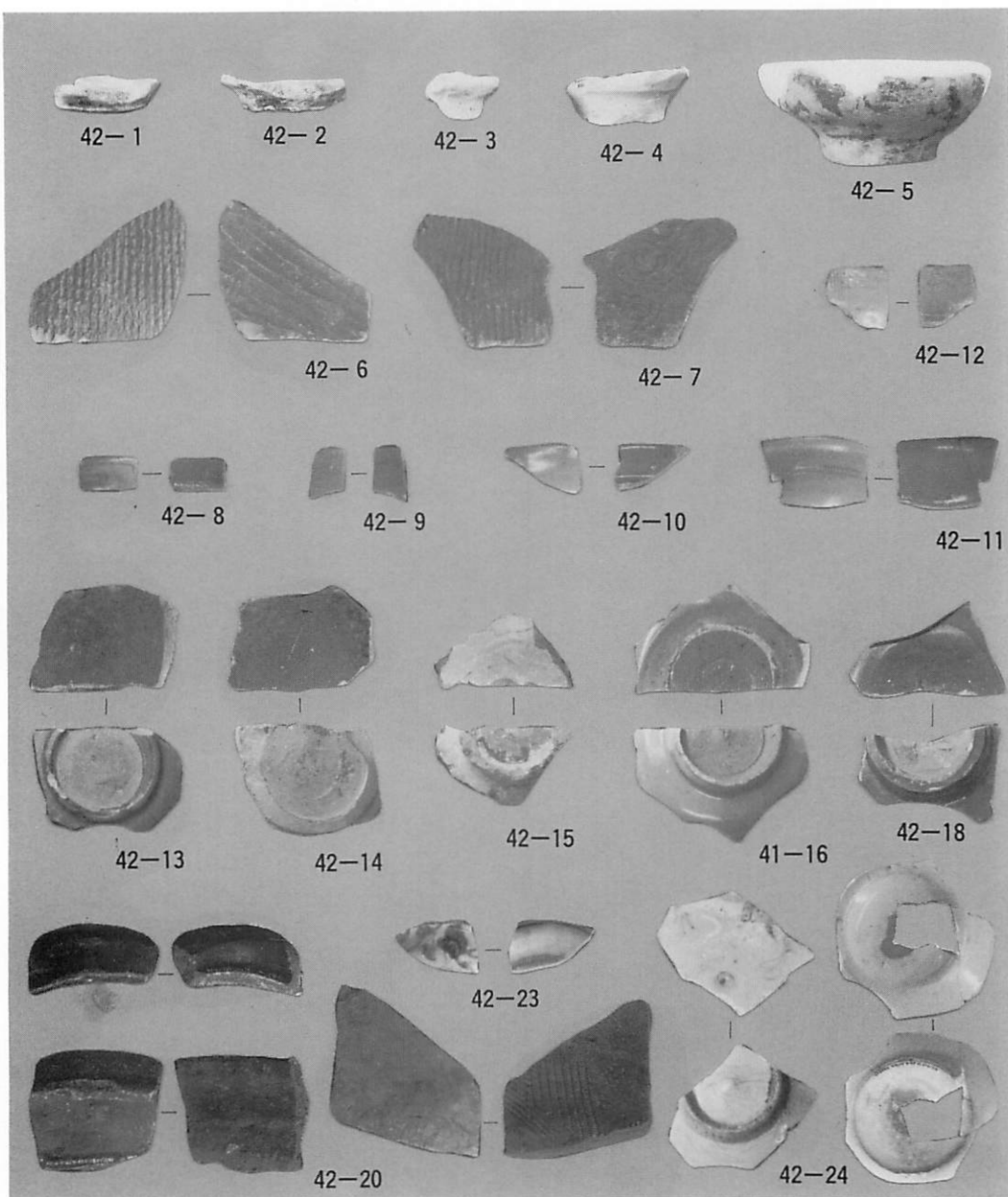


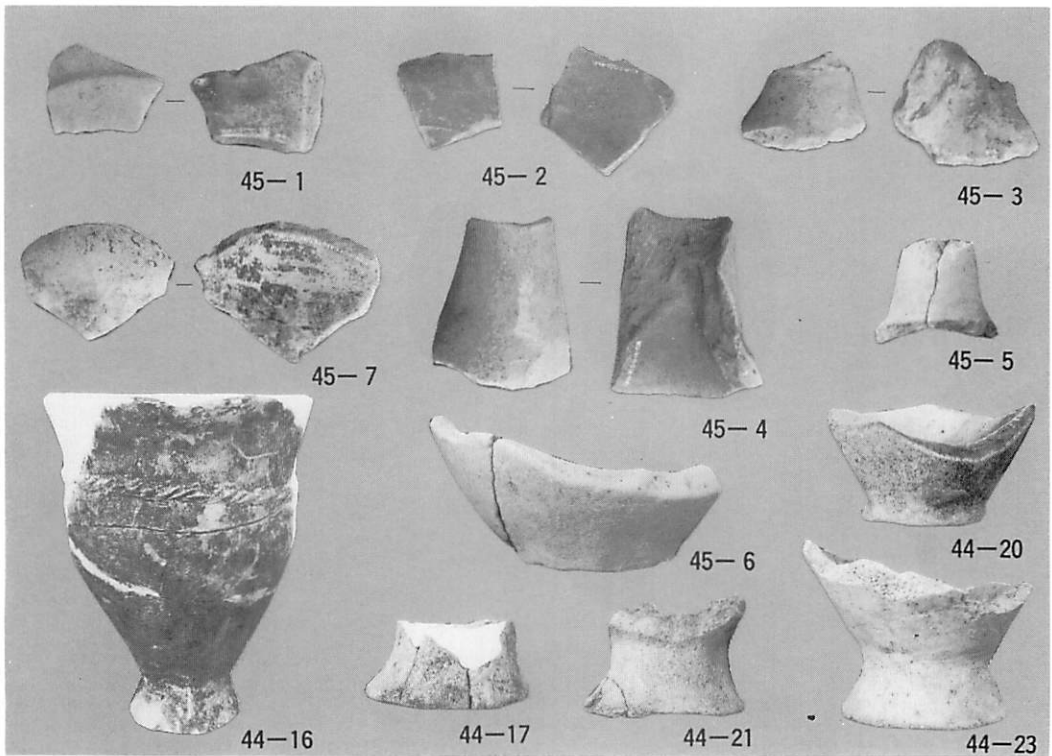
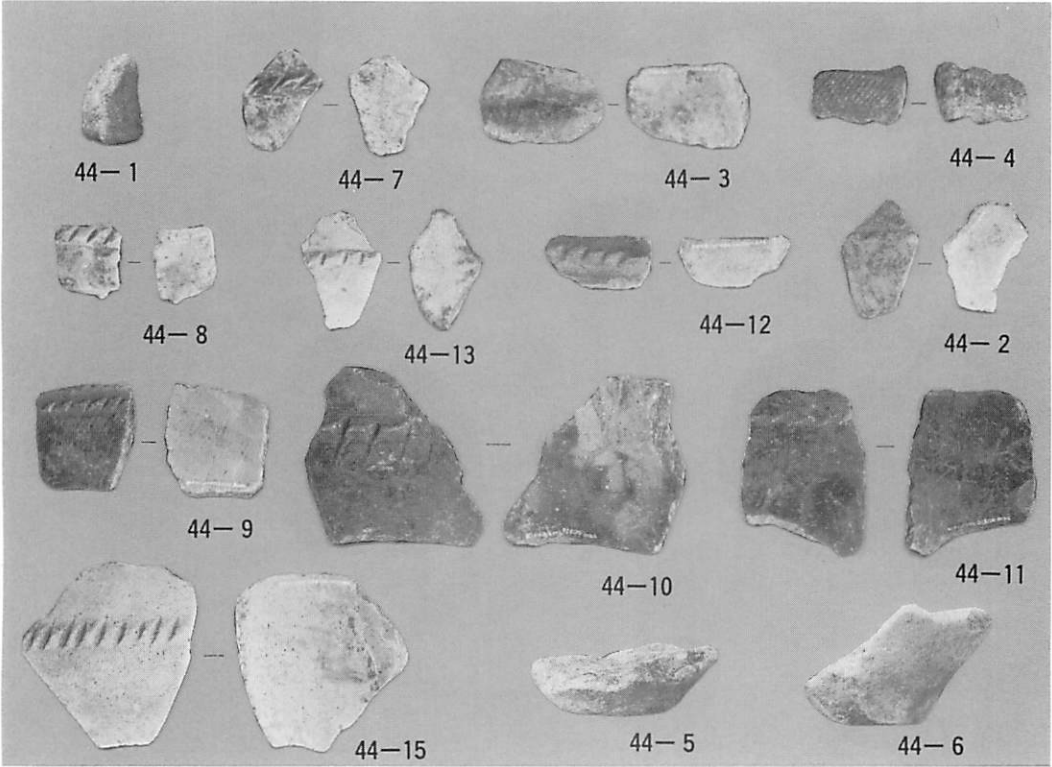
- ①調査区全景（南から）
- ②G 1 北壁土層図
- ③G 2 北壁土層図
- ④G 4 東壁土層図
- ⑤G 3 東壁土層図

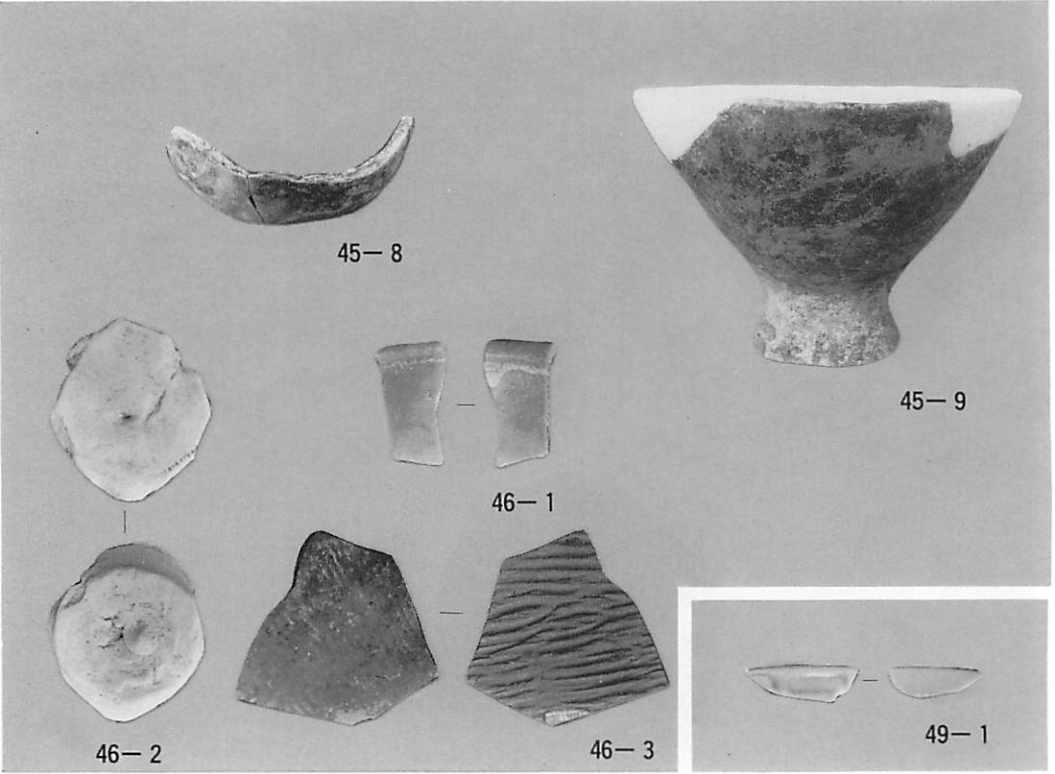












鹿兒島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ

1987年3月

編集
発行

鹿兒島大学埋蔵文化財調査室
鹿兒島市郡元一丁目21-24

印刷

(有)朝日印刷
鹿兒島市上荒田町854-1